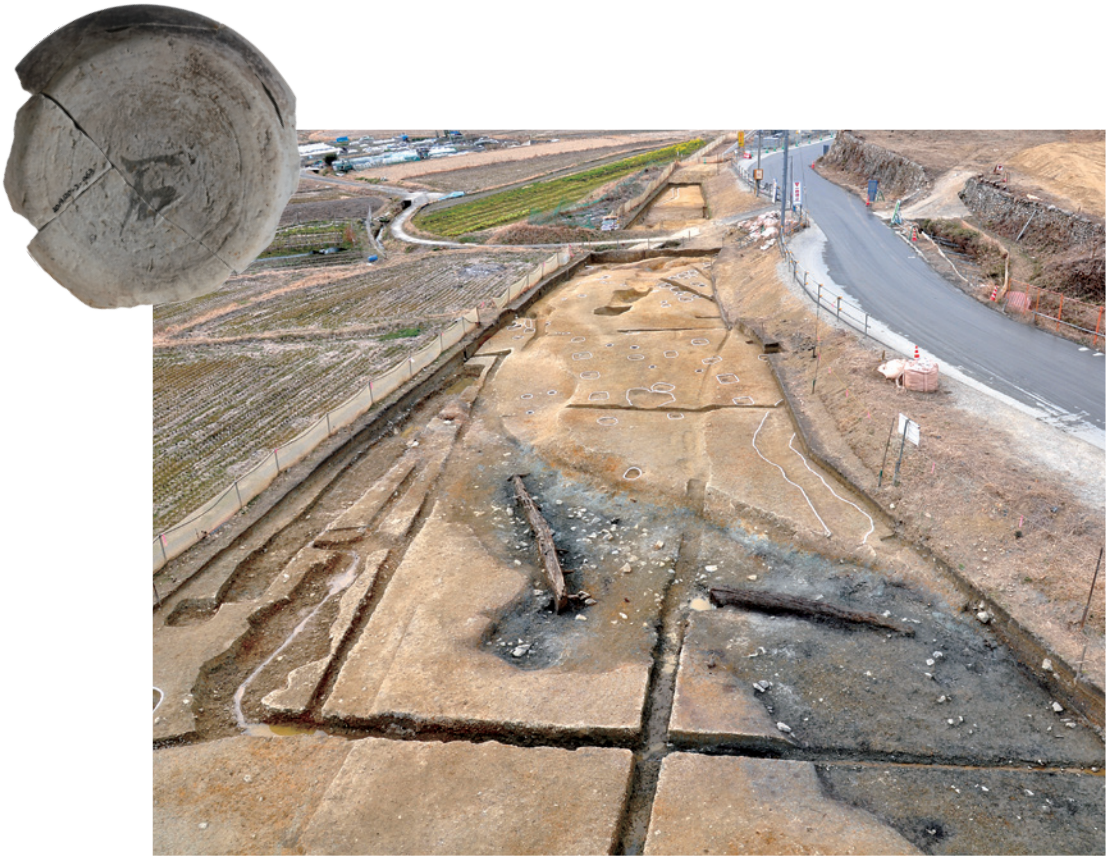
兵庫県文化財調査報告　第 496 冊

川西市

石道才谷・堂ノ後遺跡

― 新名神高速道路 箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―



平成 30（2018）年 1 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

川西市

石道才谷・堂ノ後遺跡

― 新名神高速道路 箕面～神戸間（兵庫県域）建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 ―

平成 30（2018）年 1 月

兵 庫 県 教 育 委 員 会

空中写真１（南から）

空中写真２（上が北）

空中写真３（北から）

空中写真４（南から）

遺跡遠景（南西から）

調査区全景（東から）

木簡

墨書土器（石・道）

例　　言

1　本書は、兵庫県川西市石道に所在する、石道才谷・堂ノ後遺跡の発掘調査報告書である。

2　本調査は、新名神高速道路　箕面～神戸間(兵庫県域)建設に伴うもので、西日本高速道路株式会社関西支社新名神兵庫事務所の依頼に基づき、兵庫県教育委員会を調査主体として、(公財)兵庫県まちづくり技術センターに調査を委託して、平成25(2013)年度に実施した。また整理事業は、同事務所からの委託を受けて、平成27(2015)～29(2017)年度に、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部に委託して実施した。

確認調査　　実施機関：兵庫県立考古博物館
　　平成24年12月５日
　　実施機関：兵庫県立考古博物館
本発掘調査　　実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
　　平成25年12月20日～平成26年３月10日
　　工事請負：株式会社植伸建設
出土品整理作業
　　実施機関：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
　　平成27年４月１日～平成30年１月31日

4　本書の編集・執筆は、(公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部久保弘幸が担当した。

5　出土した遺物および作成した写真・図面類は、兵庫県教育委員会(兵庫県立考古博物館)で保管している。

6　遺構面の基本図化(1/50)は、株式会社イビソク神戸営業所に委託して空中写真測量によって実施した。遺物写真撮影は、株式会社クレアチオに委託して実施した。

7　本遺跡で出土した木製遺物の樹種同定は株式会社パレオ・ラボに、種実類の同定はパリノ・サーヴェイ株式会社に、それぞれ委託して実施し、その成果は本書に収録している。

8　本書中の図で示した方位は、調査地点における座標北(一部で真北を併用)による。また、標高は東京湾平均海水準を基準とした。

9　発掘調査及び報告書の作成にあたっては、下記の方々よりご指導を頂戴した。記して謝意を表したい。

(敬称略・順不同)

渡辺晃宏、馬場　基、山本　崇、山本祥隆、大河内隆之(以上奈良文化財研究所)、池田征弘(兵庫県立考古博物館)、大本朋弥(兵庫県まちづくり技術センター)

10　本書中で用いた地層および土器の色調の記号番号は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』によっている。

11　挿図中で用いた遺構の略称は次のとおりである。Ｐ：柱穴　SK：土坑　SD：溝　SX：その他の遺構

本 文 目 次

第１章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境 …… 1
第２節　歴史的環境 …… 2

第２章　調査の概要
第１節　調査に至る経緯 …… 5
第２節　調査の概要 …… 5
第３節　整理事業の概要 …… 7

第３章　遺構と遺物
第１節　本発掘調査区の層序と遺構面 …… 8
第２節　遺構と遺物 …… 9

第４章　自然科学的分析
第１節　石道才谷・堂ノ後遺跡出土木製品の樹種 …… 20
第２節　石道才谷・堂ノ後遺跡出土種実同定 …… 27

第５章　結　語 …… 31

報告書抄録

巻 頭 図 版

図版１　空中写真１（南から）　空中写真２（上が北）
図版２　空中写真３（北から）　空中写真４（南から）
図版３　遺跡遠景（南西から）　調査区全景（東から）
図版４　出土遺物（木簡・墨書土器）

挿 図 目 次

第１図　遺跡の位置 …… 1
第２図　石道才谷・堂ノ後遺跡と周辺の遺跡（1/35,000） …… 3
第３図　土錘の長さ・重量分布 …… 14
第４図　旧河道出土の縄文土器 …… 17
第５図　２区出土の銭 …… 19

表 目 次

第１表　石道才谷・堂ノ後遺跡調査一覧 …… 5
第２表　掲載遺物一覧 …… 34～43
第３表　樹種同定結果一覧 …… 20
第４表　樹種同定結果詳細 …… 23
第５表　種実同定結果一覧 …… 29
第６表　墨書の位置 …… 32
第７表　墨書文字一覧 …… 32

写 真 目 次

写真１　石道才谷・堂ノ後遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真（１） …… 24
写真２　石道才谷・堂ノ後遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真（２） …… 25
写真３　石道才谷・堂ノ後遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真（３） …… 26
写真４　出土種実類 …… 30

図 版 目 次

図版１　路線範囲・調査区位置図
図版２　本発掘調査区位置図
図版３　調査区平面図
図版４　１区南壁・西壁土層断面図
図版５　２区土層断面図（１）
図版６　２区土層断面図（２）
　　２区東壁・南壁土層名
図版７　２区旧河道部深掘断面図
図版８　掘立柱建物跡平面図・断面図
図版９　遺構平面図・断面図（１）
　　SK207・208・226・227・228・229
図版10　遺構平面図・断面図（２）
　　SX210・SD222
図版11　出土遺物（土器１　遺構・旧河道出土）
図版12　出土遺物（土器２　旧河道出土）
図版13　出土遺物（土器３　旧河道出土）
図版14　出土遺物（土器４　旧河道出土）
図版15　出土遺物（土器５　旧河道・包含層出土）
図版16　出土遺物（土器６　包含層出土）
図版17　出土遺物（土器７　包含層出土）
図版18　出土遺物（土器８　墨書土器）
図版19　出土遺物（土器９　墨書土器）
図版20　出土遺物（木製品１　旧河道出土）
図版21　出土遺物（木製品２　旧河道出土）
図版22　出土遺物（木製品３　旧河道出土）
図版23　出土遺物（木製品４　旧河道出土）
図版24　出土遺物（木製品５　旧河道出土）
図版25　出土遺物（木製品６　旧河道出土）
図版26　出土遺物（木製品７　旧河道出土）
図版27　出土遺物（金属器・石製品）
図版28　出土遺物（石器）

写 真 図 版 目 次

写真図版１　上　１区全景（東から）
　　下　１区全景（東から）
写真図版２　上　１区全景（西から）
　　中　１区SD1（北東から）
　　下　１区西壁断面（東から）

写真図版３　上　１区谷部付近南壁断面(北から)
中　１区谷部付近(北西から)
下　１区谷部深掘断面(南から)
写真図版４　上　調査区全景(東から)
下　２区全景(西から)
写真図版５　上　２区全景(南東から)
中　２区掘立柱建物跡(西から)
下　２区掘立柱建物跡(北西から)
写真図版６　上　２区２上段断面(西から)
下　２区２中段断面(西から)
写真図版７　上　２区２下段断面(西から)
下　２区中段旧河道断面(西から)
写真図版８　上　２区旧河道北壁断面(南から)
下　２区旧河道北壁断面(南から)
写真図版９　上　２区旧河道北壁断面(南から)
下　２区旧河道内の大型材出土状況(南西から)
写真図版10　上　２区旧河道内の大型材(南から)
下　２区旧河道内大型材加工面(南から)
写真図版11　上　２区東壁断面(西から)
下　２区南壁断面(北から)
写真図版12　上　２区旧河道深掘断面(南西から)
下　２区旧河道深掘断面(南西から)
写真図版13　２区包含層および旧河道内遺物出土状況
写真図版14　２区旧河道内遺物出土状況
写真図版15　上　２区SK208断面(北から)
中　２区SK207断面(北から)
下　２区SD222断面(西から)
写真図版16　上　２区SX210検出状況(西から)
中　２区SX210断面(西から)
下　２区SK226断面(西から)
写真図版17　上　２区SK227断面(南西から)
中　２区SK228断面(西から)
下　２区SK229断面(南西から)
写真図版18　２区掘立柱建物跡SB01柱穴断面
写真図版19　上　石道遺跡東方丘陵への里道
下　石道遺跡東方丘陵の峠付近
写真図版20　調査風景
写真図版21　出土遺物(１)確認調査
１区・２区遺構出土土器
写真図版22　出土遺物(２)２区遺構・旧河道出土土器
写真図版23　出土遺物(３)２区遺構・旧河道出土土器
写真図版24　出土遺物(４)２区遺構・旧河道出土土器
写真図版25　出土遺物(５)２区遺構・旧河道出土土器
写真図版26　出土遺物(６)２区遺構出土土器
写真図版27　出土遺物(７)２区遺構出土土器
写真図版28　出土遺物(８)２区包含層出土土器
写真図版29　出土遺物(９)２区包含層出土土器
写真図版30　出土遺物(10)２区旧河道・包含層出土土器
写真図版31　出土遺物(11)
写真図版32　出土遺物(12)２区緑釉陶器・灰釉陶器中世の土器・陶磁器
写真図版33　出土遺物(13)
写真図版34　出土遺物(14)製塩土器
写真図版35　出土遺物(15)土錘(１)
写真図版36　出土遺物(16)土錘(２)
写真図版37　出土遺物(17)墨書土器(１)
写真図版38　出土遺物(18)墨書土器(２)
写真図版39　出土遺物(19)墨書土器(３)
写真図版40　出土遺物(20)墨書土器(４)
写真図版41　出土遺物(21)墨書土器(赤外線写真)
写真図版42　出土遺物(22)墨書土器(赤外線写真)
写真図版43　出土遺物(23)墨書土器(赤外線写真)
写真図版44　出土遺物(24)木製品(１)
写真図版45　出土遺物(25)木製品(２)
写真図版46　出土遺物(26)木製品(３)
写真図版47　出土遺物(27)木製品(４)
写真図版48　出土遺物(28)木製品(５)
写真図版49　出土遺物(29)木製品(６)
写真図版50　出土遺物(30)石器(１)
写真図版51　出土遺物(31)石器・石製品
写真図版52　出土遺物(32)金属器・縄文土器

第１章　遺跡の位置と環境

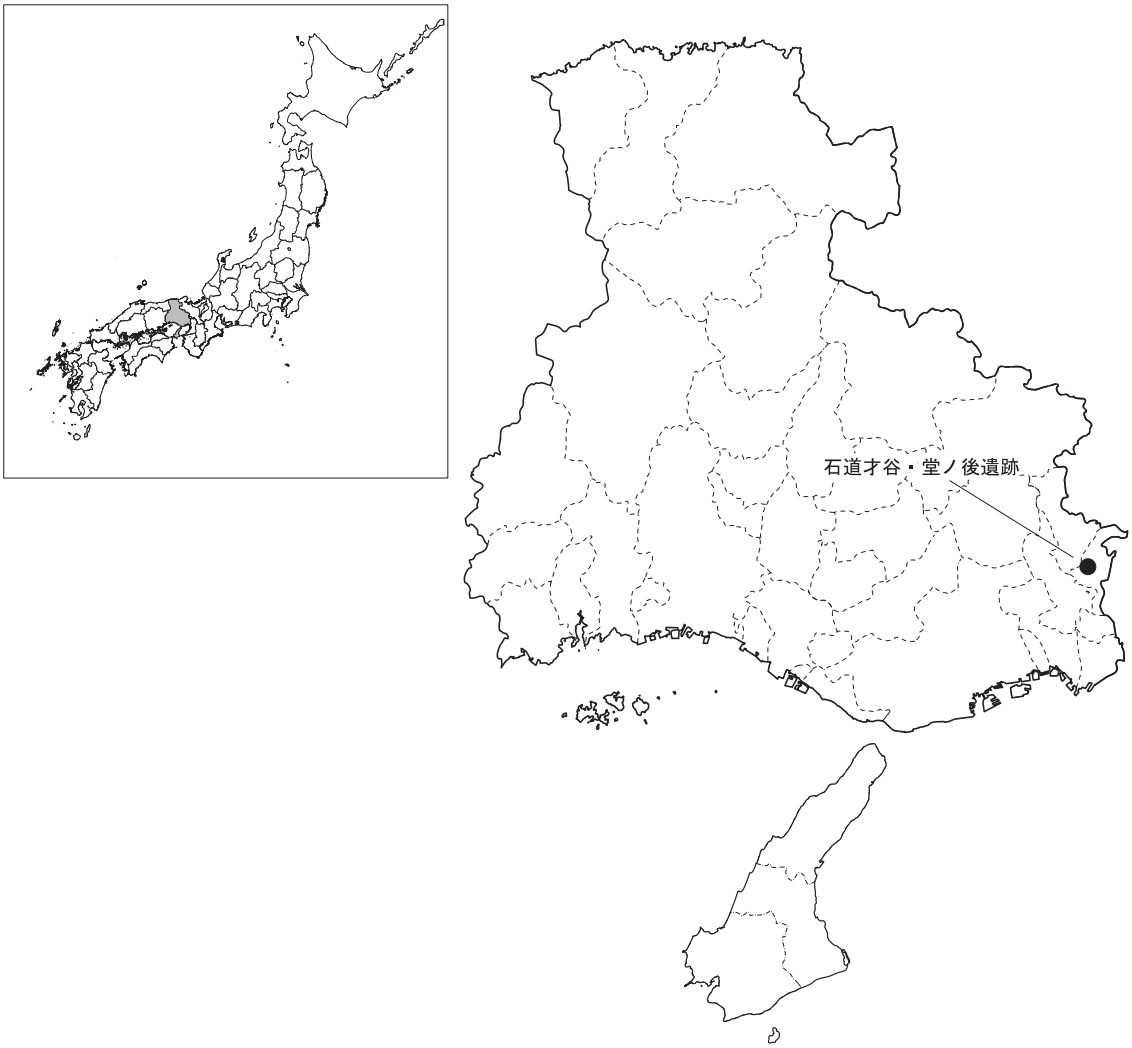
第１節　地理的環境

石道才谷・ 堂ノ後遺跡が所在する川西市は、 兵庫県東部に位置し、 古代の国制では摂津国の西半にあたる。東は大阪府との府県境、北は猪名川町、西は三田市・宝塚市、南は伊丹市にそれぞれ接する。

丹波山地内の大野山(猪名川町)付近に発する猪名川は、摂津の山峡を縫うように猪名川町を南流して、川西市に至る。 川西市南部からは大阪府との府県境をなし、 大阪国際空港の西を流下して新淀川河口付近で大阪湾に注ぐ。

猪名川は、川西市北部の六石山(198.8m)付近では、標高180m前後の小山塊を縫うように蛇行して流下する。石道才谷・堂ノ後遺跡は、これら小山塊に囲まれた一辺約500mの略三角形を呈する小盆地内に位置している。この小盆地は、周辺の山塊から派生した尾根に囲まれて、中央部が緩やかに窪んでおり、遺跡は、この小盆地の北側にある尾根先端に形成された微高地上に立地している。

従って石道才谷・堂ノ後遺跡からの眺望は、北東側およそ180度は背後の尾根に遮られ、また南西側180度も、 小盆地とその背後の山塊が目に入るのみという閉鎖的なものとなっているが、 同時にこれが本遺跡の一つの特徴とも言える。



第１図　遺跡の位置

第２節　歴史的環境

【後期旧石器時代】

西摂地域の後期旧石器時代遺跡についての知見は、これまでのところ多いとは言い難い。川西市内では加茂遺跡で原位置を遊離したナイフ形石器・角錐状石器が出土しているほか、六つ塚遺跡、豆坂古墳群で遺物が出土しているとされるが、その詳細は明らかではない(日本旧石器学会編　2010)。

武庫川流域までを含めて俯瞰すれば、伊丹市、西宮市、芦屋市、三田市などに当該期の遺跡分布が知られているが、残念ながら石器群が原位置を保って出土した事例は、三田市溝口遺跡以外に見当たらない(古代學協会　1986)。兵庫県の西摂地域は、チャートを主要石材とする丹波地域と、サヌカイトを用いる大阪湾沿岸地域との中間に位置し、大阪府側も併せみると、両石材がともに利用されている状況がうかがえる。ただしこうした石材利用が、後期旧石器時代の中でどのように変遷したのか、あるいはそれぞれの石材を保持する集団が、どのような分布圏をもっていたのかについては明らかではない。また後期旧石器時代のある段階では、瀬戸内技法を基盤とする石器群が見られる。

また後期旧石器時代の終末に位置づけられる細石刃石器群については、三田市乾遺跡でわずかに出土しているが、他に当該期の遺跡は見いだされておらず、今後の調査に期待する部分が大きい。

【縄文時代】

川西市域の縄文時代遺跡は、これまでに市域南部で、後期～晩期に属する加茂遺跡、下加茂遺跡、栄根遺跡が知られているに過ぎなかったが(兵庫県教育委員会　2011)、第二名神高速道路に伴う発掘調査では、西畦野下ノ段 ・井戸遺跡で10基の土坑とともに、前期の北白川下層式、後期の北白川上層式、晩期の突帯文土器等が出土している(兵庫県教育委員会　2016)。

六甲山系南麓の西摂地域に視野を広げると、芦屋市山芦屋遺跡、朝日ヶ丘遺跡から早期・前期の土器が出土しているほか、同市業平遺跡では前期の石器製作跡が検出されている。また尼崎市猪名庄遺跡では後期の土器が、藻川川床遺跡、猪名川川床遺跡でも晩期の土器が出土している。

一方で、三田市域では30か所近い縄文時代遺跡が知られており、草創期の有茎尖頭器を出土した木器荘園遺跡・北台遺跡・平方遺跡・有鼻遺跡・下西山遺跡が知られているが、いずれも原位置を遊離した資料である(三田市　2010)。また梶下ヶ谷遺跡では、縄文時代前期末～中期初頭の陥し穴群が検出されている(兵庫県教育委員会2000)。

また加茂遺跡では、縄文時代晩期の土器、石冠などが出土している。

【弥生時代】

弥生時代になると、川西市域南部に加茂遺跡、下加茂遺跡、小戸遺跡などの集落が形成されるようになる。中でも加茂遺跡は、20万m^2におよぶ範囲をもつ大集落で、200次を超える発掘調査によって、環濠を巡らせた中心部と、その周辺に広がる居住域、墓域などを含む集落構造が明らかになりつつある。

北部の多田盆地では、標高200m以下の丘陵上で３か所の集落遺跡がみつかっている。市域中部、大阪府池田市との境界にある鼓ヶ滝遺跡では、丘陵上で溝などの遺構が検出され、高地性集落存在の可能性が指摘されている。

弥生時代後期には、加茂遺跡の集落規模が縮小するものの、これに代わるように小戸遺跡、栄根遺跡、下加茂遺跡などの集落が成立する。 明治期に加茂遺跡に近い場所で出土した、 突線紐式の栄根銅鐸は、この時期に属する。また北部でも西畦野で弥生時代の集落が成立する。

【古墳時代】

猪名川上流域においては、多田盆地東側の丘陵に松ヶ芝１～３号墳、上ヶ芝１・２号墳が存在するが、その内容は明らかではない。またこれ以北には古墳は知られていない。当該期の集落などはまだ知られていないが、多田盆地内に基盤となる集落が存在した可能性があろう。

川西市域南部では、栄根遺跡において大規模な集落が知られている。この地域で特筆すべきは、勝福寺古墳であろう。６世紀前半に築かれた40mの前方後円墳で、後円部に２基の横穴式石室、前方部に１基の木棺直葬をもち、画文帯神獣鏡、象嵌をもつ太刀などが出土しており、この地域を代表する古墳である。豆坂古墳群も後期の古墳群である。

第２図　石道才谷・堂ノ後遺跡と周辺の遺跡（兵庫県遺跡地図1/35,000より作成）

１石道才谷・堂ノ後遺跡　２西畦野下ノ段・井戸遺跡　３東畦野遺跡　４山下城址　５山下遺跡　６西向散布地　７新田城址　８厳険遺跡　９御坊山北遺跡　10御坊山遺跡　11円明寺遺跡　12片の明神境内遺跡　13赤松坑道群　14多田地区間歩群　15肝川樋ノ上坑道群A　16肝川樋ノ上坑道群B　17肝川樋ノ上坑道群C　18庵ノ谷散布地　19上天田散布地　20肝川旧神社跡　21カイチ遺跡　22北小谷墓地石造品群　23肝川観音堂石造品群　24奥井谷古墓　25奥井谷坑道群　26猪渕遺跡　27広根遺跡　28安養寺境内石造品群　29牛若山墓地遺跡　30小西・釜床遺跡　31上野古宮遺跡　32西ノ垣遺跡　33和田遺跡　34宮垣内遺跡　35原遺跡　36善福寺遺跡　37建ヲサ遺跡　38安楽寺裏山石造品群　39紫合・柏梨田条里遺構　40三ツ原墓地石造品群　41小堂ノ上遺跡　42井ハノ谷南遺跡　43井ハノ谷遺跡　44紫合遺跡　45嵯峨畑遺跡　46北ノ町遺物散布地　47南田原遺跡　48北田原・南田原条里遺構　49桶川遺跡　50向大道旧道　51肝川戸隠神社境内遺跡

【奈良時代以降】

律令期の遺跡はやはり市域南部が中心で、加茂、栄根、下加茂、小戸各遺跡で、当該期の集落が知られている。また発掘調査によって奈良時代の瓦が出土し、南北朝期にも寺院として存在したことが確認されている栄根寺廃寺がある。

市域北部での当該期の遺跡は、これまでほとんど知られておらず、日本後紀に記述のある畝野牧が、西畦野付近に比定されていた。今回の発掘調査によって、石道才谷・堂ノ後遺跡は、奈良時代におけるこの地域を代表する遺跡として位置づけられることとなった。

源満仲が多田に移住してこれを領したのは10世紀後半のことであるが、満仲によって建立された多田院は中世に至るまで継続し、金堂・常行堂・法華堂・塔などを備えた天台系の伽藍であった。

中世には、多田荘を中心とした地域の開発に伴い、市域中部～北部に多くの集落遺跡が成立する。新名神高速道路建設に先立つ調査によって、広根遺跡、観音寺遺跡、猪渕遺跡など多くの中世集落遺跡が調査され、当該期の状況が明らかになりつつある。

参考文献

日本旧石器学会編　2010 『日本列島の旧石器時代遺跡―日本旧石器(先土器・岩宿)時代遺跡データベース―』

兵庫県教育委員会　2016 『西畦野下ノ段・井戸遺跡』

兵庫県教育委員会　2011 『兵庫県遺跡地図』

兵庫県教育委員会　2000 『北摂ニュータウン内遺跡調査報告書Ⅷ　梶下ヶ谷遺跡』

三田市　2010 『三田市史』 第８巻　考古編

第2章　調 査 の 概 要

第１節　調査に至る経緯

今回の発掘調査は、西日本高速道路株式会社(NEXCO西日本)が実施する、新名神高速道路　箕面～神戸間(兵庫県域)建設に先立つものである。兵庫県教育委員会では、平成10(1998)年度に、事業計画に基づいて、対象地(神戸市～川西市)の分布調査を実施した。この分布調査によって遺物が採集され、本遺跡は遺物散布地(№５地点)として周知され、兵庫県教育委員会は事業地内に埋蔵文化財が存在するとした回答をおこなった。

平成20(2008)年度には、一部の設計変更区間について改めて分布調査が実施され、平成10(1998)年度に埋蔵文化財包蔵地として調査対象地とされた範囲の一部に、新たな調査対象範囲が追加された。

№５地点における確認調査は、西日本高速道路株式会社関西支社新名神兵庫事務所長の依頼(平成24年11月21日付　関兵事第1257号)に基づき、兵庫県教育委員会によって実施された。ただしこの確認調査では、家屋が存在する住宅敷地については除外された。この確認調査によって、奈良時代の遺構が検出され、また遺物が多数出土した範囲について、本発掘調査が必要であると判断された。

翌平成25(2013)年度に、確認調査の成果を受けた西日本高速道路株式会社関西支社新名神兵庫事務所長の依頼(平成25年９月10日付　関兵事第956号)に基づき、兵庫県教育委員会は(公財)兵庫県まちづくり技術センターに委託して本発掘調査を実施することとなった。またこの本発掘調査に合わせて、平成24(2012)年度の確認調査で除外された住宅敷地についても、確認調査を実施したが、当該部分については、遺跡が存在しないことが確認された。

また本発掘調査によって、遺跡の範囲がさらに広がると判断されたため、兵庫県教育委員会では直接執行によって追加調査を実施した。

調査年度	調査番号	調査種別	調 査 期 間	担　当　者	調査面積(㎡)
1998	980063	分布調査	1998/5/6～1998/5/13	池田正男ほか	約1,300,000
2008	2008151	分布調査	2008/7/25	山本誠・小川弦太	111,000
2012	2012176	確認調査	2012/12/5～2012/12/5	多賀茂治	84
2013	2013120	本発掘調査	2013/12/20～2014/3/10	久保弘幸・菅澤敏弘	862
2013	2013140	確認調査	2013/12/20～2014/3/10	久保弘幸・菅澤敏弘	8
2013	2013164	本発掘調査	2014/3/11・3/12・3/14	多賀茂治	114

第１表　石道才谷・堂ノ後遺跡調査一覧

第２節　調査の概要

１　分布調査

平成10(1998)年度の分布調査は、川西市～神戸市の全事業地を対象としておこなわれたもので、本遺跡のみが対象となったものではない。分布調査は地表面の観察により実施した。分布調査の時点で本遺跡付近では、地表面で観察可能な遺構は見いだされなかったが、須恵器・土師器等の散布が認められ、新名神高速道路№５地点と仮称されることとなった。また平成20(2008)年度には、設計変更区間について追加の分布調査が実施された。

【調査の体制】

平成10(1998)年度

調査主体　　兵庫県教育委員会

分布調査担当者　兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所

調査第２班　池田正男　吉識雅仁　西口圭介　池田征弘

松野健児　佐々木俊彦　戸田真美子

平成20(2008)年度

調査主体　　兵庫県教育委員会

分布調査担当者　兵庫県立考古博物館埋蔵文化財調査部

企画調整班　山本誠　小川弦太

２　確認調査

【調査の体制】

平成24(2012)年度の調査

確認調査は、上記事業地を対象として実施した。調査は、２m×２mの試掘坑21か所を設定して実施した。調査体制は以下のとおりである。

調査主体　　兵庫県教育委員会

調査担当者　兵庫県立考古博物館総務部

埋蔵文化財課　多賀茂治

確認調査の結果、試掘坑のうちトレンチ４・７・12において土坑、溝等の遺構が検出され、遺物が出土した。またトレンチ11・21では遺構は検出されなかったものの、奈良時代の土器類が多数出土した。本年度の確認調査では、現住建造物が存在した住宅敷地内の調査は除外された。

平成25(2013)年度の調査

平成24(2012)年度の確認調査で除外された住宅敷地内について、試掘坑２か所を設定して実施した。調査体制は以下のとおりである。

調査主体　　兵庫県教育委員会

調査担当者　(公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

調査第２課　久保弘幸・菅澤敏弘

確認調査の結果、いずれの試掘坑からも遺構・遺物は検出されず、地層の堆積状況からも対象地に遺跡は存在しないと判断された。

３　本発掘調査

【調査の体制】

調査主体　　兵庫県教育委員会

調査機関　　(公財)兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部

調査第２課　久保弘幸・菅澤敏弘

【調査の方法と成果の概要】

本発掘調査区は、その中央部を里道が横断していたため、当該部分を除外して便宜上２地区として実施した。総面積は862㎡である。調査は、重機による表土掘削の後、遺物包含層以下を人力により掘削し、遺構検出作業を実施するという手順でおこなった。また遺構面の図化については、(株)イビソクに委託して空中写真測量を実施したが、個別遺構の平面・断面図を必要とする場合は調査担当者がこれを作成し、あわせて写真撮影も実施した。

調査の結果、掘立柱建物跡、柱穴、土坑、溝および旧河道等が検出された。特に旧河道内からは多量の土器、木製品が出土し、本遺跡の歴史的位置づけを考えるための大きな成果となった。

さらに本発掘調査の結果、調査区北西側で、多量の遺物を包含する旧河道が、さらに北西方向へのびる可能性が考慮されたため、当該部分について追加的調査を実施した。

【調査の体制】

調査主体　　兵庫県教育委員会

調査担当者　兵庫県立考古博物館総務部

埋蔵文化財課　多賀茂治

第３節　整理事業の概要

整理事業は、平成27(2015)年度～平成29(2017)年度に、公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部において実施した。整理事業は久保の担当の下に、同センター埋蔵文化財調査部整理保存課、長濱誠司・池田征弘がこれを主管し、非常勤嘱託員が各作業を担当した。

担当嘱託員は下記のとおりである。

今村直子　吉村あけみ　桂昭子　梶原奈津子　石田典子　島村順子　上西淳子　小野潤子

藤池かづさ　友久伸子　高瀬敬子　八木和子　河合たみ　佐伯純子　前田陽子　寺西梨紗　嶺岡美見

佐々木愛　沼田眞奈美　大前篤子　柏原美音　東郷加奈子　太田泉穂　尾鷲都美子　門田諭佳

菅生真理子　平宮可奈子　池信和彦　児玉昌子

また、本書に収録した遺物写真については、(株)クレアチオに委託して撮影を実施したほか、出土木製品の樹種同定および種実類の同定を(株)パレオ・ラボに委託して実施し、その成果は本書中に収録している。また木簡および墨書土器の釈読については、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の馬場基、山本崇、山本祥隆の三氏におこなっていただき、本報告書の記述はその成果を踏まえている。また旧河道内出土の大型材については、年輪年代測定の試みを、奈良文化財研究所の大河内隆之氏におこなっていただいた。

なお、本報告書に収録した遺物、写真、図等については、すべて兵庫県立考古博物館に保管している。

第３章　遺構と遺物

第１節　本発掘調査区の層序と遺構面

【本発掘調査区の位置】

本発掘調査区は猪名川の北～北西に位置し、北の山塊からのびる尾根の先端にある舌状微高地の端部にあって、調査区付近での標高は約67mを測る。既述のように調査区北東側には、山塊の浸食によって形成された谷地形があって、小規模な河川が流下して猪名川に注いでいる。

既述のように遺跡の南西側には、一辺が400mほどの三角形を呈する、小規模な盆地状の地形が広がっており、調査地からの眺望は周囲の山塊に遮られて、この範囲内に限定されている(図版１)。

本発掘調査対象地の中央やや西寄りに里道が横断していたことから、通行の確保のためこの部分を調査範囲から除外し、調査の便宜上、その西側を１区、東側を２区と呼称することとした。

【調査区内の層序と遺構面の位置】

調査区付近は、水田として高度差50cm前後を測る段状に開墾されており、調査区はそのうちの数面を包摂している。本発掘調査にあたっては、まず調査区内での地層の堆積状況と層相を把握するため、表土層の除去と平行して調査区の周囲に地層観察用の補助トレンチを掘削し、さらに２区では調査区中央を横断するトレンチを設定して、地層堆積状況の把握につとめた。

１・２区ともに、表土層(水田耕土)下には主として黄灰色～にぶい黄褐色のシルトから成る土壌化した堆積物が各面に認められた。このシルト層には、少量の平安時代末～鎌倉時代(以下中世と記述する)の遺物が包含されており、 層相から当該期の耕作土と推定された。1区ではこの包含層下に、 更新世の堆積物と推定される締まりのよい黄褐色の礫混じりシルト層があり、これが遺構検出面を成していた。

２区には、現状で３面の段状に開墾された水田面(上・中・下段と呼称)が認められた。この水田土壌の下位には、１区で見いだされたものと同様の、黄灰色～にぶい黄褐色シルトから成る中世の遺物包含層が広く認められた。中世の遺物包含層より下層の状況は、段状の水田面ごとに異なっている。

上段の水田面の大半では、表土および中世の遺物包含層の下位は、１区同様の黄褐色を呈する締まりのよいシルト層となっており、その上面の精査によって遺構が検出された。

これより上段の水田面の一部から中・下段の水田面では、中世の遺物包含層下にこれよりも暗色を呈する、シルトを主体とした古土壌層が認められ、この層中より奈良時代を中心とする遺物の出土が確認された。このため、中世の遺物包含層を包含層上部、これより下位の遺物包含層を包含層下部と呼称して、遺物を分別して取り上げた。

さらに調査区南半の大部分では、包含層下部と呼称していた層がきわめて厚く、砂礫層等を挟んで多量の遺物が出土することから、この面には旧河道が存在していること、調査区南半で包含層下部と呼称した層は、旧河道の埋積とともに形成された古土壌層であると理解された。

包含層下部と呼称した層位より下位の旧河道内の堆積は、砂礫層、シルト層、腐植層等を含んでおり、局所的な層の遷移も激しいため、一様に概説することはできないが、下位ほど粗粒化する傾向がある。また、遺構が立地する微高地の直下では、厚い腐植層が堆積する傾向が強かった。

調査に当たっては、当初、包含層上部よりも下位から出土した遺物について、すべて包含層下部として取り上げをおこなっていたが、調査区南半で旧河道の存在が明らかになって以降は、旧河道内出土か

包含層下部かの峻別をおこなうこととなった。従って、今回報告する遺物のうち包含層下部と記載したものの中には、旧河道埋没後の古土壌層より出土したものと、旧河道内の遺物の双方が含まれている。

第２節　遺構と遺物

１　概要

１区　中世の耕作に伴うと推定される溝１条のほか、 奈良時代の遺物が含まれる谷(旧河道) を検出した。他に遺構は認められず、遺跡の縁辺に近い位置にあると考えられる。

２区　奈良時代の掘立柱建物跡１棟、旧河道２本のほか、柱穴・土坑・溝を検出した。

掘立柱建物以外にも、同規模の柱穴が複数検出されているが、建物跡となるような柱穴列は認められなかった。ただし掘立柱建物跡北側の調査区端でも柱穴が検出されていることから、遺跡がさらに北側へ広がっていた可能性を指摘できる。

以下では本調査において検出された遺構と遺物の記載をおこなうが、遺物の計測値、製作技術上の特徴等については、特に記述が必要な場合を除いて後掲の第２表に一括して記載している。

２　１区の遺構と遺物

(１)溝

SD101

【遺構】

SD101は、 １区の南側調査区境界付近にあり、 等高線に沿ってほぼ現在の水田の段差と同じ方向の延びを見せる。溝内は灰色～黄灰色を呈するシルトで自然埋積していた。溝内からは13世紀代と考えられる須恵器が出土しており、当該期の耕作に伴う溝と推定される。

【遺物】

図示できる遺物は出土しなかったが､中世に属する須恵器椀の細片および土師器細片が出土している。

(２)旧河道(谷部)

【遺構】

遺構ではなく自然地形が埋没したものであるが、遺物を出土しているため、ここで記載する。１区中央付近に位置し、ほぼ南北に延びて調査区を横断する。幅5.5m、深さは南壁で40cmまで調査をおこなったが、実際にはさらに深いと思われる。

河道内上部はシルト～砂を主体とする堆積物で埋積されていたが、一部でボルダー級の巨礫を含んでいた。埋土中より奈良時代の遺物が出土しており、当該期の自然地形を示すものと思われる。

【遺物】

図版11の３は、須恵器杯Ｂ蓋である。つまみ～天井部および端部の作りはやや鈍い。

３　２区の遺構と遺物

（１）掘立柱建物跡

【遺構】

掘立柱建物跡は１棟のみ検出された。ほぼ正しく東西に長辺を合わせた、２間×４間の建物跡である。現代の水田造成の際に、北東隅の柱穴が削平されて失われている。

柱穴は隅丸方形ないしは歪んだ隅丸方形、不整円形を呈し、規模は一辺52㎝～84㎝を測る。柱痕部の規模は20～30㎝を測る。また柱間(柱痕間)は、梁行きで2.32～2.48m、桁行きも2.32～2.52mであり、柱間のうち５か所がほぼ2.4mであった。これは一般に奈良時代の尺とされる、１尺＝29.6㎝からすると8.1尺になることから、柱間８尺が基本設計であったと推定できる。

建物跡東側から１間目では、 建物跡中央部にも柱が配置されているが(P214)、 ２・ ３間目には方形掘方をもつ柱穴は設けられていない。ただし２・３間目には、直径20～25㎝の小規模な円形の柱穴があり(P220ほか)、 これが建物に伴う可能性は捨象できないが、 方形掘方をもつ柱穴とは、 規模の点で明らかに異なる。また２間目と３間目の中間にあたる建物中央部に２基の方形掘方をもつ柱穴が検出され、他にこれらの柱穴と関連する遺構が検出されなかったため、この２基の柱穴も建物跡に伴うと判断した(P232・233)。

以上のような柱穴の配列から、建物の形式としては、少なくとも一部には床をもつ構造を推測しておきたい。

【遺物】

掘立柱建物跡の柱穴内からは、須恵器・土師器が出土した。P212、213、214、216、223、225より図示できる遺物が出土している(図版11　４～11・13・14)。須恵器杯B蓋および身(４・７・９・11)、同長頸壷(５)、土師器杯(８)同甕(６・10)および土師質土錘である。これらのうち４～６はP213、10はP214、７はP216、８・９はP223、11はP225、13はP212より出土している。

また発掘時の混乱のため出土遺構が確定できなかったが、 土錘(14) もSB1に属する柱穴のいずれかより出土したことは確実であることから、ここに掲載する。

P213

４は須恵器杯Ｂの蓋である。全体に扁平な形態で、平坦な天井部から屈曲して端部に至る。

５は須恵器壷の口縁部である。口縁端部は拡張されて外傾する面をもち、内面に小さな段を作る。

６は土師器甕の口縁部である。端部はわずかに肥厚する。

P214

10は土師器甕である。ほぼ垂直にのびる体部であることから、長胴の甕になるものと思われる。口縁部は「く」の字形に開き、端部はわずかに上方へつまみ上げられている。外面に縦方向のハケメ、内面に横方向のハケメが施される。

P216

７は須恵器杯Ｂである。平坦な底部から直線的に立ち上がる口縁部を作る。高台は外方に開く。

P223

８は土師器杯である。底部は失われている。緩やかに屈曲しながら、わずかに外反する口縁部を見せる。器表面は劣化しており、調整痕は観察困難であるが、外面にヨコナデ、内面にヘラミガキの痕跡が看取される。

９は須恵器杯Ｂである。やや垂下した底部から直線的に立ち上がる口縁部を作る。高台は外方に開く。

P225

11は須恵器杯Ｂである。平坦な底部からやや傾きの大きな口縁部が、直線的に立ち上がる。高台は高く、やや外方へ開く。

（２）柱穴

掘立柱建物跡に伴うもの以外に、 建物跡の北側調査区境界付近で、2基の方形掘方をもつ柱穴が検出されている。これらはその規模と形状から、別の掘立柱建物跡に伴う可能性が高い。これ以外にも柱穴と考えられる遺構が複数検出されているが、いずれも建物跡を復元するには至らなかった。

（３）土坑

土坑は合計６基が検出された。形態・深さなどはさまざまで、機能を推定できるものはない。

SK207・208

【遺構】

２区北西部にある重複する土坑で、SK208が207を切っている。207・208ともに一部を撹乱溝に破壊されているため全形・規模は不明である。残存部については、SK207が隅丸方形を呈し長軸1.0m、208が歪んだ円形を呈し長軸1.0mを測る。 深さはともに15cmで、 土坑内は、 いずれも細粒～中粒の砂で埋積されていた。

【遺物】

SK208より小型の須恵器杯Ｂが出土している(12)。 口縁部は緩やかに外反しつつ立ち上がる。 高台は外方へ開くが、畳付部の稜線がやや鈍い作りである。

SK226

【遺構】

SK226は調査区東部に位置する不整形な土坑で、 一部は２段に掘り込まれている。 長軸1.3m、 短軸1.05m、深さ25cmを測り、土坑底は椀状に凹む。 土坑内は砂混じりシルトで埋積されていた。 土坑底に大型礫が検出されたが、人為的な配置か否か判断できなかった。

【遺物】

図示可能な遺物は出土しなかった。

SK227

【遺構】

SK227は、 掘立柱建物跡東の微高地縁辺の傾斜部に位置する。 長径50cm、 短径44cm、 深さ10cm程の、やや歪んだ円形を呈する小型の土坑である。 土坑内上層は炭粒子を多量に含むシルトで埋没しており、土坑底は被熱により変色していた。

【遺物】

図示可能な遺物は出土しなかったが埋土中より土師器・須恵器の小片が出土している。

SK228

【遺構】

SK228 は調査区南東部に位置する不整円形の土坑である。旧河道に向かう斜面上に位置し、長軸1.4m、

短軸1.15m、深さ42cmを測り、土坑底は椀底状に凹む。

【遺物】

図示可能な遺物は出土しなかったが埋土中より土師器・須恵器の小片が出土している。

SK229

【遺構】

SK229は２区東端に位置する。中央付近をトレンチによって切られているが、残存状況から、長楕円形の土坑だったと思われる。土坑内はシルト～細礫で埋積されていた。長軸1.5m、短軸0.8m、深さ15cmを測り、土坑底は平坦な船底状を呈する。

【遺物】

図示可能な遺物は出土しなかったが埋土中より土師器・須恵器の小片が出土している。

SX210

【遺構】

検出時、埋土上面で炭化物・焼土が顕著であったため、土坑とせずその他の遺構(SX)として扱ったが、最終的に土坑と判断された。掘立柱建物跡の東辺に位置する、不整形な土坑である。土坑内は細粒のシルト～砂で埋積されており、上層には顕著に炭化物・焼土片を含んでいる。一部を撹乱で破壊されていたが、長軸1.8m以上、短軸1.4m、深さ20cmを測り、土坑底は緩やかに凹む。

【遺物】

図示可能な遺物は出土しなかったが埋土中より土師器・須恵器の小片が出土している。

（４）溝

SD222

【遺構】

SD222は、２区北側の調査区境界付近にあり、西北西～東南東の延びを見せる溝である。調査区外へ延びるため総延長は不明であるが、調査区内では延長9.6m、幅0.9m、深さ10cmを測る。溝底は著しい凹凸を見せ、溝内は細粒の砂～シルトで埋積されていた。

【遺物】

図示可能な遺物は出土しなかったが埋土中より土師器・須恵器の小片が出土している。

（５）旧河道出土の遺物

旧河道は、調査区北東壁から東北東－西南西の方位に、緩やかに蛇行しながら延び、調査区南壁に達する。河道内は砂礫、シルト、砂など水流を示す多様な堆積物で埋積されており、一部には厚い腐植物層も認められた。全体に、下層ほど粒度の大きな堆積物が主体となり、平坦化が進んだ最上層はシルト主体とした堆積物である。各層には多量の土器類が包含されていた。

これとともに河道内からは、木製遺物が多数出土したほか、伐採・枝打ちをされた状態の、長さ６ｍの針葉樹、多数の桃の核、植物の種実類が見いだされている。

本章第１節で述べたとおり、包含層下部の遺物には、旧河道内出土の遺物を含む場合があるが、ここでは、調査時に旧河道内出土と確認した遺物を記載する。

【土器】

須恵器には、杯、高杯、甕、長頸壷、短頸壷、横瓶などが見られる。土師器には、皿、杯、甕、鍋、竈などのほか、製塩土器および多数の土錘が見られるほか、黒色土器も出土している(図版11～17)。須恵器には多数の墨書土器が認められるが、記載の便宜上、別に記述する(図版18・19)。

須恵器

須恵器には杯Ａ(21～29)、杯Ｂ(30～36)および蓋(16・17・20)、稜椀蓋(18・19)高杯(37)、長頸壷(40～44)、短頸壷(45)、双耳壷(46)、横瓶(49)、甕(48・159・160)がある。また38・39は小型、細頸の壷である。

杯Ａには、口縁部の立ち上がりがやや急斜度をなすもの(21～23)と、これより口縁部を開き気味に作るもの(24～28)がある。また29は、底部が丸みをおびて口縁部との境界が不明瞭な作りを見せ、21～28とは異なる形態を示す。

杯Ｂには、口径が相対的に小さいもの(30・31)と大きいもの(32～34)、器高・口径ともに大きなもの(35・36)が認められる。また高台は、身部直下に貼り付けるものと、やや底部の内側に設けるものとが見られる。31は、高台内底面に工具痕と思われる爪形の圧痕が残る。

38は小型の壷(瓶)である。底部は回転糸切りされている。

長頸壷には、肩が強く屈曲して稜をなすもの(40)と、球形の体部を示すもの(43・44)とがある。40の体部には数条の沈線が認められるが、ヘラ記号か否かいずれとも判断し難い。

46は、肩部に断面長方形の帯状を呈する耳を貼り付けた壷で、双耳壷と考えられる。また体部下部にも、不整形な粘土紐が貼り付けられている。粘土紐上部が欠落しているため詳細は不明であるが、その状況から、焼成時に他の須恵器が融着したものではなく、意図的に貼り付けられたと判断される。

48は口縁部が「く」の字状に強く屈曲して開く甕である。

159・160は大型の甕である。159は外反して開く口縁部を見せ、 口縁端部は上下に拡張される。160は弱く外反する口縁部を見せる。口縁部には弱い段を設けており、端部を凹ませている。

土師器

土師器には杯、甕、鍋等がある。なお製塩土器は別項とする。

50・51は土師器の杯と皿である。50は、ほぼ平坦に作られた底部を見せ、口縁部は短く外反する。内面には不規則な連結輪状のヘラミガキ(暗文)が施される。51は大型の皿であるが、口縁部を欠き、調整痕も明らかではない。

54～56は球形の体部をもつ甕である。器表面は、ハケ、ナデなどによって調整されている。

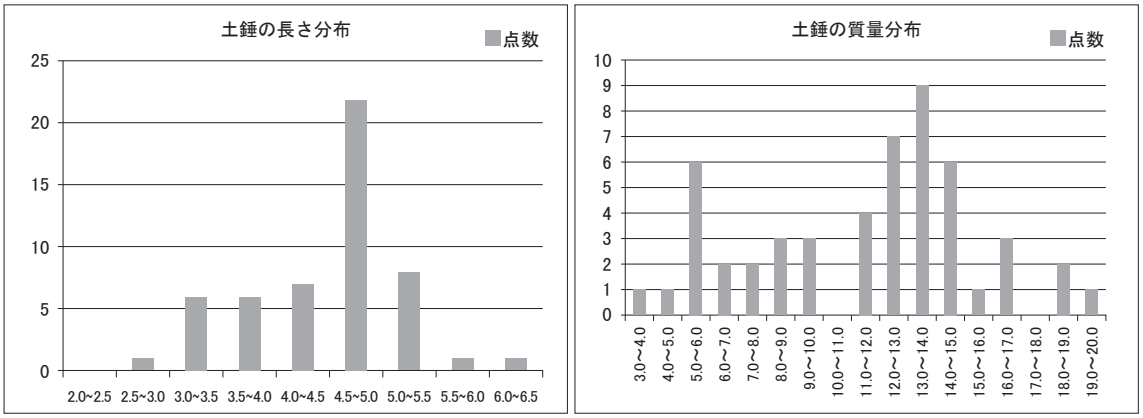
57は鍋であろうか。直立に近い頸部から弱く開く口縁部を見せる。58は鍋の把手である。

59はやや長胴の甕である。頸部は大きく屈曲する。59では内外面ともにハケ調整が施される。

60は口縁部が大きく開く鍋である。外面はハケ、内面はユビオサエによって調整されている。

黒色土器

52・53は、いずれも内面のみに炭素を吸着させた、黒色土器の椀である。52は全体に丸みをもった器形を呈しており、底部には高台の痕跡がなく、本来、高台をもたなかった可能性がある。器表面の状況から、二次的に被熱しているものと思われる。内面にはわずかにヘラミガキをとどめるが、方向などは不明である。53は高台をもつ椀であるが、 高台端部は顕著に欠損ないし摩耗しており、本来の形態をとどめていない。内面には連結輪状のヘラミガキを施す。



第３図　土錘の長さ・重量分布

製塩土器

製塩土器はほとんどが破片となっており、 図化可能なものは限定されている。61～63はいずれも筒状に近い形態を見せるが、63は上面観が長円形を呈している。 いずれも胎土に粗砂～極粗砂級の砂粒を多く混じており、成形時のユビオサエ痕を顕著にとどめる。

緑釉陶器

67は緑釉陶器椀である。内外面ともに施釉される。口縁部はわずかに外反する。

灰釉陶器

65・66は灰釉陶器皿である。やや外方に張り出した高台をもつ。66は内外面ともに施釉されているが、65は残存する範囲に限れば内面のみに施釉されている。

土錘

107～138(図版16)は、旧河道出土の土師質土錘である。包含層出土の土錘を含めてみた場合、長さ2.7㎝が最短、重量3.5gが最軽量であり、長さ6.1㎝が最長、重量23.3gが最重量である。長さでは4.5㎝～5.0㎝が最頻値であるが、重量では13.0g～14.0gの間に最頻値があるものの、5.0g～6.0gにもピークが認められることから、大小２群に分けられる可能性がある(第３図)。

【木器・木製品】

木器・木製品は、すべて旧河道内出土である。その多くは小型の板材であり、大型の部材、杭などは少ない。また木製農具も出土していない。製品には木簡、祭祀具(齋串、馬形(？))供膳具(曲物)などがあり、他に多数の付木、加工材、部材、杭、矢板などが認められる。また、図化した遺物を含め計303点の木製品が出土している。

なお使用された樹種については株式会社パレオ・ラボに委託して同定し、その結果を本書第４章に掲載するとともに、遺物観察表に記載している。また出土種実類については、パリノ・サーヴェイ株式会社に同定を委託し、その結果を第４章に掲載している。

木簡

木簡は１点のみの出土である(図版20　Ｗ１)。折損が多く、わずかに２文字が残るに過ぎない。うち下の１文字は旁の部分「阝」のみが遺存している状態であり、文字を確定できない。上の文字については、『木簡研究』(久保弘幸　2015) において、「牒ヵ」として紹介した経緯がある。 これは当初、 上の文字は偏の部分が欠落していると認識しており、 旁の部分について「枼」の可能性があると考えたためである。しかし本報告書編集にあたり、奈良文化財研究所の馬場基氏らに赤外線カメラ等を用いた釈読をお願い

した結果、文字は完存しており欠けがないこと、当初「木」と考えていた文字の下部については、縦の画が存在せず「大」であることが明らかとなった。 このため馬場氏らからは、「莫」ないしは「荒」などを候補として挙げられたものの、最終的には、文字を確定することはできなかった。

馬形？

馬形（？）も１点のみの出土である（図版20　Ｗ２）。 針葉樹の板を加工したもので、 図の右半は折損しているが左半部の加工はよく残っている。下部は直線的に仕上げられ、上部は馬の背状の凹部をなす。図左端部は斜めに立ち上がり、先端部はやや丸みをおびつつ尖り気味に仕上げられている。

齋串

齋串と断定するに至らない断片化したものが多数見られるが、齋串の可能性が高いものを図示する（図版20　Ｗ３～７）。 薄い針葉樹（ヒノキ）の板材を細長い短冊状に加工したものが主体を占める。 Ｗ６では先端を細く仕上げている。

曲物

図版20のＷ８・９は曲物底板である。いずれも側板を留めるための綴じ材を通す孔が認められ、Ｗ８では樹皮の綴じ材が遺存している。

付木

端部に焦げをとどめる小型材については、 この器種に分類した（図版22　W18～24）。 一端にのみ焦げ跡があるもの（W18～22）、 両端に焦げ跡があるもの（W23・24）が認められる。 本遺跡では少なくとも161点が付木に分類されたが、齋串に類似した薄板状の材の端部に焦げをとどめるもの（W18～22）、棒状のもの（W23）、材加工時に派生した断片状の材を使用したと思われるもの（W24）等が認められる。

加工材

材に二次的な加工をしたもののうち、器種分類が困難なもの、素材と思われるものについては、加工材として一括した。

図版21のW10はヘラ状を呈する木器である。器表面全体に、加工痕をとどめており、先端は弱く尖る。

W12は、両側縁が平行する板材の下端を斜めに切断したものである。左図右側縁は、刃部のように薄く仕上げられている。

W13はやはり１側縁を薄く仕上げたものである。

W14は両側縁が湾曲した板材で、上下両端を斜めに切断している。

W15は板材の端部に１孔を穿ったものである。曲物の底板の可能性があろうか。

W16は短冊状の板材である。下端がわずかに丸みをおびるように切断している。上端は折れ面である。面中央部に抉り状の切り込みが認められるが、これが加工痕であるのか、発掘時の破損であるのか断じがたい。

W17は断面方形の棒状材である。

図版22のW25は、片面が凹面をなす加工材である。容器（刳り物）の断片の可能性があろうか。

W26は、厚みのある材を用い、その一部を削り出したものである。やはり何らかの容器の可能性があろう。

W27は塊状の材を用い、その一端を平坦に、他の一端をくさび状に削り出したものである。器種、用途などは不明である。

W28は角材である。器表面に手斧による加工痕を明瞭にとどめる。下端部は加工面であるが、上端は

折れ面である。

板材

図版23のW29、W30、図版25のW38～W41、図版26のW43、W44は、いずれも板材である。何らかの部材かと思われるが、推測の域を出ない。W38が柾目材、W43がみかん割り材であるほかは、いずれも板目材である。

W31は、中央の抉り部分で分割された状態で出土したものが、後に接合した。広葉樹の四辺形の板材を用いている。片面中央に、溝状の加工痕をとどめることから、長大な板材から何らかの素材を得るための分割が行われた可能性も否定できないが、用途等不明遺物である。

図版25のW42は厚みのある材の両端を截断している。やはり用途は不明である。

杭

図版24のW32～W36は杭である。丸木材を用いるW35を除き、すべて割り材を用いている。

大型伐採木

図版24のW37は、斧痕が残る大型材である。微高地直下の旧河道底面から出土した。長さ5.1m、最大直径約60cmを測る材であり、伐採後に河道内に置かれたと推測される。枝はすべて除去されていたが、樹皮は残されていた。きわめて長大であり、材全体を保存することは不可能であったため、斧痕が残る部分のみを切断して保存している。斧痕部分のみを図示する。

伐採した後、手斧で切断面を斜めに加工しているが、その目的は判然としない。加工痕から、斧の刃部幅は６cm前後と推定される。W37については、樹種同定の結果モミ属であることが明らかとなった(第４章)。出土状況から、周辺の山林から針葉樹伐採されたものと推定される。

【金属器】

金属器は２点が出土している。

図版27のＭ１は、火打金である。図上端は尖り気味に作られ、一側縁は弧状に、他の側縁は緩やかに波打った山形に作られる。いずれの側縁も、端部に面をもつが、弧状の側縁では一部に使用痕と思われる変形が認められる。

図版27のＭ２は、鏨状の鉄器である。先端部の断面は蒲鉾形を呈し、端部は鈍く尖る。他の部位は長方形の断面を呈し、基端部(図上端)には長方形の面を作る。

【石器・石製品】

図版27のＳ１～Ｓ３は、砥石である。Ｓ１・Ｓ３は旧河道より、Ｓ２は包含層下層より出土した。いずれも研磨痕をとどめるとともに、金属器によると思われる鋭い線状の傷が認められる。いずれも砂岩が用いられている。

図版28のＳ４・Ｓ５はサヌカイト製有茎尖頭器である。いずれも器表面には、押圧剝離による丁寧な二次加工が施されている。いずれも旧河道内出土。肉眼観察であるが、二上山産サヌカイトと思われる。

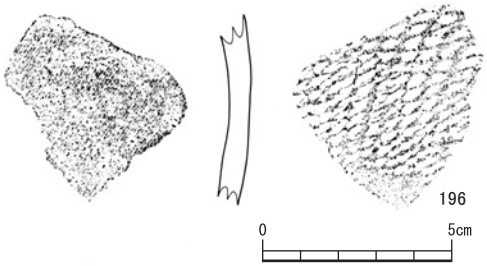
Ｓ６はサヌカイト製削器である。両側縁に表裏から二次加工を施して、一側縁を薄い刃部としている。

Ｓ７はサヌカイト製楔形石器である。平行する上下二辺を加撃しており、両側縁に截断面が形成されている。肉眼観察であるが、讃岐産のサヌカイトと思われる。

Ｓ８は非常に風化が進行した、サヌカイト製横長剝片である。打面部は２枚の剝離痕からなり、その稜線を打撃することによって剝片を得たものである。技術的には、後期旧石器時代に属する横長剝片であることを否定できない資料である。肉眼観察であるが、二上山産サヌカイトと思われる。

Ｓ９はサヌカイト製剥片である。打面側は折損している。

Ｓ10・Ｓ11は細粒の砂岩を用いた磨石である。やや扁平な円礫の周囲を敲打して整形しており、Ｓ10では図左面中央が、敲打によって凹んでいる。またＳ11の器表面には、細かな磨痕が認められる。



第４図　旧河道出土の縄文土器

【縄文土器】

第４図の196は、薄手で比較的堅緻な胎土の縄文土器である。斜縄文を全体に施文し、内面はナデ仕上げが施される。縄文時代中期（船元式）の所産と思われる。

（６）包含層下層出土の遺物（図版15・16）

包含層下部出土の遺物を一括して記載する。既述のように、これらには旧河道に属する遺物が含まれる可能性がある。

【土器】

須恵器

須恵器には杯Ａ、杯Ｂおよび蓋、壷蓋、鉢等がある。

78～82は杯Ａである。旧河道内出土の本器種の記載で述べたとおり、２形態が看取される。

83～91は杯Ｂ、74～77は同蓋である。やはり旧河道内出土の本器種同様、口径、器高に３形態が看取される。

92は宝珠形のつまみをもつ蓋である。壷類の蓋と考えられる。

93は大型の鉢である。やや脆弱で焼成不良と思われる。口縁端部を凹ませている。

94は拡張された底部をもつ鉢で、「こね鉢」と呼称されることもある器種である。内底面に貫通しない１孔（焼成前穿孔）が設けられ、外底面には直径１㎜内外の不規則な穿孔が、多数認められる。

土師器

土師器には杯、甕、鍋、甑等のほか、製塩土器がある。

95～98は土師器杯である。95・96の胎土が細粒の砂を含むのに対し、97・98は精良な胎土が用いられている。95は口縁端部内面にわずかに段を形成し、98は口縁端部を外反させて、内外面に段を形成している。98は内外面の一部が褐色化しており、二次的に被熱している可能性がある。

99～101は甕である。99・100は体部がやや膨らみをもつ形態、101は体部の膨らみが小さい長胴の形態であろうか。

102は小型であるが、形態から鍋に分類した。図版14の60同様、大きく開いた口縁部と、浅い体部を見せる。内外面ともにハケ調整が顕著である。

103は甑の底部であろう。図下部は端部を残しており、斜め外方へ直線的に立ち上がる体部を見せる。

製塩土器

104～106は製塩土器である。粗粒の砂を含む胎土で、成形時のユビオサエ痕を顕著にとどめる。ほぼ筒状の立ち上がりを見せる104・105に対し、106は口縁部がラッパ状に開く。

灰釉陶器

図版15の68・69は灰釉陶器の皿である。いずれも遺存する範囲では、内面のみが施釉されている。

土錘

図版16の139～145、147・151・152・156は、包含層下層出土の土錘である。形態は旧河道出土の土錘と同様であり、長さや重さの属性もよく一致している。

（７）包含層上層出土の遺物（図版15）

包含層上層からは、中世の遺物のほか、奈良時代～平安時代前半期の遺物が出土しているが、その量は多くない。

【土器】

須恵器

図版15の70は、須恵器鉢である。口縁部を上方に折り曲げており、内面の屈折部は溝状を呈する。

73は機械掘削時に出土した小型壷の底部である。

土師器

71は土師器鍋である。直立する口縁部を見せ、体部内外面にはタタキが施されている、

磁器

72は青磁の底部である。小型の碗であろうか。釉は厚く、やや濁った印象を与える。高台は三角形状に作られ、畳付部は露胎となっている。

緑釉陶器

64は緑釉陶器の椀である。底部は削り出しの平高台に作る。風化のため釉の剥落が著しいが、底面を含む全面に施釉されている。

灰釉陶器

66は灰釉陶器の皿である。見込み部中央は施釉されていない。

土錘

図版16の146・150・155・157・158は、包含層上層出土の土錘である。形態は包含層下層、旧河道出土の土錘と同様であり、長さや重さの属性も一致している。

（８）墨書土器

本遺跡では、墨書土器35点が出土した（図版18・19）。いずれも旧河道および包含層中より出土したもので、すべて須恵器であり、土師器は含まれていない。便宜上、旧河道出土、包含層上層、下層出土のものを一括して記述する。出土層位等については、第２表に一括して記載している。

161は杯Ｂ蓋である。平坦な天井部から屈曲して端部に至る。扁平な宝珠つまみに接して、「石」と墨書されている。

162も杯Ｂ蓋である。天井部に「道」と墨書される。

163は稜椀の蓋である。輪状のつまみ内に「大」と墨書される。

164～183は杯Ａに墨書されたものである。164～168は「石」が体部外面、底部に墨書されている。口縁部に墨書される場合、杯を置いたときに文字が正立位になるもの（164・165）と横位になるもの（166）が見られる。また167・168は底面に墨書されたものである。168は体部にも墨書されており、大部分を欠損

するため確定し難いものの「石」の可能性がある。

169・170は文字が欠損しているため確定し難いものの、筆致から「石」の可能性を指摘しうる。

171は杯Ａの底面に「石道」と２文字が墨書される。２文字目の「道」は、半ば近くを欠損し、文字もやや不鮮明であるが、赤外線観察により判断された。また173も底面の外縁近くに「道」と墨書されるが、その直上の口縁部に１文字が書かれており、筆致から「石」の可能性が高い。

172は杯Ａ底面に墨痕が認められるが、欠損もあり、判読できない。

174は杯Ａの底面に１文字の墨書があり、筆致から「道」の可能性が高い。また173と同様、その直上にあたる口縁部にも１文字があるが、大部分が欠損しているため判読できない。

175は杯Ａの底面に「東」と墨書される。

176は杯Ａの底面に「佐×」ないしは「佐十」と墨書される。×が佐の文字の上に重複しており、また、墨色も異なるため、２度にわたって重ね書きされたと考えられる。

177は杯Ａ体部に墨痕が認められるが、欠損のため判読できない。

178は杯Ａの底面に「×」ないしは「十」と書かれている。

179～183は、いずれも杯Ａ底面に墨書されたものだが、赤外線観察によっても、文字の判読ができなかった。文字としてではなく、筆ならしに書かれた可能性もあるとの指摘をいただいている。

184は、平坦な底部からやや開き気味に口縁部が立ち上がり、高台をほぼ垂直に作る杯Ｂである。底面に「道」と墨書されており、体部にも墨痕が認められる。

185は、杯Ｂ底面に墨書が見られるが、文字の大部分を欠損する。平坦な底部から直線的に口縁部が立ち上がる。高台は外方に張り出す。

186は杯Ｂ底面に墨痕が見られるが、断片的で文字か否か判断できない。平坦な底部から直線的に口縁部が立ち上がる。高台はほぼ垂直に作る。

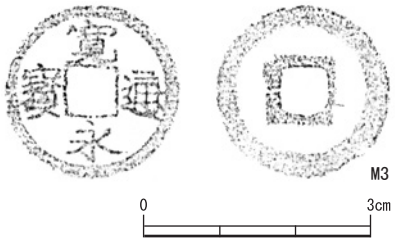
187～190・192～195は、杯底面および側面に墨書されたものであるが、いずれも判読に至らなかった。文字であるか、「筆ならし」であるかの判断も困難である。

191は、灰釉陶器の底面に「屋」ないしは「戸主」と墨書されたものである。墨痕は明瞭であるが、赤外線観察によっても、いずれか確定し得なかった。

（９）その他の遺物

図版11の１、２は、確認調査時に出土した遺物である。１は中世に属する須恵器鉢、２は須恵器短頸壷である。

第５図のＭ３は、２区の現代表土層直下にある旧耕土層より出土した寛永通宝銭である。



第５図　２区出土の銭

第４章　自然科学的分析

第１節　石道才谷・堂ノ後遺跡出土木製品の樹種

小林克也（株式会社パレオ・ラボ）

１．はじめに

川西市石道に所在する石道才谷・堂ノ後遺跡から出土した木製品の樹種同定を行なった。

２．試料と方法

試料は、旧河道から出土した木製品48点である。遺構の時期については、古代～平安時代頃と考えられている。各試料について、切片採取前に木取りの確認を行なった。

樹種同定は、材の横断面（木口）、接線断面（板目）、放射断面（柾目）について、カミソリで薄い切片を切り出し、ガムクロラールで封入して永久プレパラートを作製した。その後乾燥させ、光学顕微鏡にて検鏡および写真撮影を行なった。

３．結果

同定の結果、針葉樹であるモミ属とマツ属複維管束亜属、スギ、ヒノキ、カヤの５分類群と、広葉樹であるウツギ属とツバキ属の２分類群の、計７類群がみられた。モミ属とヒノキが各19点で最も多く、スギが４点、カヤとツバキ属が各２点、マツ属複維管束亜属とウツギ属が各１点であった。同定結果を第３表に、一覧を文末第４表に示す。

次に、同定された材の特徴を記載し、末尾に光学顕微鏡写真を示す。

樹種/器種	ヘラ状木製品	付け木	曲物側板	曲物底板？	斎串？	馬形？	木簡	板材	丸棒	棒材	部材	部材？	杭	杭？	矢板	加工材	巨木材	合計
モミ属								2			3	1	3		1	8	1	19
マツ属複維管束亜属													1					1
スギ		2								1						1		4
ヒノキ	1	5	1	1	2	1	1	1		1						5		19
カヤ														1		1		2
ウツギ属									1									1
ツバキ属											2							2
合計	1	7	1	1	2	1	1	3	1	2	5	1	4	1	1	15	1	48

第３表　樹種同定結果一覧

(１)モミ属　*Abies*　マツ科　写真１　1a-1c(No.11)、2a-2c(No.38)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ１～８列である。分野壁孔は小型のスギ型で、１分野に２～４個みられる。また、放射組織の末端壁は数珠状に肥厚する。

モミ属には高標高域に分布するシラビソ、オオシラビソ、ウラジロモミと、低標高域に分布するモミなどがあり、いずれも常緑高木である。材はやや軽軟で、切削その他の加工は容易、割裂性も大きい。

(２)マツ属複維管束亜属　*Pinus* subgen. *Diploxylon*　マツ科　写真１　3a-3c(No.7)

仮道管と垂直および水平樹脂道、放射柔細胞および放射仮道管で構成される針葉樹である。放射組織は放射柔細胞と放射仮道管によって構成される。放射仮道管の内壁の肥厚は鋸歯状であり、分野壁孔は窓状となる。

マツ属複維管束亜属には、アカマツとクロマツがある。どちらも温帯から暖帯にかけて分布し、クロマツは海の近くに、アカマツは内陸地に生育しやすい。材質は類似し、重硬で切削等の加工は容易である。

(３)スギ　*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don　ヒノキ科　写真２　4a-4c(No.6)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は厚く、早材から晩材への移行は緩やかである。放射組織は単列で、高さ２～15列である。分野壁孔は孔口が大きく開いた大型のスギ型で、１分野に普通　２個みられる。

スギは大高木へと成長する常緑針葉樹で、天然分布は東日本の日本海側に多い。比較的軽軟で、切削などの加工が容易な材である。

(４)ヒノキ　*Chamaecyparis obtusa* (Siebold et Zucc.) Endl.　ヒノキ科　写真２　5a-5c(No.16)、6a-6c(No.19)

仮道管と放射組織、樹脂細胞で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、高さ1～15列である。分野壁孔はトウヒ～ヒノキ型で、１分野に２個みられる。

ヒノキは福島県以南の暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材はやや軽軟で加工しやすく、強度に優れ、耐朽性が高い。

(５)カヤ　*Torreya nucifera* (L.) Siebold et Zucc.　イチイ科　写真3　7a-7c(No.35)

仮道管と放射組織で構成される針葉樹である。晩材部は薄く、早材から晩材への移行は急である。放射組織は単列で、１～５細胞高である。分野壁孔は小型のヒノキ型で、１分野に２～４個みられる。また、仮道管の内壁には２本１対のらせん肥厚がみられる。

カヤは暖温帯に分布する常緑高木の針葉樹である。材は比較的重硬で弾力性に富み、切削等の加工は容易で、水湿によく耐える。

(６)ウツギ属　*Deutzia*　アジサイ科　写真３　8a-8c(No.46)

小型の道管がほぼ単独で、やや密に散在する散孔材である。道管は40段以上の階段穿孔を有し、内壁にはらせん肥厚がみられる。放射組織は上下端１～３列が直立する異性で、幅１～４列である。また、放射組織は鞘細胞を有する。

ウツギ属にはウツギ、マルバウツギなどがあり、日当たりの良い小川付近などに分布する落葉低木である。代表的なウツギの材は重硬で、切削加工は中庸である。

（７）ツバキ属　*Camellia*　ツバキ科　写真３　9a-9c(No.33)

角張った小型の道管がほぼ単独でやや密に散在する散孔材である。軸方向柔組織は短接線状となる。道管は単穿孔を有する。放射組織は上下端１～３列が直立する異性で、幅１～３列となる。

ツバキ属にはヤブツバキやサザンカなどがあり、ヤブツバキは本州、四国、九州の温帯に、サザンカは山口県以南の温帯南部から亜熱帯に分布する常緑小高木の広葉樹である。材は重硬で、切削加工は困難である。

４．考察

付け木と棒材ではスギとヒノキがみられた。スギやヒノキなどの針葉樹は、木理通直で真っ直ぐに生育し、加工性が良いという材質を持つ。また針葉樹は、広葉樹と比較すると火付きが良い樹種である(伊東ほか,2011)。

ヘラ状木製品と曲物底板、曲物側板、斎串？、馬形？、木簡は、いずれもヒノキであった。ヒノキは前述の通り、真っ直ぐで加工性の良い樹種である。加工性の良いヒノキが選択的に利用されていたと考えられる。兵庫県域で出土している古代～平安時代頃の曲物および斎串、形代、木簡にはスギとヒノキが多く利用されており(伊東・山田編,2012)、今回の試料も同様の傾向を示す。

部材？と矢板、巨木材はモミ属、部材ではモミ属とツバキ属、板材ではモミ属とヒノキ、杭ではモミ属とマツ属複維管束亜属、杭？ではカヤ、加工材ではモミ属とスギ、ヒノキ、カヤ、丸棒ではウツギ属がみられた。モミ属とマツ属複維管束亜属、カヤは、スギおよびヒノキと同様の材質で、やや軽軟で耐朽性が高く、モミ属とマツ属複維管束亜属、カヤは耐朽性が高い(伊東ほか,2011)。また、ウツギ属とツバキ属は堅硬な樹種である(伊東ほか,2011)。

今回の木製品には、加工性の良い針葉樹が多く利用されるが、耐朽性が必要な杭や板材、部材などにはモミ属およびマツ属複維管束亜属、カヤといった、針葉樹中でも耐朽性の高い樹種を、柄の可能性があり、耐朽性を必要とする丸棒および、部材の一部には、堅硬な広葉樹が利用されたと考えられる。なお、旧河道から出土した、加工前の原木であると考えられる巨木材はモミ属であり、遺跡周辺に生育していたモミ属が伐採され、旧河道で貯木されていた可能性など考えられる。

引用文献

伊東隆夫・佐野雄三・安部 久・内海泰弘・山口和穂(2011)日本有用樹木誌,238p, 海青社.

伊東隆夫・山田昌久編(2012)木の考古学―出土木製品用材データベース―. 449p, 海青社.

試料No.	報告No.	調査番号	木器処理No.	出土地区	遺構	器種	樹種	木取り	備考	時期
1	W6	2013120	12	2区-1・2　上段	旧河道	斎串？	ヒノキ	柾目		古代～平安時代
2	W7	2013120	13	2区-1・2　上段	旧河道	斎串？	ヒノキ	板目		古代～平安時代
3	W2	2013120	14	2区-1・2　上段	旧河道	馬形？	ヒノキ	板目		古代～平安時代
4	W24	2013120	19	2区-1・2　上段	旧河道	付け木	ヒノキ	みかん割り		古代～平安時代
5	W20	2013120	24	2区-1・2　上段	旧河道	付け木	スギ	みかん割り		古代～平安時代
6	W23	2013120	25	2区-1・2　上段	旧河道	付け木	スギ	みかん割り		古代～平安時代
7	W35	2013120	31	2区-1・2　上段	旧河道	杭	マツ属 複維管束亜属	芯持丸木		古代～平安時代
8	W30	2013120	52	2区-1・2　上段	旧河道	部材	モミ属	柾目		古代～平安時代
9	W38	2013120	56	2区-1・2　上段	旧河道	棒材	ヒノキ	板目		古代～平安時代
10	W36	2013120	58	2区-1・2	旧河道	杭	モミ属	角材		古代～平安時代
11	W42	2013120	66	2区-1・2	旧河道	加工材	モミ属	柾目		古代～平安時代
12	W1	2013120	70	2区-1・2　上段	旧河道	木簡	ヒノキ	追柾目		古代～平安時代
13	W29	2013120	71	2区-1・2　上段	旧河道	加工材	モミ属	追柾目		古代～平安時代
14	W14	2013120	73	2区-1・2　上段	旧河道	加工材	ヒノキ	板目		古代～平安時代
15	W4	2013120	99	2区 1～2　中段	旧河道	板材	モミ属	板目		古代～平安時代
16	W26	2013120	100	2区 1～2	旧河道	加工材	ヒノキ	板目		古代～平安時代
17	W5	2013120	105	2区-1　上段	旧河道	加工材	ヒノキ	柾目		古代～平安時代
18	W19	2013120	153	2区-1　上段	旧河道	付け木	ヒノキ	板目		古代～平安時代
19	W21	2013120	154	2区-1　上段	旧河道	付け木	ヒノキ	柾目		古代～平安時代
20	W18	2013120	160	2区-1　上段	旧河道	付け木	ヒノキ	柾目		古代～平安時代
21	W39	2013120	168	2区-1　上段	旧河道	板材	ヒノキ	板目		古代～平安時代
22	W25	2013120	190	2区-1　上段	旧河道	加工材	モミ属	柾目		古代～平安時代
23	W27	2013120	194	2区-1　上段	旧河道上層？	杭？	カヤ	芯去削出		古代～平安時代
24	W28	2013120	197	2区-1　上段	旧河道	加工材	ヒノキ	板目		古代～平安時代
25	W17	2013120	198	2区-1　上段	旧河道	棒材	スギ	角材		古代～平安時代
26	－	2013120	205	2区-1　上段	旧河道	加工材	モミ属	柾目		古代～平安時代
27	－	2013120	206	2区-1　上段	旧河道	加工材	モミ属	柾目		古代～平安時代
28	W12	2013120	210	2区-1　上段	旧河道	加工材	モミ属	柾目		古代～平安時代
29	－	2013120	208	2区-1　中段	旧河道	加工材	スギ	柾目		古代～平安時代
30	W8	2013120	221	2区-1　中段	旧河道	曲物底板？	ヒノキ	追柾目		古代～平安時代
31	W3	2013120	224	2区-1　中段	旧河道	加工材	モミ属	板目		古代～平安時代
32	－	2013120	230	2区-1　中段	旧河道	部材	モミ属	板目		古代～平安時代
33	W31	2013120	231	2区-1　中段	旧河道	部材	ツバキ属	柾目		古代～平安時代
34	W31	2013120	232	2区-1　中段	旧河道	部材	ツバキ属	柾目		古代～平安時代
35	W13	2013120	238	2区-1　中段	旧河道	加工材	カヤ	みかん割り		古代～平安時代
36	W40	2013120	242	2区-1　中段	旧河道	部材	モミ属	板目		古代～平安時代
37	W9	2013120	262	2区-1　中段	旧河道	曲物側板	ヒノキ	柾目	綴紐あり	古代～平安時代
38	W41	2013120	263	2区	旧河道	板材	モミ属	板目		古代～平安時代
39	W37	2013120	264	2区	旧河道	巨木材	モミ属	芯持丸木		古代～平安時代
40	W43	2013120	265	2区	旧河道	加工材	モミ属	みかん割り		古代～平安時代
41	W10	2013164	1	拡張区西	旧河道	ヘラ状木製品	ヒノキ	柾目		古代～平安時代
42	W34	2013164	4	拡張区東	旧河道(西)	杭	モミ属	みかん割り		古代～平安時代
43	W33	2013164	5	拡張区東	旧河道(西)	杭	モミ属	角材		古代～平安時代
44	W32	2013164	8	拡張区東	旧河道(西)	矢板	モミ属	板目		古代～平安時代
45	W22	2013164	19	拡張区東	旧河道(西)	付け木	ヒノキ	柾目		古代～平安時代
46	W11	2013164	32	拡張区東	旧河道(西)	丸棒	ウツギ属	芯持丸木	柄か	古代～平安時代
47	W15	2013164	34	拡張区東	旧河道(西)	加工材	ヒノキ	追柾目	孔あり	古代～平安時代
48	W44	2013164	44	拡張区東	旧河道(西)	部材？	モミ属	板目	孔あり	古代～平安時代

第４表　樹種同定結果詳細

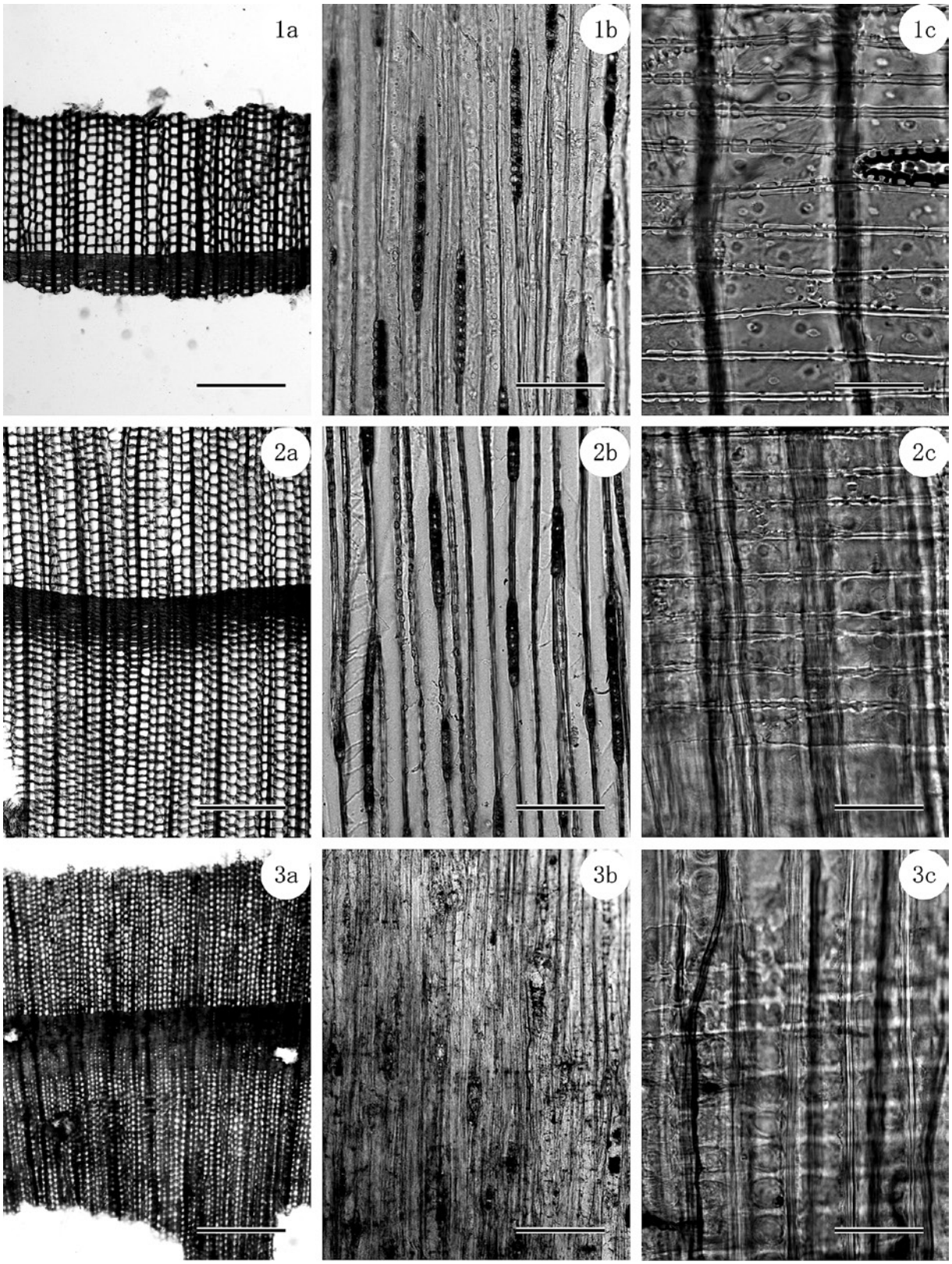


写真１　石道才谷・堂ノ後遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真（１）

1a-1c.モミ属(No.11)、2a-2c.モミ属(No.38)、3a-3c.マツ属複維管束亜属(No.7)

a:横断面(スケール=500μm)、b:接線断面(スケール=200μm)、c:放射断面(スケール=50μm)

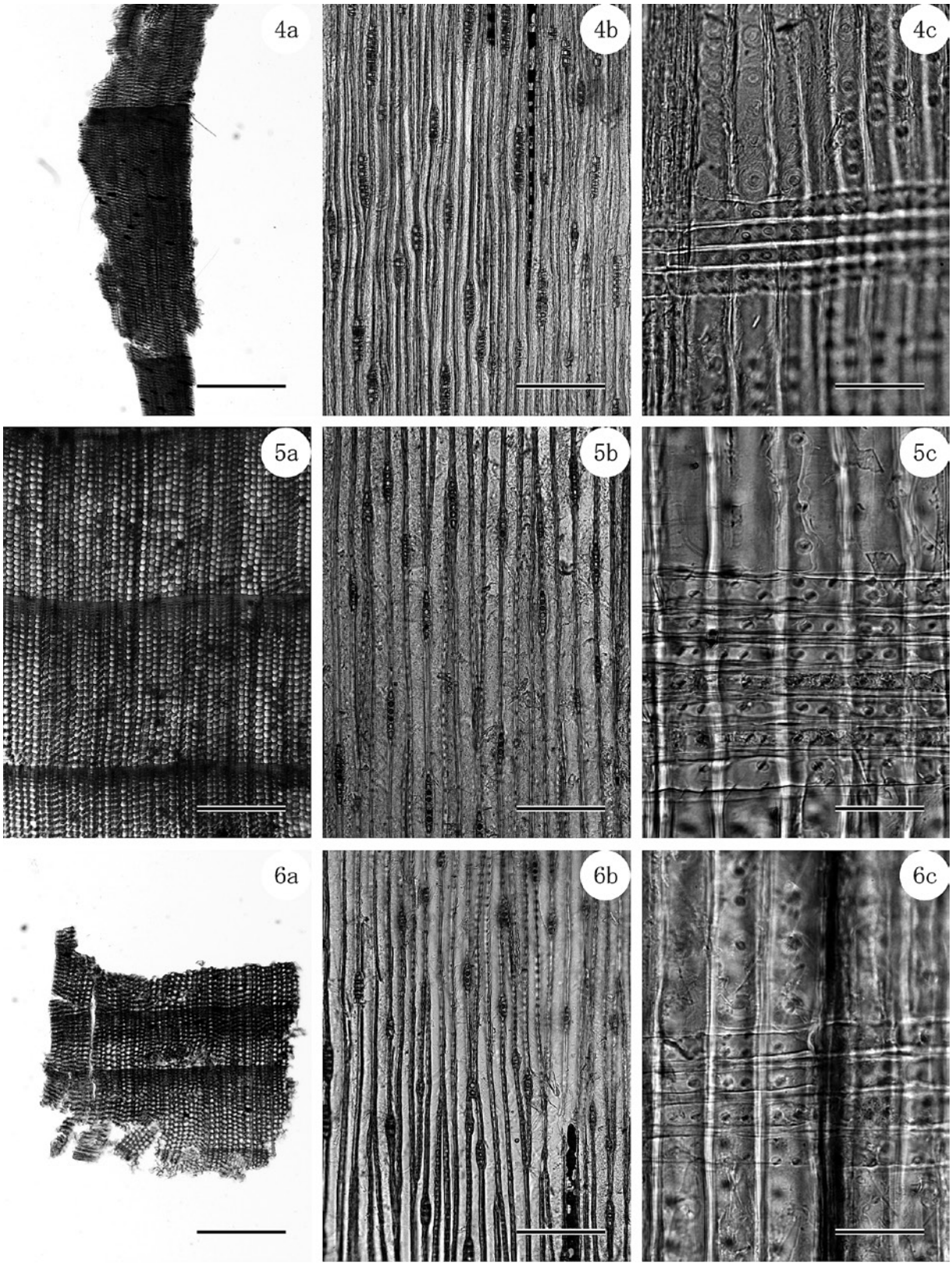


写真２　石道才谷・堂ノ後遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真（２）

4a-4c. スギ(No. 6)、5a-5c. ヒノキ(No. 16)、6a-6c. ヒノキ(No. 19)

a:横断面(スケール=500μm)、b:接線断面(スケール=200μm)、c:放射断面(スケール=50μm)

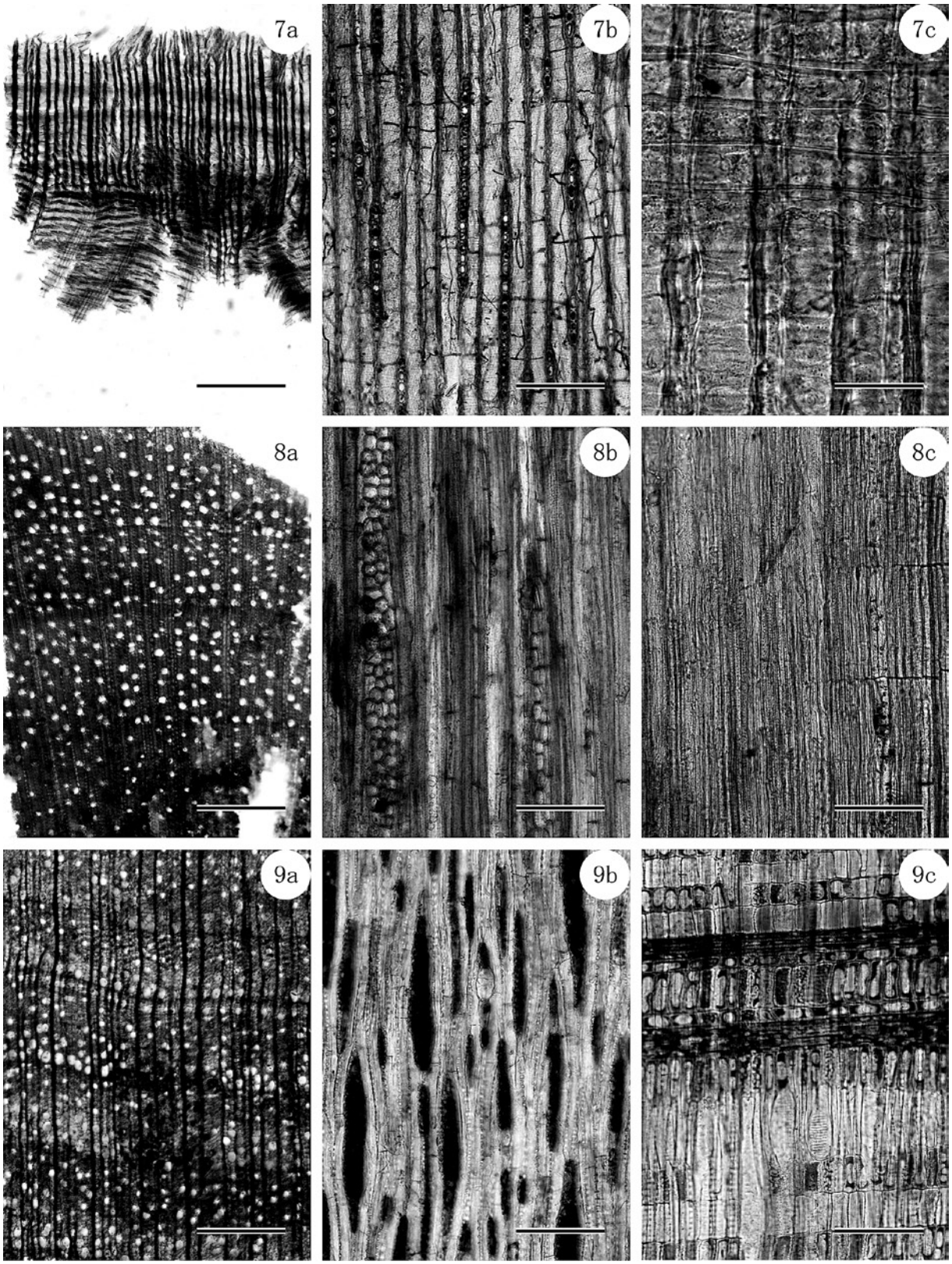


写真３　石道才谷・堂ノ後遺跡出土木製品の光学顕微鏡写真（３）

7a-7c. カヤ(No. 35)、8a-8c. ウツギ属(No. 46)、9a-9c. ツバキ属(No. 33)

a:横断面(スケール=500μm)、b:接線断面(スケール=200μm)、c:放射断面(スケール=7:50 μm・8-9:200μm)

第２節　石道才谷・堂ノ後遺跡出土種実同定

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

石道才谷・堂ノ後遺跡は、兵庫県川西市石道･才谷･堂ノ後に所在し、猪名川左岸に広がる狭小な盆地の北端、丘陵裾に位置する。平成25年度の発掘調査では、奈良時代の掘立柱建物跡･旧河道･柱穴･土坑や中世の溝等の遺構が検出されている。また、旧河道からは多量の土器(墨書土器･製塩土器･須恵器･土師器等)や木製品(木簡･斎串･馬形(?)等)が出土し、西側掘立柱建物跡より投棄されたと考えられている。

本分析調査では、主に旧河道より出土した種実遺体の同定を実施し、当時の植物利用や植生に関する資料を作成する。

１.試料

試料は、２区より出土した種実遺体14点(資料番号１～14)37個とされる。試料は全て水浸の状態で容器に入っている。各試料の内訳は、13点(資料番号１～13)が旧河道より出土し、うち7点(資料番号４～10)が包含層下層下部、３点(資料番号１，２,13)が包含層下層上部、２点(資料番号３,12)が包含層下層、１点(資料番号11)が包含層上層とされる。残りの１点(資料番号14)１個は、包含層上層とされる。

各試料の詳細は、結果とともに第５表に示す。

２.分析方法

試料を双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な種実遺体を抽出する。

種実遺体の同定は、現生標本および岡本(1973)、石川(1994)、伊藤(2001)、徳永(2004)、中山ほか(2010)、鈴木ほか(2012)、宮國(2014)等を参考に実施し、部位・状態別の個数を数えて、結果を第５表で示す。実体顕微鏡下による区別が困難な複数種間は、ハイフォンで結んで示す。また、デジタルノギスを用いて、種実遺体の大きさ等を計測し、結果を第５表に併記する。

分析後は、種実遺体を分類群別に容器に入れ、約70％のエタノール溶液で液浸保存する。

３.結果

結果を第５表に示す。また、種実遺体各分類群の写真を写真４に、計測値や特徴等を第５表に示して同定根拠とする。

分析に供された14試料を通じて、裸子植物１分類群(常緑針葉樹のカヤ)１個、被子植物４分類群(常緑広葉樹のアカガシ-ツクバネガシ、アカガシ亜属、落葉広葉樹のモモ、サクラ節)32個、計33個の種実遺体が同定された。種実以外は、木材が１個(資料番号11)、木の芽？が１個(資料番号５)、短枝？が１個(資料番号７)、部位不明の植物片が２個(資料番号10)の、計５個が確認された。

種実遺体は、栽培種のモモの核が26個(資料番号１～３,11～14)と最も多く、ほぼ包含層下層上部や包含層上部からの出土である。包含層下層上部と包含層上部におけるモモ核の形状に顕著な差異は認められず、頂部がやや尖る個体を主体とし、尖らず丸い個体も少量確認される(資料番号２)。また、一部の核には、ネズミ類による食痕が確認される(資料番号１，２,13)。

栽培種を除いた分類群は、高木になるカヤの種子が１個(資料番号４)、アカガシ-ツクバネガシの成熟果実が１個(資料番号８)、アカガシ亜属の幼果が２個(資料番号10)、小高木～高木のサクラ節の核が２個(資料番号９)の、計７個が確認され、全て旧河道包含層下層下部からの出土である。

４.考察

２区の旧河道より出土した種実遺体は、木本５分類群(針葉樹のカヤ、広葉樹のアカガシ-ツクバネガシ、アカガシ亜属、モモ、サクラ節)に同定され、栽培種のモモを主体とする組成を示した。

主に包含層下層上部や包含層上部より出土したモモは、栽培のために持ち込まれた渡来種とされ、観賞用の他、果実や種子が食用、薬用、祭祀等に利用される。モモが近辺で栽培されていたか、持ち込まれたかは不明であるが、当時利用された植物質食料と示唆され、河道内への投棄や埋納等の人為的行為に由来する可能性がある。今回のモモ核群の形状は、包含層下層上部と包含層上部における顕著な差異は認められず、頂部がやや尖る個体を主体とするが、頂部が丸い個体も少量混じる点を考慮すると、当時複数の系統のモモが利用された可能性が指摘され、今後の課題である。

栽培種を除いた分類群は、包含層下層下部より、常緑高木のカヤ、アカガシ亜属アカガシ-ツクバネガシ、落葉小高木～高木のサクラ節が確認された。これらの樹種は、現在の本地域の丘陵や山地にも分布する。幼果と成熟果実が確認されたアカガシ亜属アカガシ-ツクバネガシに関して、ツクバネガシは、山地の沢沿いの急斜面を好んで生育する傾向があり、アカガシは、しばしば温帯域に生えるブナと接して生えるように、山の斜面のかなり高いところにも生育する。これらの種間雑種と考えられる個体もあり、特に混生地に多い。当時の本遺跡周辺域にも、アカガシ-ツクバネガシが生育する常緑広葉樹林(照葉樹林)が存在したと考えられる。

なお、カヤは種子が、サクラ節は果実が食用可能である。アカガシ-ツクバネガシは、あく抜きを施すことで果実内部の子葉が食用可能となる。今回の出土種実には、人が食用に利用した痕跡は確認されないが、当時の遺跡周辺の照葉樹林から持ち込まれ利用された可能性は充分考えられる。

引用文献

石川茂雄,1994,原色日本植物種子写真図鑑.石川茂雄図鑑刊行委員会,328p.

伊藤ふくお,2001,どんぐりの図鑑,北川尚史監修,トンボ出版,79p.

宮國晋一,2014,どんぐりの呼び名事典.株式会社世界文化社,111p.

中山至大・井之口希秀・南谷忠志,2010,日本植物種子図鑑(2010年改訂版).東北大学出版会,678p.

岡本素治,1973,どんぐりのはなし(3).Nature Study,19巻8号,大阪市立自然科学博物館編,大阪自然科学研究会,7-10.

鈴木庸夫・高橋　冬・安延尚文,2012,ネイチャーウォッチングガイドブック　草木の種子と果実－形態や大きさが一目でわかる植物の種子と果実632種－.誠文堂新光社,272p.

徳永桂子,2004,日本どんぐり大図鑑.偕成社,156p.

第５表　種実同定結果一覧

資料番号	登録番号	地区	遺構	層位	分類群	部位	状態		個数	枝番	長さ (mm)	幅 (mm)	厚さ (mm)	図版番号	備考
1	2013120　271	2区-1・2　上段	旧河道	包含層下層上部	モモ	核	完形		1	－	22.0	17.9	13.6	7	頂部尖る
							完形未満	ネズミ類食痕	1	－	23.7	15.9 +	14.7	8	頂部やや尖る,食痕1箇所(腹面)
							完形未満		2	1	22.0 +	17.0 +	14.6	－	腹面～側面上部摩耗
										2	20.7 +	14.6 +	13.0 +	－	背腹両面・側面摩耗
							破片		1	－	21.4 +	16.5 +	7.4 +	－	半分厚,頂部欠損,種子窪み:残存長16.36mm,幅10.19mm
2	2013120　272	2区-1・2　上段	旧河道	包含層下層上部	モモ	核	完形		2	1	22.1	20.6	16.4	9	頂部丸い
										2	22.4	19.0	15.3	10	頂部やや尖る
							完形未満	ネズミ類食痕	1	－	23.6 +	19.0 +	15.1	11	頂部摩耗,食痕1箇所(背面),腹面基部欠損
							完形未満		1	－	22.7 +	17.5 +	13.7 +	－	背面～側面上部摩耗
							破片		1	－	24.4 +	22.5	8.9 +	18	半分厚,頂部欠損,種子窪み:長さ17.95mm,幅11.81mm
3	2013120　273	2区-1　上段	旧河道	包含層下層	モモ	核	完形		1	－	23.3	19.1	13.9	12	頂部わずかに尖る
4	2013120　274	2区-2　上段	旧河道	包含層下層下部	カヤ	種子	完形		1	－	32.3	10.6	10.9	1	
5	2013120　275	2区-2　上段	旧河道	包含層下層下部	種実ではない	木の芽?	破片		1	－	12.2	5.4	－	－	
6	2013120　276	2区-2　中段	旧河道	包含層下層下部	アカガシ亜属	殻斗	完形		1	－	5.0	10.4	－	3	輪状紋8段
7	2013120　277	2区-2　中段	旧河道	包含層下層下部	種実ではない	短枝?	完形		1	－	6.7	6.0	－	－	
8	2013120　278	2区-2	旧河道	包含層下層下部	アカガシ-ツクバネガシ	果実	完形		1	－	21.7	13.9		2	着点径6.57mm,頂部:長さ2.64mm,径3.51mm突出,花柱上部欠損
9	2013120　279	2区-2	旧河道	包含層下層下部	サクラ節	核	完形		1	－	7.2	5.0	3.9	6	基部:穴径0.85mm
							破片		1	－	5.6 +	4.4 +	－	－	
10	2013120　280	2区-2	旧河道	包含層下層下部	アカガシ亜属	幼果(果実)	完形		1	－	4.6	3.9	－	5	幅:着点径
						幼果(殻斗)	破片		1	－	2.3 +	4.9	－	4	輪状紋3段残存
					種実ではない	不明	破片		2	－	8.2	6.0	－	－	
11	2013120　282	2区-1　上段	旧河道	包含層上部	モモ	核	完形未満		3	1	21.6 +	17.5 +	14.2	14	背面上部欠損
										2	21.6 +	18.9 +	14.1	－	上部欠損
										3	20.2 +	16.5 +	12.7	－	背面上部欠損
					種実ではない	木材	破片		1	－	12.2	5.4	－	－	
12	2013120　285	2区-1　上段	旧河道	包含層下層	モモ	核	完形未満		1	－	24.6	18.9	13.6	13	頂部尖り湾曲,腹面下部欠損
13	2013120　292	2区-1～2 上段	旧河道	包含層下層上部	モモ	核	完形未満	ネズミ類食痕	1	－	24.2	17.9	15.7	15	頂部丸い,食痕1箇所(腹面),背面中央欠損
							完形未満		7	1	22.5	16.6 +	13.5	16	頂部やや尖る,腹面下部欠損
										2	22.6	17.7 +	12.3	－	頂部やや尖る,腹面下部欠損,背面摩耗
										3	23.0 +	16.1 +	14.1	－	腹面下2/3欠損,背面上部摩耗
										4	22.3	17.9	14.8	－	頂部丸い,腹面・背面～側面下部欠損
										5	22.3 +	16.0 +	13.9	－	背腹両面欠損
										6	21.2	16.4 +	12.4 +	－	頂部わずかに尖る,腹面基部・背面欠損,表面摩耗
										7	20.7 +	15.0 +	13.5 +	－	背腹両面欠損,表面摩耗
							破片		2	1	20.6 +	17.6	7.3 +	－	半分厚,頂部欠損,種子窪み:残存長15.15mm,幅10.58mm
										2	23.3 +	14.4 +	－	－	表面摩耗
14	2013120　297	2区-2　中段		包含層上部	モモ	核	完形未満		1	－	21.7 +	17.0 +	14.8	17	背面上部,腹面下部欠損

写真4　出土種実類

1．カヤ 種子(資料番号４)
2．アカガシ-ツクバネガシ 果実(資料番号８)
3．アカガシ亜属 殻斗(資料番号６)
4．アカガシ亜属 幼果(殻斗)(資料番号10)
5．アカガシ亜属 幼果(果実)(資料番号10)
6．サクラ節 核(資料番号９)
7．モモ 核(資料番号１)
8．モモ 核(ネズミ類食痕)(資料番号１)
9．モモ 核(資料番号２)
10．モモ 核(資料番号２)
11．モモ 核(ネズミ類食痕)(資料番号２)
12．モモ 核(資料番号３)
13．モモ 核(資料番号12)
14．モモ 核(資料番号11)
15．モモ 核(ネズミ類食痕)(資料番号13)
16．モモ 核(資料番号13)
17．モモ 核(資料番号14)
18．モモ 核(資料番号２)

第５章　結　　語

１．奈良時代の遺構・遺物

【遺跡の所属時期】

今回の調査により、奈良時代を中心とした遺跡の存在が明らかとなった。明確な遺構としては掘立柱建物跡１棟のみであるが、旧河道から出土した墨書土器を含む多量の土器、木簡や斎串等の木製祭祀具から、在地勢力の拠点的遺跡ないしは官衙的性格を有する遺跡と判断される。旧河道および遺構内から出土した遺物から見るならば、本遺跡は奈良時代前期に成立し、平安時代前期には衰退～廃絶をたどったと考えられる。

その後調査地周辺は、広い範囲で耕地化され現在に至っている。耕地化の時期については確定し難いものの、旧耕作土層に瓦器や青磁が含まれることから、中世にまでさかのぼる可能性がある。

今回の調査成果の中核をなすのは、２区で検出された掘立柱建物跡とこれに接する旧河道内から出土した多量の土器類および木簡、木製祭祀具である。

【掘立柱建物跡】

掘立柱建物は、わずか１棟の検出ではあったが、建物がほぼ正しく東西方向に長軸を持つことが注目に値する。

掘立柱建物跡北側の調査区端で建物跡と同規模の柱穴２基を検出したことから、北側に別の掘立柱建物跡が存在していた可能性は高い。

【旧河道】

旧河道は、掘立柱建物跡が立地する微高地の先端に沿って、北東～南西方向にのびる。河道の幅は５～６ｍ、検出面からの深さは最大約0.8mを測る。旧河道内は主として砂礫～シルトによって埋積されており、検出面～１ｍ内外の深度で、大量の土器や木製品が出土した。これらの遺物は、掘立柱建物跡がある西寄りに集中して出土していることから、西側(建物側)から投棄されたと考えられる。

土器の多くは奈良時代の須恵器・土師器等であるが、上層には一部、平安時代前期と考えられる須恵器や緑釉陶器も含まれており、河道は平安時代初めごろには埋積されて平坦化したものであろう。

旧河道内の出土遺物では、木簡・木製祭祀具・墨書土器・製塩土器が注目される。

【木簡・墨書土器】

木簡および墨書土器については、報告書作成にあたり独立行政法人奈良文化財研究所の馬場基氏らに釈読のご指導をいただいた。既述のとおり、本資料の文字については「牒カ」という推定で木簡研究誌上に報告したが(久保弘幸　2013)、この推定については、ここで正式に撤回しておく。

残念ながら木簡については、文字を確定することはできなかったが、少数ながら出土した木製祭祀具を考慮するならば、本遺跡が地域における準官衙とも言うべき性格を持っていた可能性については変更する必要はないだろう。木簡の他に、35点が確認された墨書土器と、須恵器転用硯の存在も、この推定と矛盾しない。

第６表　墨書の位置

杯A底部	14	杯A体部	2	杯A体部＋底部	2
杯B底部	3	杯B蓋天井部	2	杯B体部＋底部	1
稜椀蓋	1	灰釉底部	1	杯体部	5
杯底部	4				

第７表　墨書文字一覧

石	5	□道	1	十(または×)	1
石 ヵ	3	道	1	屋(または戸主)	1
石道	2	東	1	佐十(または×)	1
石道 ヵ	2	大	1	不明	17

墨書土器はいずれも須恵器の杯であり、土師器への墨書は確認されていない。墨書の位置および内容は、第６・７表のとおりである。35点中判読できたもの、あるいは文字が推測できたものは19点である。

「石」およびその可能性があるものが1/4近い８点を占め、次いで「道」が多い点、明らかに「石道」と判断されたものが２例、「石道」の可能性が高いものが２例認められることから、「石」、「道」の墨書は、本遺跡が所在する小字「石道」の地名を表すものと考えて大過ないだろう。 判読および推定可能な24文字中、18文字が「石道」ないしは「石」「道」のいずれかである。

現代の小字に相当する地名が、考古資料によって奈良時代まで遡ることが確認できる事例は少ないと思われる。

【大型材】

他に、大型木３本が旧河道から出土した。うち１本には、斧による切断の痕跡が明瞭に残されていた。切断痕のある伐採木の全長は５m程で枝打ちがなされておりモミ属と同定された(本書第４章)。この材については、奈良文化財研究所において年輪年代測定を試みていただいたが、年輪数の不足により年代を決定することはできなかった。

他の大型木は、長さ５～８m、直径40～50cmの針葉樹で、うち１点は枝払いのみがなされ、他の１点は枝がそのまま残されていた。腐朽の進行のため、伐採木と確定することはできなかったが、枝払いがなされていた１点については、その可能性が高いと推測される。

これらの大型材は、いずれも旧河道下底にあったこと、材周辺において時代の異なる遺物がまったく出土していないことなどから、材が奈良時代に伐採、遺棄された可能性はきわめて高いと言える。本遺跡の成立以後、調査地周辺部の森林が伐採され、利用されていたことは疑いない。当該期の開墾の状況を示す資料として注目してよいだろう。

【遺跡をめぐる古環境】

今回の調査で出土した種実類は、モモの核が主体となる組成を示した。このことは遺跡内でモモが消費されていたことを示すとともに、周辺での栽培も想定させる。また、その他の種実類からは、遺跡周辺には常緑広葉樹林が存在したと推定できる。

一方で木製品の樹種は、ヒノキ、モミ属が圧倒的多数を占め、広葉樹はわずかにウツギ属・ツバキ属

が含まれるのみである。旧河道下底から出土した伐採木のうち１点も、モミ属と同定されている。出土した木製品は、その性格上、ヒノキ・モミ属などの針葉樹が選択的に使用されたことは疑いないが、大型伐採木の存在は、モミ属を含む針葉樹林が、遺跡周辺に存在した可能性を想起させる。

２．畝野牧との関わり

畝野牧については、『日本後紀』平城天皇の大同三年七月の項に、「癈攝津國川邊郡畝野牧　爲牧馬逸出損害民稼」と記載されるのみで、他に文献はなく、本遺跡の東側、緩やかな峠を越えた場所に位置する川西市西畦野・東畦野が、その地名から推定地とされているに過ぎなかった。しかしこれまでの調査では、西畦野、東畦野地区では、奈良時代の有力な遺構群は見いだされていない。

しかしこの記録からは、大同三年の廃止に至るまでの期間、畝野牧が存在したことは確実であり、大同三年を遡る奈良時代に畝野牧の主要な操業期間があったことは疑いないだろう。確定的な物的証拠はないものの、石道才谷・堂ノ後遺跡が、①木簡、木製祭祀具、多数の墨書土器と転用硯といった官衙相当と思われる要素を備えること、②出土遺物の主要な時期が奈良時代にあり、遺物から判断される遺跡終焉の時期が、『日本後紀』記載の畝野牧廃止時期に概ね相当していること等を考慮するならば、本遺跡が何らかの形で畝野牧と関わる可能性は高いと推定しても大過ないだろう。

微地形からみて、居住可能な範囲が広くないと推定され、居住関連遺構も限定されている本遺跡で、多数出土した製塩土器も、馬の飼養との関係を推測させる要素である。

また一辺が500mほどの三角形の盆地状地形はごく閉鎖的な地形環境であり、本遺跡からその全域を一望することができることからも、調査地周辺に牧が存在したという推定と矛盾しないと考えられる。

【その他の成果】

２区の旧河道からは、 原位置を遊離した状態ではあるものの、 縄文土器や石器(有茎尖頭器、 剥片、すり石)が出土している。 特に有茎尖頭器は川西市内では初の出土例であり、北摂地域における縄文時代草創期の人類活動について、新たな知見をもたらすものとなった。

参考文献

黒板勝美編　1984 『新訂増補国史大系　日本後紀』 吉川弘文館

第２－１表　掲載遺物一覧（土器）

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	出土地区	出土遺構	層位	法量（cm・g）				調整・特徴
								口径（幅）	器高（長さ）	底径（厚み）	重量・他	
01	11	21	須恵器	こね鉢	トレンチ２			–	(5.05)	–		外面：重ね焼痕あり　内面：ユビオサエ
02	11	21	須恵器	壺（短頸壺）	トレンチ 21			(8.5)	(1.7)	–		
03	11	21	須恵器	杯Ｂ蓋	１区	旧河道（谷部）	整地層～谷部埋土	(14.7)	2.3	–		外面：天井部回転ヘラケズリ
04	11	22	須恵器	蓋	２区	SP213（SB01）		(147.0)	(1.0)	–		
05	11	21	須恵器	壺（口縁）	２区	SP213（SB01）		(9.6)	(6.25)			
06	11	22	土師器	甕	２区	SP213（SB01）		(17.6)	(3.4)	–		外面：口縁部ヨコナデ、体部表面剥離 内面：口縁部ヨコナデ、体部タテ方向のケズリ
07	11	21	須恵器	杯B	２区	SP216（SB01）		–	(4.2)	(11.8)		外面：高台貼り付け、底部回転ヘラケズリのちナデ、自然釉 内面：仕上げナデ
08	11	22	土師器	杯	２区	SP223（SB01）		(13.75)	(3.2)	(11.3)		外面：口縁部沈線１条、ヨコナデ、底部ナデ 内面：口縁部沈線１条、体部ヨコ方向のミガキ
09	11	22	須恵器	杯B	２区	SP223（SB01）		–	(2.95)	(10.0)		外面：高台貼り付け、底部回転ヘラ切り
10	11	22	土師器	甕	２区	SP214（SB01）		(25.6)	(6.45)	–		外面：口縁部ヨコナデ、体部タテハケ　内面：口縁部先端ヨコナデ、ナナメ方向のハケ、体部ヨコハケ
11	11	21	須恵器	杯B	２区	SP225（SB01）		–	(3.05)	12.05		外面：高台貼り付け、底部回転ヘラ切り後ナデ 内面：多方向に仕上げナデ
12	11	22	須恵器	杯B	２区	SK208		(9.85)	3.5	(5.8)		外面：高台貼り付け
13	11	35	土製品	土錘	２区	SP212（SB01）		1.8	5.7	1.8	18.7	
14	11	35	土製品	土錘	２区	SB01 柱穴のいずれか		1.8	4.7	1.75	13.4	外面：黒斑あり
15	11	35	土製品	土錘	２区	SX209		1.9	5.3	1.9	17.5	
16	11	23	須恵器	杯Ｂ蓋	２区 -2 中段	旧河道	包含層下層～礫層	(16.7)	3.35	–		外面：天井部回転ヘラ切りのちナデ 内面：中心一方向の仕上げナデ　内面墨付着（転用硯）
17	11	31	須恵器	杯Ｂ蓋	２区 -2 中段	旧河道	包含層下層　下部	(20.2)	(2.0)	–		外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部回転ナデ 内面：多方向の仕上げナデ
18	11	23	須恵器	稜椀蓋	２区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層	(20.1)	2.3	–		内面：一方向の仕上げナデ
19	11	23	須恵器	稜椀蓋	２区 -2 中段		包含層下層	19.6	4.5	–		内面：不定方向の仕上げナデ
20	11	31	須恵器	蓋	２区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層	(28.0)	(3.1)	–		外面：天井部回転ヘラケズリのちナデ、口縁先端１条の沈線 内面：一方向の仕上げナデ
21	11	23	須恵器	杯A	２区 -1・2	旧河道	東西トレンチ	12.4	3.2	9.15		外面：底部回転ヘラ切り、ひだすきあり 内面：ひだすきあり
22	11	23	須恵器	杯A	２区 -2 中段北側		包含層下層～礫層	(12.55)	3.2	8.7		外面：底部回転ヘラ切りのち弱いナデ、外面～底部ひだすきあり
23	11	23	須恵器	杯A	２区 -2 中段	旧河道肩部	包含層下層　下部	13.75	3.8	9.95		外面：底部回転ヘラ切り　半分以上変色（二次被熱か？）
24	11	23	須恵器	杯A	２区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層上層	(13.3)	3.2	7.5		外面：底部ヘラ切りのちナデ、板目状圧痕？残る 内面：一方向の仕上げナデ
25	11	23	須恵器	杯A	２区 -1・2	旧河道	東西トレンチ	13.15	3.85	8.2		外面：底部回転ヘラ切り　内面：仕上げナデ
26	11	23	須恵器	杯A	２区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層上層	14.0	3.3	8.7		外面：底部ヘラ切りのちナデ　内面：一方向の仕上げナデ
27	12	23	須恵器	杯A	２区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層上層	14.4	3.7	7.6		外面：底部ヘラ切りのちナデ　内面：一方向の仕上げナデ

28	12	23	須恵器	杯A	2 区 -1 ～ 2 上段	旧河道	包含層下層　上部	14.7	3.7	9.2		外面：底部回転ヘラ切り　内面：底部前面に墨付着
29	12	24	須恵器	杯A	2 区 -2 上段	旧河道肩部	下層　下部	(12.4)	4.1	-		外面：底部器表剥離　内面：一方向の 仕上げ　口縁部歪みあり、内外面一部黒変
30	12	24	須恵器	杯B	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層下　礫層	12.3	4.4	9.55		外面：高台貼り付け（端部を内側に巻き込む）、底部回転ヘラ切りのち回転ナデ
31	12	24	須恵器	杯B	拡張区西	旧河道	暗褐シルト・砂レキ	(12.9)	4.1	(8.9)		外面：高台貼り付け、底部ヘラ切りのちナデ、円状の工具のアタリあり　内面：仕上げナデ
32	12	24	須恵器	杯B	2 区 -2 上段	旧河道肩部	包含層下層　下部	(14.8)	3.9	(10.3)		外面：高台貼り付け、底部ヘラ切りのちナデ 内面：一方向の仕上げナデ
33	12	24	須恵器	杯B	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層～礫層	(14.5)	3.7	10.7		外面：高台貼り付け、底部回転ヘラ切り 内面：多方向の仕上げナデ
34	12	24	須恵器	杯B	2 区 -2	旧河道	包含層下層　礫層	(15.1)	4.1	10.85		外面：高台貼り付け、底部回転ヘラ切り 内面：底部円弧状板ナデ、一方向の仕上げナデ
35	12	24	須恵器	杯B	2 区 -2 中段	旧河道肩部	包含層下層　下部	(18.2)	6.65	12.75		外面：高台貼り付け、底部回転ヘラ切りのち弱いナデ 内面：多方向の仕上げナデ
36	12	24	須恵器	杯B	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層上層	(17.9)	6.3	(11.9)		外面：高台貼り付け、底部回転ヘラ切りのち仕上げナデ 内面：仕上げナデ
37	12	24	須恵器	高杯（脚部）	2 区 -2 中段		包含層下層	-	(8.9)	-		内面：ヘラケズリ
38	12	25	須恵器	壺（瓶）	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層上層	-	(5.15)	4.0		外面:胴部に凹線状の2条のヘラ先工具痕、底部回転糸切り、工具の強いアタリで平高台を企図
39	12	25	須恵器	壺（底部）	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層～礫層	-	(3.5)	6.1		外面：高台貼り付け、底部回転ヘラ切り
40	12	25	須恵器	長頸壺	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層　上部	11.4	22.3	11.35		外面：肩部のみ非常に美しく仕上げる、肩先端回転ケズリ風ヨコの板ナデ、体部にヘラ記号？、下部回転ケズリ、高台貼り付け、底部回転ヘラ切りのちナデ、頸部片側のみ灰被り 内面：頸部繋目タテ方向の板ナデと指ナデ、底部頸接合時の粘土カス付着
41	12	25	須恵器	壺（底部）	2 区 -2 中段		包含層下層	-	(5.7)	(12.5)		外面：体部下部回転ケズリ、高台貼り付け、底部ナデ 内面：小さい付着粘土あり（頸部接合時のものか？）
42	12	25	須恵器	壺（底部）	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層上層	-	(6.5)	(9.0)		外面：高台貼り付け、底部ヘラ切りのちナデ
43	12	25	須恵器	長頸壺	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層下層　下部	-	(16.5)	-		
44	12	25	須恵器	長頸壺	拡張区西	旧河道	暗褐色シルト・砂礫	-	(15.6)	(13.0)		外面：体部下部回転ケズリ、高台貼り付け、底部回転ナデ 内面：底部ナデ
45	12	25	須恵器	短頸壺	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層上層	(8.2)	(13.6)	-		
46	13	26	須恵器	壺（双耳壺）	拡張区西	旧河道	暗褐色シルト・砂礫	-	(30.6)	12.9		外面：胴部回転ナデのち 板ナデ、下部ケズリ、底部に別個体の付着物あり　正面下部に把手様の貼り付けあり　外面上半と内面底部に円形の灰被り自 然釉付着
47	13	32	須恵器	甑	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層下層　下部	-	(8.2)	(16.5)		外面：底部ヘラ切りのちナデ
48	13	31	須恵器	甕	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層　上部	(18.3)	(7.2)	-		外面：体部平行タタキ　内面：体部青海波のタタキ
49	13	26	須恵器	横瓶	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層　上部	(11.4)	(25.1)	-		外面：体部上半ヨコ方向の平行タタキ、下半タテ方向の平行タタキのちナデ、重ね 焼痕？　内面：青海波　側面：円板充填

50	14	27	土師器	杯	2 区 -2 上段	旧河道肩部	包含層下層　下部	(18.0)	3.3	-		外面：口縁部ヨコナデ、底部ナデ 内面：口縁部１条の沈線、底部円弧状の暗文、朱塗り？
51	14	31	土師器	皿	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層　上部	-	(1.5)	(21.85)		外面：体底部板ナデ　内面：ナデ
52	14	31	黒色土器	椀	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層　上部	(14.35)	4.4	-		外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ　内面：黒色、口縁部ヨコナデ、体底部ナデのち暗文、広い範囲に1～3mm 単位の細かな亀甲状クラックあり
53	14	31	黒色土器	椀	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層上層	(17.1)	4.2	8.7		外面：磨滅のため調整不明、高台貼り付け 内面：全体に炭素吸着、ミガキ、底部円弧状暗文
54	14	27	土師器	甕	2 区 -2	旧河道	包含層下層　下部	(17.1)	(15.1)	-	腹径 (16.4)	外面：口縁部ヨコナデ、体部上半ヨコハケのちタテハケ、底部板ナデ　内面：口縁部ヨコハケ、体部板ナデ
55	14	27	土師器	甕	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層～礫層	(16.5)	(7.4)	-		外面：口縁部ヨコナデ、ユビオサエ残る、体部タテハケ　断面にスス付着　内面：口縁部ヨコハケ、体部ヨコ方向の板ナデ
56	14	33	土師器	甕	2 区 -2 上段	旧河道肩部	下層　下部	(16.8)	(8.0)	-		外面：口縁部ヨコナデ、体部タテ方向のハケ　内面：口縁部先端強いヨコナデ、体部板ナデ、スス状の付着物あり
57	14	32	土師器	甑？	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層下層　下部	(24.1)	(4.9)	-		外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ、スス付着 内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ
58	14	32	土師器	把手	2 区 -2	旧河道	包含層下層　礫層	-	(7.8)	-		外面：ユビナデ、体部ナデ　内面：板ナデ
59	14	27	土師器	甕	2 区 -2	旧河道	包含層下層　礫層	29.1	26.7	-	腹径 (26.1)	外面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ　内面：口縁部ヨコハケ、体部ハケ、下半あて具痕の凹凸はげしい
60	14	33	土師器	鍋	2 区	旧河道	包含層下層　下部	(39.4)	(8.9)	-		外面：口縁部ヨコナデ、体部多方向のハケ、ススコゲ付着 内面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ、ユビオサエ、ススコゲ付着
61	14	34	土師器	製塩土器	2 区 -2 中段		包含層下層	(12.6)	(7.5)	-		外面：ナデ　内面：ナデ
62	14	34	土師器	製塩土器	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層～礫層	(10.6)	(9.95)	-		外面：ユビオサエのちナデ、ユビアト残る　内面：ナデ
63	14	27	土師器	製塩土器	2 区 -2 中段北側		包含層下層～礫層	長 13.6 短 6.3	(11.6)	-		外面：ナデ　内面：ヨコ方向のナデ、ユビナデ　口縁歪みあり、楕円形
64	15	32	緑釉陶器	椀	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層上層	-	(2.8)	(7.2)		外面：高台ケズリ出し（工具の強いアタリで沈線状になる）、施釉、底部糸切り　内面：施釉
65	15	26	灰釉陶器	皿？	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層　上部	-	(2.15)	7.75		外面：高台貼り付け、底部回転ヘラ切り　内面：施釉
66	15	26	灰釉陶器	皿	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層上層	(14.8)	2.7	6.9		外面：高台貼り付け、底部ヘラ切りのちナデ、施釉 内面：施釉
67	15	32	緑釉陶器	椀	2 区 -2	旧河道	包含層下層　上部	(19.3)	(4.9)	-		外面：施釉　内面：施釉
68	15	32	灰釉陶器	皿	2 区 -2 中段北側		包含層下層～礫層	(15.2)	(3.3)	(7.0)		外面：高台貼り付け、高台内露胎、底部回転ヘラ切り、施釉 内面：施釉
69	15	32	灰釉陶器	皿？	2 区 -2 上段～中段		包含層下層	-	(1.5)	(7.4)		外面：高台貼り付け、底部ヘラ切りのちナデ　内面：施釉
70	15	32	須恵器	鉢	2 区 -1 上段		包含層上層	-	(5.3)	-		外面：指頭痕あり、重ね焼痕
71	15	32	土師器	鍋	2 区 -1 上段		包含層上層	(22.6)	(6.0)	-		外面：口縁部ヨコナデ、体部平行タタキ 内面：同心円状あて具痕
72	15	32	青磁	碗？	2 区 -1 上段		包含層上層	-	(1.55)	3.7		外面：高台先端露胎、貫入あり
73	15	28	須恵器	壺（瓶）	2 区 -1 ～ 4		包含層上層？	-	(4.65)	(5.8)		外面：高台貼り付け、底部回転ヘラ切り、一部に墨？付着 内面：一部に墨？付着
74	15	28	須恵器	杯 B 蓋	2 区 -2 南（下段）		包含層	(15.2)	2.0	-		外面：天井部回転ケズリのちナデ 内面：一方向の仕上げナデ　墨付着？（転用硯）
75	15	28	須恵器	杯 B 蓋	2 区 -2・3 中段		包含層下層～礫層	(14.45)	2.8	-		外面：天井部回転ヘラ切りのちナデ　内面：仕上げナデ
76	15	28	須恵器	杯 B 蓋	2 区 -3 下段		包含層	13.4	3.2	-		外面：天井部回転ケズリのちナデ　内面：仕上げナデ

77	15	28	須恵器	杯Ｂ蓋	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層下層　下部	15.4	1.9	-		外面：回転ヘラ削り、つまみ貼り付け、体部回転ナデ 内面：仕上げナデ
78	15	28	須恵器	杯A	2 区 -3 南下段		包含層上層 (灰色シルト)	13.2	3.5	9.9		外面：底部ヘラ切りのちナデ、口縁部重ね焼痕、ひだすき残る 内面：一方向の仕上げナデ
79	15	28	須恵器	杯A	2 区 -2・3 下段		包含層下層	12.8	3.6	-		外面：体部ヘラ切りのちナデ
80	15	28	須恵器	杯A	2 区 -2 中段		包含層下層	(12.3)	4.1	-		外面：底部ヘラ切りのちナデ　内面：一方向の仕上げナデ
81	15	28	須恵器	杯A	2 区 -2・3 中段		包含層下層～礫層	13.1	3.9	9.6		外面：底部回転ヘラ切り
82	15	28	須恵器	杯A	2 区 -2 中段北側		包含層下層～礫層	(13.15)	3.4	9.05		外面：底部ヘラ切りのち弱いナデ
83	15	28	須恵器	杯B	2 区 -2・3 中段		包含層下層～礫層	(12.2)	4.5	(8.75)		外面：体部下半回転ケズリ、高台貼り付け、底部回転ヘラ切りのちナデ
84	15	29	須恵器	杯B	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層下層　下部	(12.6)	4.6	(8.0)		外面：高台貼り付け、底部ヘラ切りのちナデ 内面：一方向の仕上げナデ
85	15	29	須恵器	杯B	2 区 -2・3 下段		包含層下層	(13.2)	4.4	9.6		外面：高台貼り付け、底部ヘラ切りのちナデ 内面：一方向の仕上げナデ
86	15	29	須恵器	杯B	2 区 -2・3 下段		包含層下層	14.0	4.0	8.9		外面：高台貼り付け、底部ヘラ切りのちナデ 内面：一方向の仕上げナデ
87	15	29	須恵器	杯B	2 区 -2・3 下段		包含層下層	(14.0)	3.7	10.2		外面：高台貼り付け、底部ヘラ切りのちナデ 内面：一方向の仕上げナデ
88	15	29	須恵器	杯B	2 区 -2 中段北側		包含層下層～礫層	(14.8)	4.75	(10.9)		外面：高台貼り付け、底部回転ヘラ切り、一部自然釉付着
89	15	29	須恵器	杯B	2 区 -2 上段～中段		包含層下層	(15.0)	5.6	(9.2)		外面：高台貼り付け、底部ヘラ切りのちナデ 内面：一方向の仕上げナデ
90	15	29	須恵器	杯B	2 区 -2 中段北側		包含層下層～礫層	(15.55)	6.0	(9.55)		外面：高台貼り付け、底部回転ヘラ切り 内面：仕上げナデ
91	15	29	須恵器	杯B	2 区 -2 中段北側		包含層下層～礫層	(16.15)	5.1	(11.3)		外面：高台貼り付け、底部ケズリに近い板ナデ（円形に工具のアタリ）、仕上げナデ
92	15	29	須恵器	蓋（壺蓋）	2 区 -2・3 中段		包含層下層～礫層	-	(2.6)	-		外面：自然釉付着
93	15	33	須恵器？	鉢	2 区 -3		包含層下層　下部	(29.5)	(10.0)	(15.6)		外面：ヨコナデ　内面：器表剥離のため調整不明
94	16	29	須恵器	こね鉢	2 区 -2・3 中段		包含層下層～礫層	-	(7.65)	11.35		外面:底部細い竹串状工具のようなもので浅く突き刺す（25ヶ所ほど）　内面：ナデ
95	16	30	土師器	杯	2 区 -2・3 中段		包含層下層～礫層	(12.4)	3.75	(9.85)		外面：ヨコナデ、底部ユビオサエ、ナデ 内面：ヨコナデ、口縁部１条の沈線、底部ナデ
96	16	33	土師器	杯	2 区 -3		下段撹乱部	(12.6)	(4.0)	-		外面：口縁部ヨコナデ、磨滅のため調整不明、外面のユビオサエ状の凹凸が目立つ　内面：磨滅のため調整不明
97	16	33	土師器	杯	2 区 -2 中段		包含層下層	(17.4)	(4.4)	-		外面：口縁部ヨコナデ、体部ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部磨滅のため調整不明
98	16	30	土師器	杯	2 区 -2 中段北側		包含層下層～礫層	(14.7)	3.1	(12.75)		外面：ヨコナデ、口縁部に沈線状の段、底部ユビオサエのちナデのち仕上げの軽い板ナデ　内面：ヨコナデ、口縁部１条の沈線、底部ナデ
99	16	33	土師器	甕	2 区 -2 下段		包含層	(27.4)	(6.4)	-		外面：口縁部ヨコナデ、体部タテ方向のハケ、スス付着 内面：器表剥離のため調整不明
100	16	33	土師器	甕	2 区 -2・3 中段		包含層下層～礫層	(14.65)	(3.9)	-		外面：口縁部ヨコナデ、体部板ナデ 内面：口縁部ヨコナデ、体部ヨコ方向のナデ、炭化物付着
101	16	33	土師器	甕	2 区 -2 中段		包含層下層～礫層	(27.9)	(5.5)	-		外面：口縁部ヨコナデ、体部タテ方向のハケ 内面：粗いヨコ方向のハケ、体部ナデ

102	16	33	土師器	鍋	2 区 -2・3 中段		包含層下層～礫層	(20.65)	(5.45)	-		外面：口縁部ヨコナデ、体部上半ヨコ方向の板ナデ、下半ハケ　内面：口縁部ヨコナデ、体部ハケ
103	16	33	土師器	甑	2 区 -3		包含層下層　下部	-	(7.6)	(15.3)		外面：タテ方向の板ナデ、下部ヨコナデ 内面：ナデ、下部ヘラケズリ
104	16	34	土師器	製塩土器	2 区 -2 中段北側		包含層下層～礫層	(10.75)	(7.5)	-		外面：ヨコナデ、体部ナデ、ユビアト残る 内面：ヨコ方向のユビオサエ、ユビナデ、ユビアト残る
105	16	34	土師器	製塩土器	2 区 -2 中段北側		包含層下層～礫層	-	(10.8)	-		外面：ナデ　内面：ナデ、ヨコ方向のナデ、ナナメのユビナデ、ユビオサエ
106	16	34	土師器	製塩土器	2 区 -3 中段		整地層	(14.2)	(8.2)	-		内面：口縁部ナデ　他は器表剥離のため調整不明
107	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層	1.6	2.7	1.6	5.7	
108	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層	1.6	3.15	1.5	6.1	
109	16	36	土製品	土錘	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層下層　下部	1.8	3.3	1.8	8.8	
110	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層	1.5	3.15	1.4	5.6	
111	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層	1.3	3.7	1.3	5.3	
112	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層上層	1.3	3.4	1.2	5.1	
113	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層上層	1.7	4.3	1.5	10.3	
114	16	35	土製品	土錘	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層～礫層	1.7	4.65	1.6	11.5	
115	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 上段	旧河道肩部	下層　下部	1.85	4.5	1.7	11.9	
116	16	35	土製品	土錘	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層～礫層	1.85	4.7	1.85	12.0	
117	16	35	土製品	土錘	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層～礫層	1.75	4.8	1.8	13.6	
118	16	35	土製品	土錘	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層～礫層	1.75	4.9	1.8	13.7	
119	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層上層	1.9	4.6	1.65	14.0	
120	16	35	土製品	土錘	2 区 -2 中段	旧河道	包含層上層	1.75	4.55	1.6	13.0	
121	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層上層	1.8	4.4	1.7	12.6	
122	16	35	土製品	土錘	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層　上部	1.7	4.8	1.8	12.9	
123	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層上層	1.9	4.65	1.85	13.4	
124	16	35	土製品	土錘	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層～礫層	1.8	4.6	1.7	13.8	
125	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層～礫層	1.6	4.3	1.6	9.5	
126	16	35	土製品	土錘	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層～礫層	1.75	4.8	1.75	14.4	
127	16	35	土製品	土錘	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層～礫層	1.9	4.75	1.7	13.6	
128	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層上層	1.7	4.5	1.65	11.5	
129	16	35	土製品	土錘	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層～礫層	1.8	5.0	1.7	16.0	
130	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層　上部	1.9	4.7	1.9	14.3	
131	16	35	土製品	土錘	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層	1.9	5.2	1.9	16.3	
132	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層上層	1.65	4.7	1.7	12.3	
133	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層～礫層	1.8	5.2	1.7	14.8	
134	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層上層	1.8	4.9	1.7	13.5	
135	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層上層	1.7	4.6	1.55	11.0	
136	16	35	土製品	土錘	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層上層	1.75	5.3	1.8	16.3	
137	16	35	土製品	土錘	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層～礫層	2.1	5.6	2.0	23.3	
138	16	35	土製品	土錘	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層	1.7	6.1	1.8	18.0	

139	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 中段北側		包含層下層～礫層	1.5	2.7	1.45	5.5	
140	16	36	土製品	土錘	2 区 -2・3 下段		包含層下層	1.6	3.1	1.6	7.1	
141	16	36	土製品	土錘	2 区 -1 上段		包含層下層	1.65	3.55	1.6	8.6	
142	16	36	土製品	土錘	2 区 -3		下段撹乱部	1.2	3.1	1.1	3.5	
143	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 中段北側		包含層下層～礫層	1.2	3.7	1.2	4.8	
144	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 中段北側		包含層下層～礫層	1.35	3.7	1.28	5.3	
145	16	36	土製品	土錘	2 区 -3 中段		整地層	1.5	3.9	1.4	6.7	
146	16	36	土製品	土錘	2 区 -3 中段		灰色包含層	1.4	4.1	1.4	7.2	
147	16	35	土製品	土錘	2 区 -3 中段		整地層	1.9	4.8	1.8	13.6	
148	16	35	土製品	土錘	2 区 -2・3 中段		包含層下層～礫層	1.7	4.55	1.65	12.3	
149	16	36	土製品	土錘	2 区 -1 上段		黄褐礫直上	1.7	4.0	1.55	8.1	
150	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 中段		包含層上層	1.8	4.5	1.8	12.8	
151	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 中段		包含層下層	1.5	4.4	1.5	9.0	
152	16	36	土製品	土錘	2 区 -1 上段		包含層下層	1.95	4.35	1.8	12.9	
153	16	36	土製品	土錘	2 区中段		南北トレンチ中段	1.8	4.7	1.7	13.8	
154	16	35	土製品	土錘	2 区			1.9	5.35	1.8	19.3	
155	16	36	土製品	土錘	2 区 -2 中段		包含層上層	1.8	4.9	1.9	14.8	
156	16	35	土製品	土錘	2 区 -2 中段北側		包含層下層～礫層	1.9	5.25	1.85	18.6	
157	16	35	土製品	土錘	2 区 -2 中段		包含層上層	1.78	5.0	1.7	14.7	
158	16	35	土製品	土錘	2 区 -2 中段		包含層上層	1.6	5.3	1.8	15.1	
159	17	30	須恵器	甕	2 区 -1・2	旧河道	東西トレンチ	(41.7)	(18.9)	-		外面：体部平行タタキ　内面：体部同心円文（凹凸弱い）
160	17	30	須恵器	甕	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層～礫層	(40.4)	(74.4)	-		外面：体部平行タタキ（上半はナデ消し下半は一部残存）内面：口縁部回転ナデ、体部同心円文を丁寧にナデ消している
161	18	37	須恵器	蓋（杯B蓋）	2 区 -2 中段		包含層下層～礫層	18.4	2.95	-	つまみ径 2.95	外面：天井部回転ヘラケズリ、口縁部重ね焼痕、天井部に墨書あり「石」　内面：仕上げナデ
162	18	37	須恵器	蓋	2 区 -2 中段北側		包含層下層～礫層	(15.85)	(1.75)	-		外面:天井部回転ヘラ切りのちナデ、天井部に墨書あり「道」
163	18	37	須恵器	蓋（稜椀蓋）	拡張区西	旧河道	暗褐色シルト・砂礫	(18.5)	2.5	-		外面：天井部回転ヘラケズリ、つまみ内に墨書あり「大」
164	18	37	須恵器	杯	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層下層　下部	(13.8)	(3.1)	-		外面：体部に墨書あり「石」
165	18	37	須恵器	杯	2 区 -2 中段		包含層下層	(13.25)	(3.0)	-		外面：側面に墨書あり「石」　内面：ひだすきあり
166	18	37	須恵器	杯A	2 区 -2 中段		包含層下層	(12.85)	(4.1)	(8.85)		外面：底部回転ヘラ切り、口縁部重ね焼痕、側面に墨書あり「石」
167	18	37	須恵器	杯A		旧河道		-	(1.4)	(5.6)		外面：底部ヘラ切りのちナデ、底部に墨書あり「石カ」 内面：一方向の仕上げナデ
168	18	38	須恵器	杯A	2 区 -2 中段		包含層下層	(12.45)	3.2	9.95		外面：底部回転ヘラ切りのちナデ、底部と側面に墨書あり「石」
169	18	37	須恵器	杯A	2 区 -1・2	旧河道	東西トレンチ	-	(1.1)	-		外面：底部ヘラ切りのちナデ、底部に墨書あり「石カ」 内面：一方向の仕上げナデ
170	18	37	須恵器	杯A	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層　上部	-	(1.0)	(7.0)		外面：底部ヘラ切りのちナデ、底部に墨書あり「石カ」 内面：底部ナデ、タタキ痕残る？
171	18	38	須恵器	杯A	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層～礫層上層	-	(1.0)	(6.8)		外面：底部ヘラ切りのちナデ、板目状圧痕、底部に墨書あり「石道」　内面：一方向の仕上げナデ、内面にも墨付着？

172	18	38	須恵器	杯A	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層　上部	-	(2.0)	(7.9)		外面：底部ヘラ切りのちナデ、底部に墨書あり「？」 内面：仕上げナデ
173	18	38	須恵器	杯A	2 区 -2 中段		包含層下層	-	(1.8)	(9.25)		外面：底部回転ヘラ切り、底部と側面に墨書あり「石道カ」
174	18	38	須恵器	杯A	2 区 -2・3 下段		包含層（下層）	(12.9)	2.9	(9.1)		外面：底部回転ヘラ切り、底部に墨書あり「石道カ」 内面：ひだすきあり
175	18	38	須恵器	杯A	2 区 -1 ～ 2 中段		包含層下部	-	(1.2)	(7.4)		外面：底部ヘラ切りのちナデ、底部に墨書あり「東」 内面：一方向の仕上げナデ
176	18	38	須恵器	杯A	2 区 -2	旧河道	包含層下層　下部	(13.4)	3.6	-		外面：底部ヘラ切りのちナデ、底部に墨書あり「佐×」 内面：不定方向の仕上げナデ
177	18	38	須恵器	杯A	2 区 -3		下段撹乱部	-	(1.5)	(9.8)		外面：底部回転ヘラ切り、側面に墨書あり「？」
178	19	38	須恵器	杯A	2 区 -2 中段		包含層下層	-	(1.45)	(10.9)		外面：底部回転ヘラ切り、底部に墨書あり「十」？
179	19	39	須恵器	杯A	2 区 -2 中段		包含層下層	(12.35)	3.25	(9.15)		外面：底部回転ヘラ切りのちナデ、底部に墨書あり「？」 内面：若干ひだすきあり
180	19	39	須恵器	杯A	2 区 -1 ～ 2 上段	旧河道	包含層下層　上部	-	(1.2)	(9.4)		外面：底部ヘラ切りのちナデ、底部に墨書あり「？」 内面：内面も墨書？
181	19	39	須恵器	杯A	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層下層　下部	-	(1.3)	(7.3)		外面：底部ヘラ切りのちナデ、底部に墨書あり「？」 内面：一方向の仕上げナデ
182	19	39	須恵器	杯A		旧河道		(13.6)	4.0	(10.0)		外面：底部ヘラ切りのちナデ、口縁部重ね焼痕、底部に墨書あり「？」　内面：一方向の仕上げナデ
183	19	39	須恵器	杯A	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層　上部	-	(1.3)	(9.1)		外面：底部ヘラ切りのちナデ、底部に墨書あり「？」 内面：一方向の仕上げナデ
184	19	39	須恵器	杯B	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層～礫層	(17.5)	5.5	(11.0)		外面：高台貼り付け、底部回転ヘラ切り　側面と底部に墨書あり「石道カ」　内面：多方向に仕上げナデ
185	19	39	須恵器	杯B	2 区 -2・3 下段		包含層下層	(12.6)	4.1	(10.2)		外面：高台貼り付け、底部回転ヘラ切り、底部に墨書あり「？」　内面：多方向の仕上げナデ
186	19	40	須恵器	杯B	2 区 -2 上段	旧河道肩部	包含層下層　下部	(14.3)	3.8	(11.3)		外面：高台貼り付け、底部ヘラ切りのちナデ、底部に墨書あり「？」煤状付着物　内面：一方向の仕上げナデ　見込み部：摩耗（硯？）
187	19	40	須恵器	杯B	2 区 -2 中段北側		包含層下層～礫層	-	(2.1)	(9.9)		外面：高台貼り付け、底部回転ヘラ切り、底部に墨書あり「？」　内面：板状工具による仕上げナデ
188	19	40	須恵器	杯	2 区 -2 中段		包含層下層	-	(2.4)	-		外面：側面に墨書あり「？」
189	19	39	須恵器	杯	2 区 -2 中段		包含層下層	-	(3.2)	-		外面：側面に墨書あり「？」
190	19	40	須恵器	杯	2 区 -2 中段北側		包含層下層～礫層	-	(3.2)	-		外面：重ね焼痕、側面に墨書あり「？」
191	19	40	灰釉陶器	碗	2 区 -2 中段北側		包含層下層～礫層	-	(2.1)	7.5		外面：施釉、高台貼り付け、体部回転ヘラ切りのちナデ、底部に墨書あり「屋」または「戸主」？　内面：施釉
192	19	40	須恵器	杯（底部）	2 区 -2 中段		包含層下層	-	(0.85)	-		外面：底部回転ヘラ切り、底部に墨書あり「？」
193	19	40	須恵器	杯（底部）	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層～礫層	-	0.5	-		外面：底部回転ヘラ切り、底部に墨書あり「？」
194	19	40	須恵器	杯（底部）	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層　上部	-	(0.5)	-		外面：ヘラ切りのちナデ、底部に墨書あり「？」
195	19	40	須恵器	杯（底部）	2 区 -2 中段北側		包含層下層～礫層	-	(0.6)	-		外面：底部回転ヘラ切り、底部に墨書あり「？」
196	第4図	52	縄紋土器	-	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層下層	-	(5.6)	-		外面：ナデ　内面：ナデ

第２－２表　掲載木製品一覧

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	出土地区	出土遺構	層位	法量（cm）			残存	木取り	分析番号	樹種	備考
								長さ	幅	厚み					
W01	20	44	木製品	木簡	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層下層下部	(9.1)	(2.9)	0.6	-	追柾目	12	ヒノキ	
W02	20	44	木製品	馬形？	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層下層上部	(11.6)	(2.9)	0.8	-	板目	3	ヒノキ	
W03	20	44	木製品	斎串？	2 区 -2 中段	旧河道	下層下部	3.1	1.95	0.6	片側折れ	板目	31	モミ属	
W04	20	44	木製品	斎串？	2 区 -1 ～ 2 中段	旧河道	包含層下層下部	4.4	1.55	0.35	両端折れ	板目	15	モミ属	
W05	20	44	木製品	斎串？	2 区 -1 上段	旧河道	包含層下層	(6.7)	2.3	1.0	-	柾目	17	ヒノキ	
W06	20	44	木製品	斎串？	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層下層上部	(39.7)	2.45	(0.7)（0.8）	先端わずかに欠け	柾目	1	ヒノキ	
W07	20	44	木製品	斎串？	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層下層上部	(26.95)	1.8	0.75	-	板目	2	ヒノキ	
W08	20	44	木製品	曲物底材	2 区 -2 中段	旧河道	下層下部	(19.6)	(4.8)	0.8	底 1/6	追柾目	30	ヒノキ	
W09	20	44	木製品	曲物底材	2 区 -3 中段	旧河道	腐植土	(18.4)	(6.6)	0.9	底 1/4	柾目	37	ヒノキ	桜？ 樹皮の側板留め遺存
W10	21	45	木製品	へら状木製品	拡張区西	旧河道	暗褐シルト砂礫	17.1	1.65	0.75	完形	柾目	41	ヒノキ	
W11	21	45	木製品	柄？	拡張区東	旧河道（西）	暗褐色シルト	12.9	1.9	1.8	両端折れ	芯持丸木	46	ウツギ属	
W12	21	45	木製品	加工材（板状）	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層下部	9.8	3.2	0.9	-	柾目	28	モミ属	
W13	21	45	木製品	加工材（板状）	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層下部	15.7	2.35	0.8	上部片側わずかに欠け	みかん割り	35	カヤ	
W14	21	45	木製品	加工材（板状）	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層下層下部	31.4	4.0	1.0	ほぼ完存	板目	14	ヒノキ	
W15	21	45	木製品	加工材（板状）	拡張区東	旧河道（西）	暗褐色シルト	25.4	3.6	0.9	上部折れ	追柾目	47	ヒノキ	
W16	21	45	木製品	加工材（板状）	2 区 -2 中段	旧河道	包含層中段	19.45	3.7	1.55	完存	柾目	29	スギ	
W17	21	45	木製品	加工材 （角棒状）	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層下部	(19.1)	1.3	1.1	上部欠損	角材	25	スギ	
W18	22	46	木製品	付け木	2 区 -1 上段	旧河道	包含層下層	6.45	1.4	0.6	片側折れ	柾目	20	ヒノキ	
W19	22	46	木製品	付け木	2 区 -1 上段	旧河道	包含層下層	(8.4)	1.4	0.7	上部欠損	板目	18	ヒノキ	
W20	22	46	木製品	付け木	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層下層上部	(11.3)	1.7	0.8	-	みかん割り	5	スギ	
W21	22	46	木製品	付け木	2 区 -1 上段	旧河道	包含層下層	(8.4)	2.5	0.6	-	柾目	19	ヒノキ	
W22	22	46	木製品	付け木	拡張区東	旧河道（西）	暗褐色シルト	12.15	2.2	0.9	上部折れ	柾目	45	ヒノキ	
W23	22	46	木製品	付け木	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層下層上部	9.9	1.4	0.9	完形	みかん割り	6	スギ	
W24	22	46	木製品	付け木	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層下層上部	17.35	1.3	1.1	完形	みかん割り	4	ヒノキ	
W25	22	46	木製品	加工材	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層上部	13.1	(5.6)	1.7	-	柾目	22	モミ属	
W26	22	46	木製品	加工材 （容器の一部か？）	2 区 -1・2	旧河道	排土中採集	(9.0)	9.5	2.9	-	板目	16	ヒノキ	
W27	22	46	木製品	加工材	2 区 -2 上段	旧河道上層？	包含層下層上部	9.4	5.95	5.6	ほぼ完存	芯去削出	23	カヤ	未成品か？
W28	22	46	木製品	加工材	2 区 -2 上段	旧河道	包含層下層下部	(20.8)	(3.7)	(2.8)	上部欠損	板目	24	ヒノキ	
W29	23	47	木製品	加工材（板材）	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層下層下部	(26.3)	7.5	(1.4)	下部欠損	追柾目	13	モミ属	
W30	23	47	木製品	部材（板材）	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層下層下部	32.4	12.0	4.4	完形？	柾目	8	モミ属	
W31-1	23	47	木製品	不明 （未成品？）	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層下部	19.9	18.85	3.95	ほぼ完形	柾目	33	ツバキ属	232 と接合 未成品か？

W31-2	23	47	木製品	不明 （未成品？）	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層下部	14.5 接合後 34.3	17.7 接合後 18.85	4.0 接合後 4.0	ほぼ完形	柾目	34	ツバキ属	231 と接合 未成品か？
W32	24	48	木製品	矢板	拡張区東	旧河道（西）	暗褐色シルト	(23.5)	6.9	1.9	上部折れ	板目	44	モミ属	
W33	24	48	木製品	杭	拡張区東	旧河道（西）	暗褐色シルト	(30.6)	5.9	3.1　3.7	両端折れ	角材	43	モミ属	
W34	24	48	木製品	杭	拡張区東	旧河道（西）	暗褐色シルト	(30.5)	(6.5)	(3.2)	上部折れ	みかん割り	42	モミ属	
W35	24	48	木製品	杭	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層下層下部	(38.0)	4.2	(3.3)　3.8	上部欠損	芯持丸木	7	マツ属複維管束亜属	
W36	24	48	木製品	杭	2 区 1・2	旧河道	包含層下層下部	30.9	5.25	4.1	上部欠損	角材	10	モミ属	
W37	24	48	木製品	伐採木 （加工面）	2 区	旧河道	河道下底	55.0	35.0	39.0	切断面完存	芯持丸木	39	モミ属	
W38	25	47	木製品	加工材（板）	2 区 -1・2 上段	旧河道	包含層下層下部	41.0	2.8	0.8	-	板目	9	ヒノキ	
W39	25	47	木製品	加工材（板）	2 区 -2 上段	旧河道	包含層（下層） ～礫層	(47.4)	6.0	1.2	下部一部欠損	板目	21	ヒノキ	
W40	25	47	木製品	加工材（板）	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層下部	(37.2)	12.7	4.1	両端折れ	板目	36	モミ属	
W41	25	47	木製品	加工材（板）	2 区	旧河道	包含層下層下部	(46.5)	14.0	4.2	下部欠損	板目	38	モミ属	
W42	25	49	木製品	加工材 （建築部材？）	2 区 1・2	旧河道	包含層下層下部	37.7		8.0	完形	柾目	11	モミ属	建築部材？
W43	26	49	木製品	加工材	2 区	旧河道	包含層下層下部	37.7	11.0	6.2	完形？	みかん割り	40	モミ属	
W44	26	49	木製品	部材？	拡張区東	旧河道（西）	暗褐色シルト	110.7	34.2	6.2		板目	48	モミ属	孔あり

第２－３表　掲載金属器一覧

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	出土地区	出土遺構	層位	法量（cm・g）				備考
								長さ	幅	厚み	重量	
M1	27	52	鉄製品	不明	2区 -2 上段	旧河道	包含層下層上部	7.25	1.3	0.7	18.5	
M2	27	52	鉄製品	鑿状鉄製品	2区 -2 上段	旧河道	包含層下層上面	17.0	2.0	1.3	120.0	
M3	第5図	52	銅製品	銅銭	2区 -1	南北サブトレ	現耕土直下（旧耕土）	2.3	2.3	0.1	2.3	孔 0.6 × 0.6cm

第２－４表　掲載石器一覧

報告番号	図版番号	写真図版番号	種別	器種	出土地区	出土遺構	層位	法量（cm・g）				石　材
								長さ	幅	厚み	重量	
S01	27	51	磨製石器	砥石	2 区 -2	旧河道	包含層下層～礫層	19.6	11.5	7.8	2180	砂岩
S02	27	51	磨製石器	砥石	2 区 -2・3 中段		包含層下層	15.2	8.2	3.0	229.7	細粒の砂岩
S03	27	51	磨製石器	砥石	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層～礫層	17.5	16.3	7.0	2720	細粒の砂岩
S04	28	50	打製石器	有茎尖頭器	2 区 -3		灰色シルト	4.9	2.6	0.7	7.1	サヌカイト 二上山（肉眼観察）
S05	28	50	打製石器	有茎尖頭器	2 区 -2 中段	旧河道	包含層下層下部	5.6	1.75	0.9	8.8	サヌカイト 二上山（肉眼観察）
S06	28	50	打製石器	削器	2 区 -2 上段	旧河道	包含層（下層）～礫層上層	4.4	1.9	0.7	5.8	サヌカイト
S07	28	50	打製石器	楔形石器	2 区 -5		遺構検出面	3.7	2.8	0.9	10.0	サヌカイト 讃岐（肉眼観察）
S08	28	50	打製石器	横長剥片	2 区 -3 下段		包含層	4.3	2.8	0.9	7.1	サヌカイト 二上山（肉眼観察）
S09	28	50	打製石器	楔形石器 （スポール）	2 区 -3		上段包含層	3.4	2.2	0.9	4.4	サヌカイト
S10	28	51	磨製石器	すり石	2 区 -3		上段包含層	8.6	8.3	4.0	415.9	細粒の砂岩
S11	28	51	磨製石器	すり石	2 区 -3 中段		整地層	10.0	8.3	4.8	644.8	細粒の砂岩

報告書抄録　(Outline of the Report)

ふりがな	いしみちさいだに・どうのあといせき	About the Report
書　名	石道才谷・堂ノ後遺跡発掘調査報告書	Excavation report of the Ishimichi-Saidani-Dounoato archaeological site
副書名	新名神高速道路 箕面～神戸間(兵庫県域)建設に伴う発掘調査報告書	
シリーズ名	兵庫県文化財調査報告	Report of the Archaeological Sites of Hyogo prefecture vol. 496
シリーズ番号	第496冊	
編著者名	久保弘幸	The Author/Editor : Hiroyuki Kubo
編集機関	公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター 埋蔵文化財調査部	Hyogo Construction Technology Center for Regional Development Archeological Research Department Address : 1-1-1 Onaka, Harima-cho, Hyogo pref. Japan
所 在 地	兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1 (兵庫県立考古博物館内)　　ＴＥＬ　079-437-5561	
発行年月日	平成30(2018)年1月25日	Publication : January 25, 2018

所収遺跡名	所　在　地	コード		北　緯	東　経
石道才谷・堂ノ後遺跡	川西市石道才谷・堂ノ後	市町村	遺跡番号	northern latitude	east longitude
		28217	180042	34° 53′ 14″	135° 23′ 19″

遺跡調査番号	調査の種別	調 査 期 間	調 査 面 積	調 査 原 因
2013120	本発掘調査	2013/12/20～ 2014/3/10	862㎡	記録保存調査
遺跡の種別	集落遺跡	主な遺構		掘立柱建物跡・土坑・旧河道
遺跡の時代	縄文時代・奈良時代・鎌倉時代	主な遺物		縄文土器・石器・須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・木製祭祀具・木簡

要　　約

奈良時代の掘立柱建物跡1棟が検出された。 この建物跡に沿って旧河道があり、 河道内から多数の奈良時代の遺物が出土した。出土遺物には、須恵器・土師器などの土器類とともに、齋串などの木製祭祀具、木簡などが見られるが、とりわけ多数の墨書土器が注目される。文献による記録では、本遺跡の近隣に、 奈良時代、 畝野牧と呼ばれる牧が存在したことが知られており、 今回の調査成果から、本遺跡は畝野牧と何らかの関係があった可能性が高いと思われる。建物跡などは平安時代初頭には廃絶しており、鎌倉時代に至って、遺跡周辺は広く耕地化された。

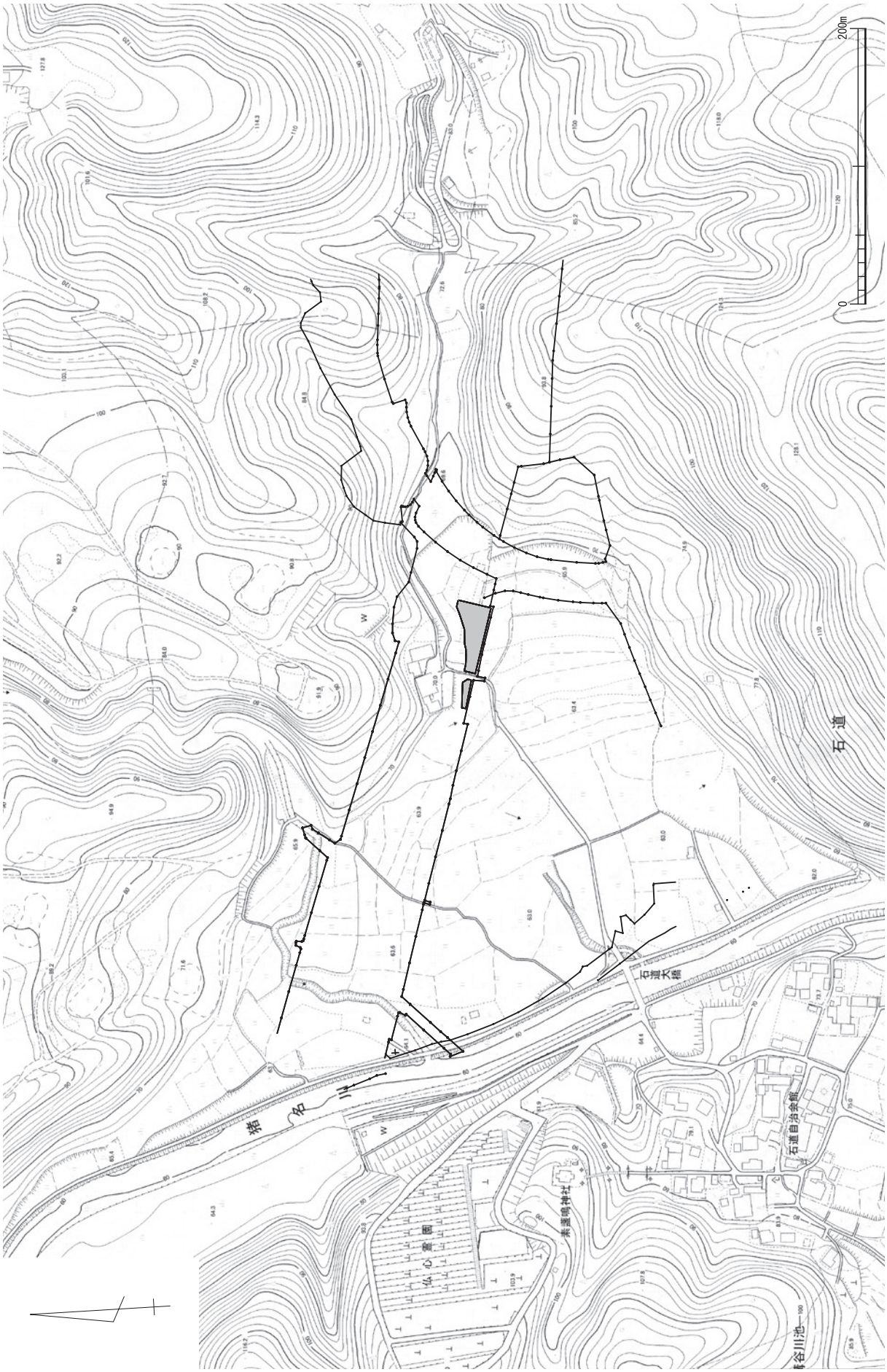
このほか原位置を遊離した状態の、縄文時代草創期の有茎尖頭器が出土している。

Abstract

By this excavation, a Posthole-type building that belongs Nara era was detected. And a buried river channel along the building remains. Relic of a large number of the Nara period has been excavated from the river channel. Main relics are Sue ware and Haji ware, a Mokkan (narrow strip of wood on which an official message was written in ink) and wooden relics for religious service. Sue wares contain 35 pieces that character was written in ink.
According to the ancient document of the Heian Period, there was a state-owned ranch called "Uneno Maki(Maki means a ranch)" which was set up by the court. The Ishimichi-Saidani-Dounoato site can guess that it was ruins of Uneno Maki.

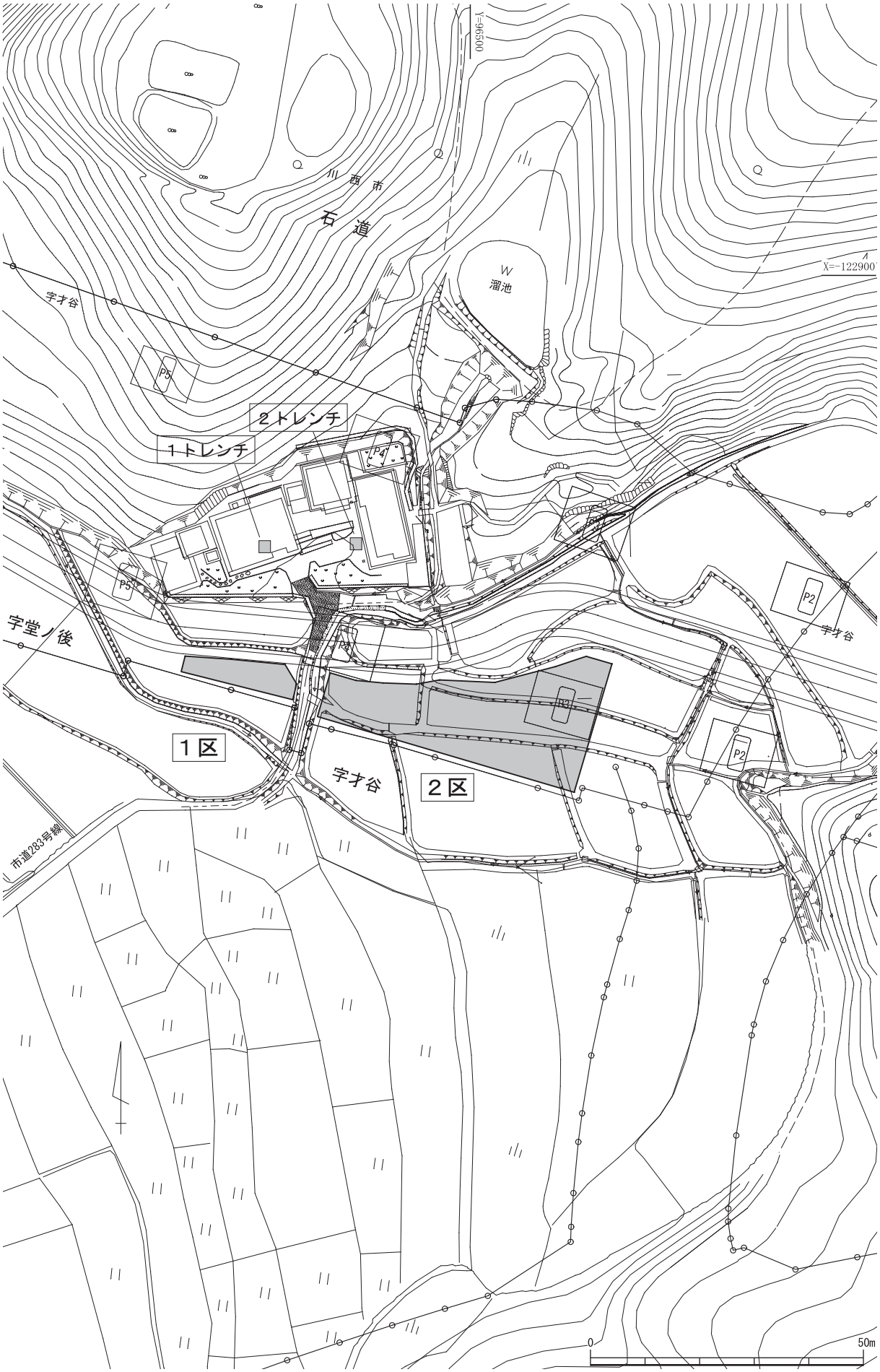
Address of the site	Ishimichi-Saidani-Dounoato, Kawanishi, Hyogo pref. Japan	Date of the Excavation	2013/12/20～2014/3/10
Category	Settlement, State-owned ranch（？）	Archaeological Features	Posthole-type building, Pits, Buried river channel
Period	Nara period (Kamakura period, Jomon period)	Main Relics	Stone tools, Sue ware, Haji ware, ceramic ware, Salt-making pottery, Wooden relics for religious service, Mokkan (narrow strip of wood on which an official message was written) Jomon pottery, Stone tools

図　　版

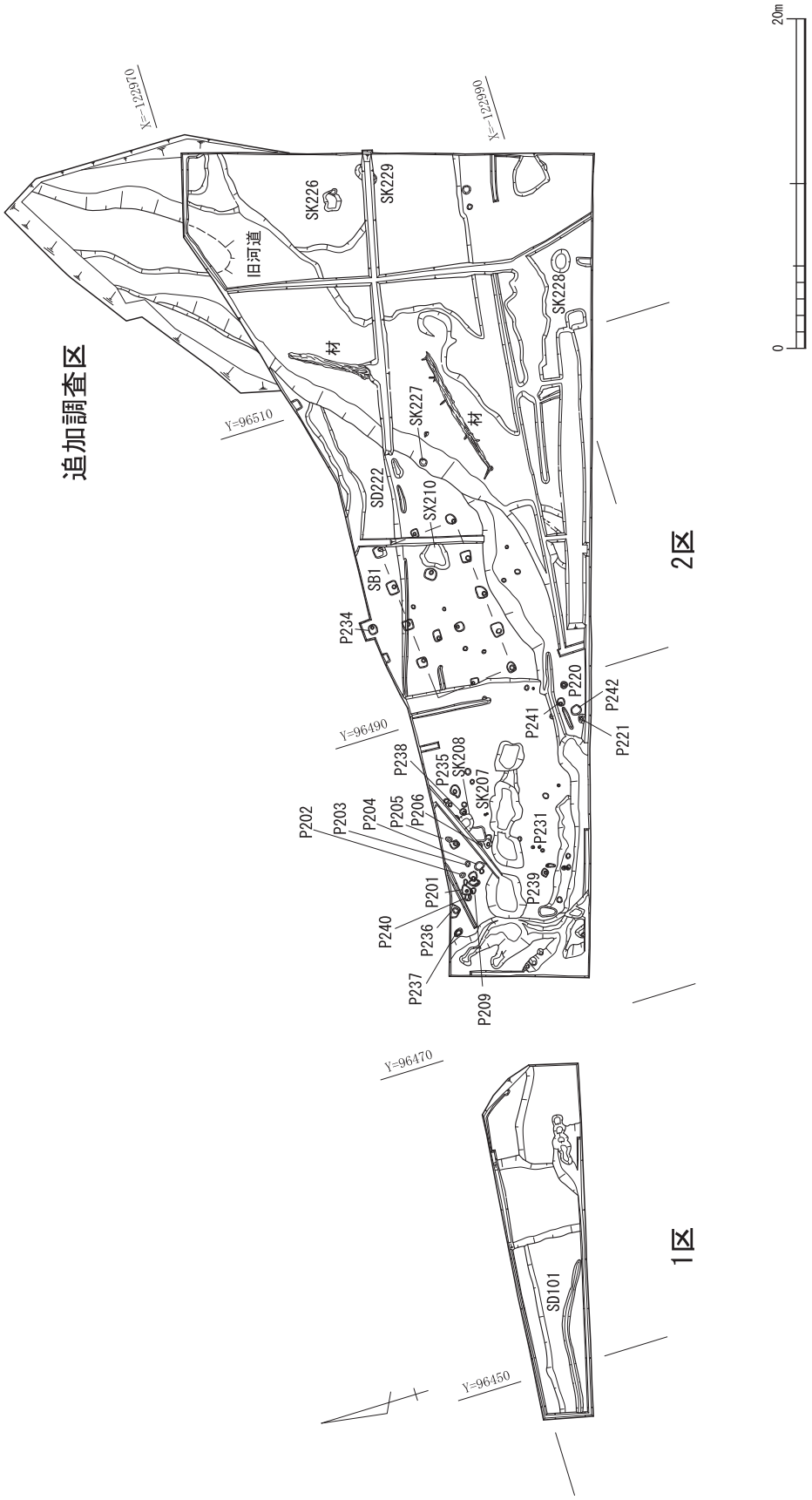


路線範囲・調査区位置図

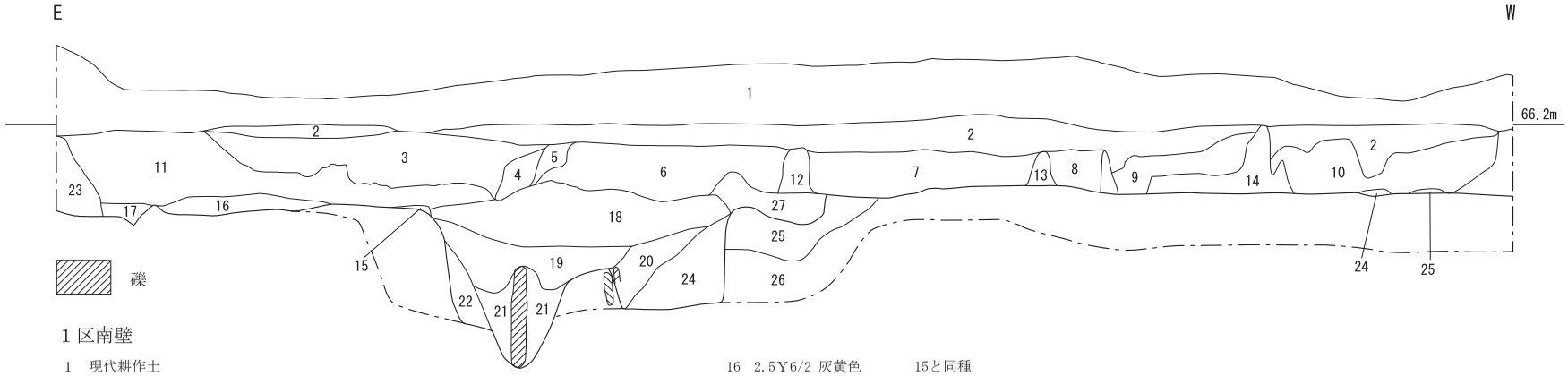
図版２



本発掘調査区位置図

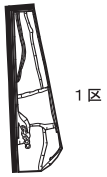

追加調査区
X=-122970
X=-122990
Y=96510
Y=96490
Y=96470
Y=96450
旧河道
SK226
SK229
SK228
SK227
SD222
SX210
SB1
P234
P220
P242
P221
P241
P238
P235
SK208
SK207
P231
P239
P202
P203
P204
P205
P206
P201
P240
P236
P237
P209
SD101
2区
1区
0
20m

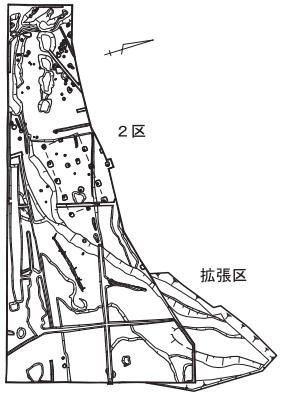
調査区平面図

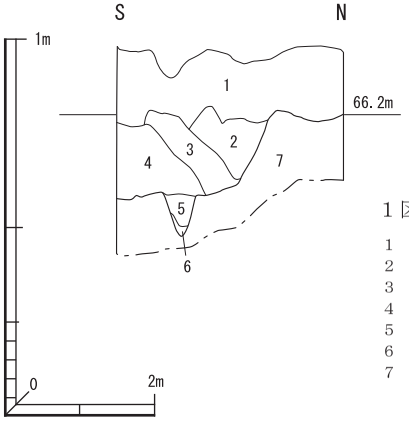


1区南壁

1　現代耕作土
2　2.5Y5/3 黄褐色　シルト質極細砂　上面に酸化鉄が沈着
3　2.5Y5/2 暗灰褐色　粗砂混じりシルト質極細砂（盛土）
4　2.5Y7/6 明黄褐色　粗砂混じりシルト質極細砂（盛土）地山の土
5　2.5Y5/2 暗灰褐色　粗砂混じりシルト質極細砂（盛土）３と同一か
6　2.5Y6/2 灰黄色　粗砂混じり極細砂～細砂　一部マンガン・酸化鉄がかたまる（盛土）
7　2.5Y5/3 黄褐色　細礫混じり極細砂～細砂（盛土？）
8　2.5Y5/3 黄褐色　７と同種の盛土（盛土？）
9　2.5Y5/3 黄褐色　７と同種の盛土
10　2.5Y5/2 暗灰黄色　極細礫混じり細砂（細礫～極細礫を多く含む）径２mm～３mm程度
11　2.5Y5/2 暗灰黄色　極細礫混じり細砂～極細砂（盛土）径２mm～３mm程度
12　2.5Y6/2 灰黄色　シルト質極細砂（畦畔か？）
13　2.5Y6/2 灰黄色　シルト質極細砂（畦畔か？）
14　2.5Y6/2 灰黄色　シルト質極細砂（畦畔か？）
15　2.5Y6/2 灰黄色　シルト質極細砂　旧耕作土の残りか？（中世？）
16　2.5Y6/2 灰黄色　15と同種
17　2.5Y6/2 灰黄色　シルト質極細砂　地山がブロック状に混じる　旧耕作土か
18　2.5Y5/2 暗灰黄色　シルト混じり細砂～極細砂（盛土）土器を含む
19　2.5Y5/1 黄灰色　シルト質細砂～極細砂　土器を上面に多く含む
20　2.5Y6/1 黄灰色　シルト質細砂～極細砂　20の下層の堆積
21　2.5Y6/1 黄灰色　シルト質細砂～極細砂　20の下層の堆積　巨礫含む　土器あり
22　2.5Y6/1 黄灰色　シルト質粗砂混じり極細砂　谷部の堆積か？
23　2.5Y5/3 黄褐色　粗砂混じり細砂～中砂　畦畔か
24　2.5Y6/2 灰黄色　シルト質粗砂混じり極細砂～細砂
25　2.5Y6/4 にぶい黄色　細砂混じり粗砂層　地山
26　2.5Y4/3 オリーブ褐色　シルト質極細砂　地山
27　2.5Y5/2 暗灰黄色　シルト質極細砂　旧耕作土か



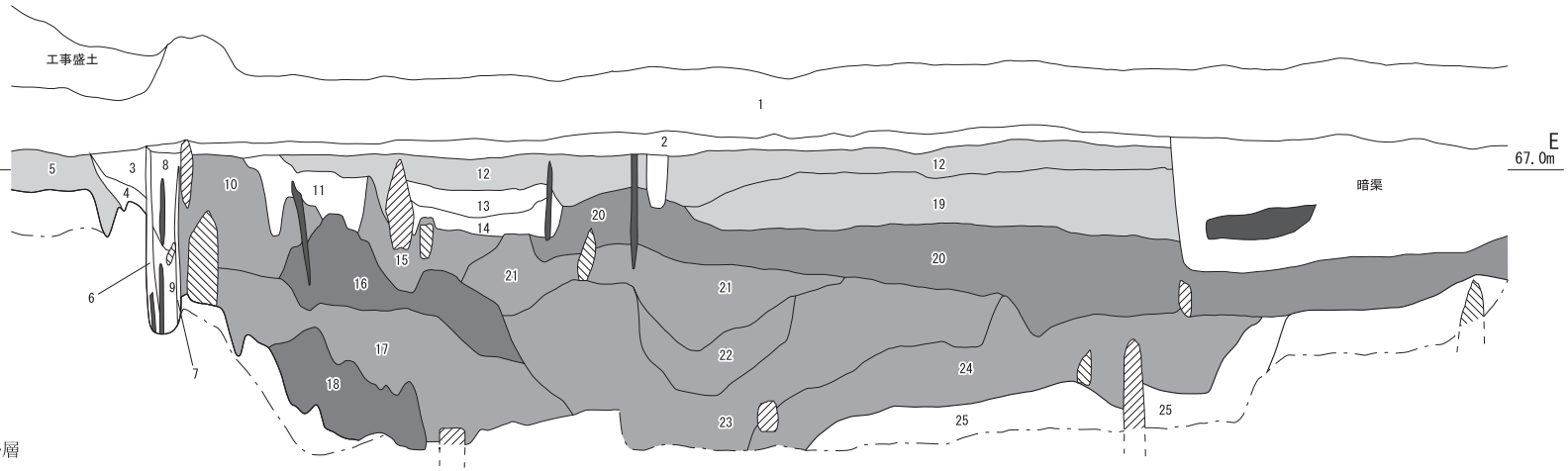


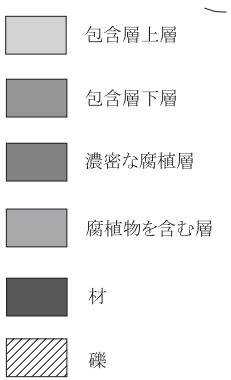


1区西壁

1　現代の耕土 2.5Y3/3 暗オリーブ褐色　シルト質極細砂
2　2.5Y5/2 暗灰黄色　砂質シルト　指頭大の地山ブロックを含む
3　2.5Y5/2 暗灰黄色　シルト質砂礫　礫は径１cm以下が主体
4　5Y5/1　灰色　シルト質極細砂　指頭題の地山ブロックを含む＝畦畔の可能性
5　2.5Y4/2 暗灰黄色　砂質シルト　} SD-101埋土
6　2.5Y5/2 暗灰黄色　砂混じりシルト～粘土　} SD-101埋土
7　2.5Y5/6 黄褐色　砂質シルト（地山）　亀甲状のクラックが発達する

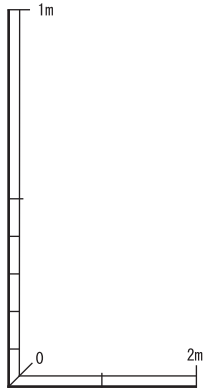
1区南壁・西壁土層断面図

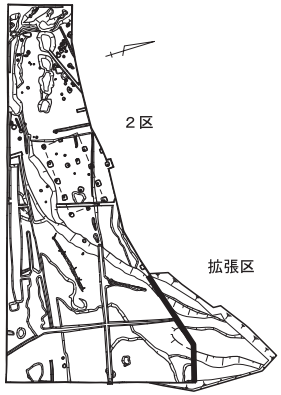




２区北壁

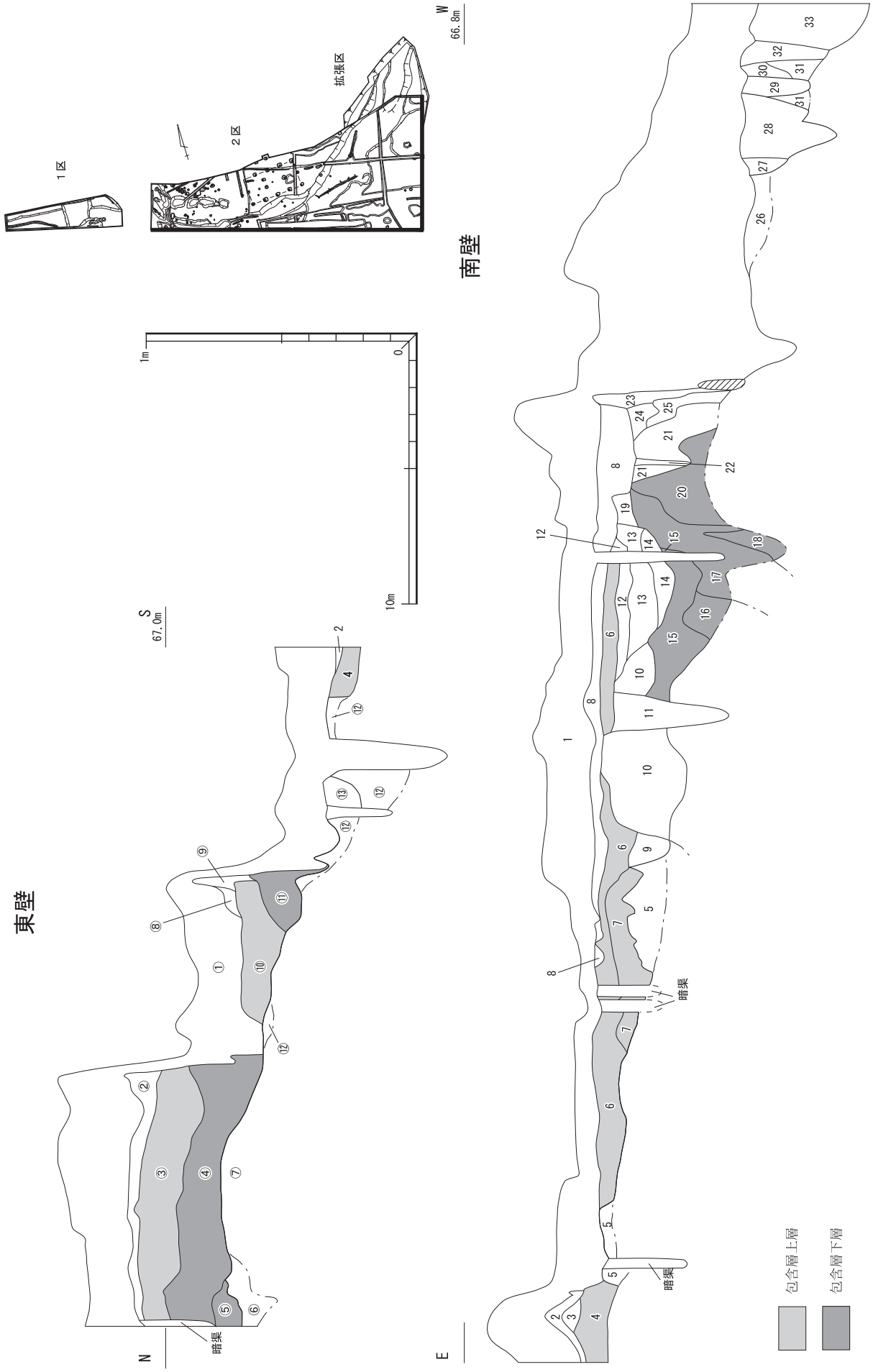
1	2.5Y4/1	黄灰色	シルト質極細砂（現代の耕土）
2	2.5Y6/1	黄灰色	シルト質極細砂　酸化鉄が集積（水田床土）
3	10YR5/1	褐灰色	シルト質極細砂　極粗砂～細礫を含む
4	10YR4/1	褐灰色	細砂～粗砂
5	10YR6/1	褐灰色	シルト質極細砂　一部に酸化鉄・マンガンが集積　中世の遺物を含む古土壌層（包含層上層）
6	2.5Y5/1	黄灰色	シルト質極細砂～細砂　杭または根の痕跡か
7	2.5Y5/1	黄灰色	シルト質極細砂～細砂　杭または根の痕跡か
8	2.5Y6/1	黄灰色	極細砂～粗砂　細礫を含む
9	2.5Y4/1	黄灰色	シルト質極細砂～細砂
10	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質極細砂　粗砂～径５cm以下の礫を含む
11	2.5Y5/1	黄灰色	シルト質極細砂～細砂　粗砂～径５cm以下の礫をわずかに含む
12	2.5Y6/2	灰黄色	シルト質極細砂　中世の遺物を含む古土壌層　５層と同一層か（包含層上層）
13	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質極細砂　粗砂～径１cm以下の礫を少量含む　酸化鉄が集積する
14	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト質極細砂～細砂　径４cm以下の礫を含む
15	2.5Y5/1	黄灰色	シルト質極細砂　径２cm以下の礫を含む
16	2.5Y4/1	黄灰色	シルト質極細砂～細砂　木質・腐植質をきわめて多く含む
17	10YR5/1～5Y5/1	褐灰色～灰色	シルト質砂礫
18	2.5Y3/2	黒褐色	シルト混り腐植層　腐植質を主とする堆積　土器・木製品を多く含む
19	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質極細砂～細砂　極粗砂粒を含む　12層に近似する（包含層上層）
20	2.5Y4/1	褐灰色	シルト質極細砂　粗砂を含む　腐植質を多く含む
21	10YR4/1	褐灰色	シルト質極細砂　腐植質を含む　径３cm以下の礫を含む
22	2.5Y3/1	黒褐色	砂質シルト　腐植質を多く含む　細礫を散漫に含む
23	7.5Y6/1	灰色	砂礫　礫は径３cm以下を主体とするが、下部では人頭大の礫をまじえる マトリックスは淘汰の悪い砂質シルト～砂　一部にレンズ状の粗砂を挟む
24	2.5Y4/1	黄灰色	シルト質砂礫　礫は拳大以下を主体とする マトリックスは淘汰の悪いシルト質砂　一部に腐植質を挟む
25	7.5Y5/1	灰色	シルト質砂礫　礫は径１cm以下を主体とする　一部に腐植土を挟む





2区土層断面図（1）

図版５



2区土層断面図(2)

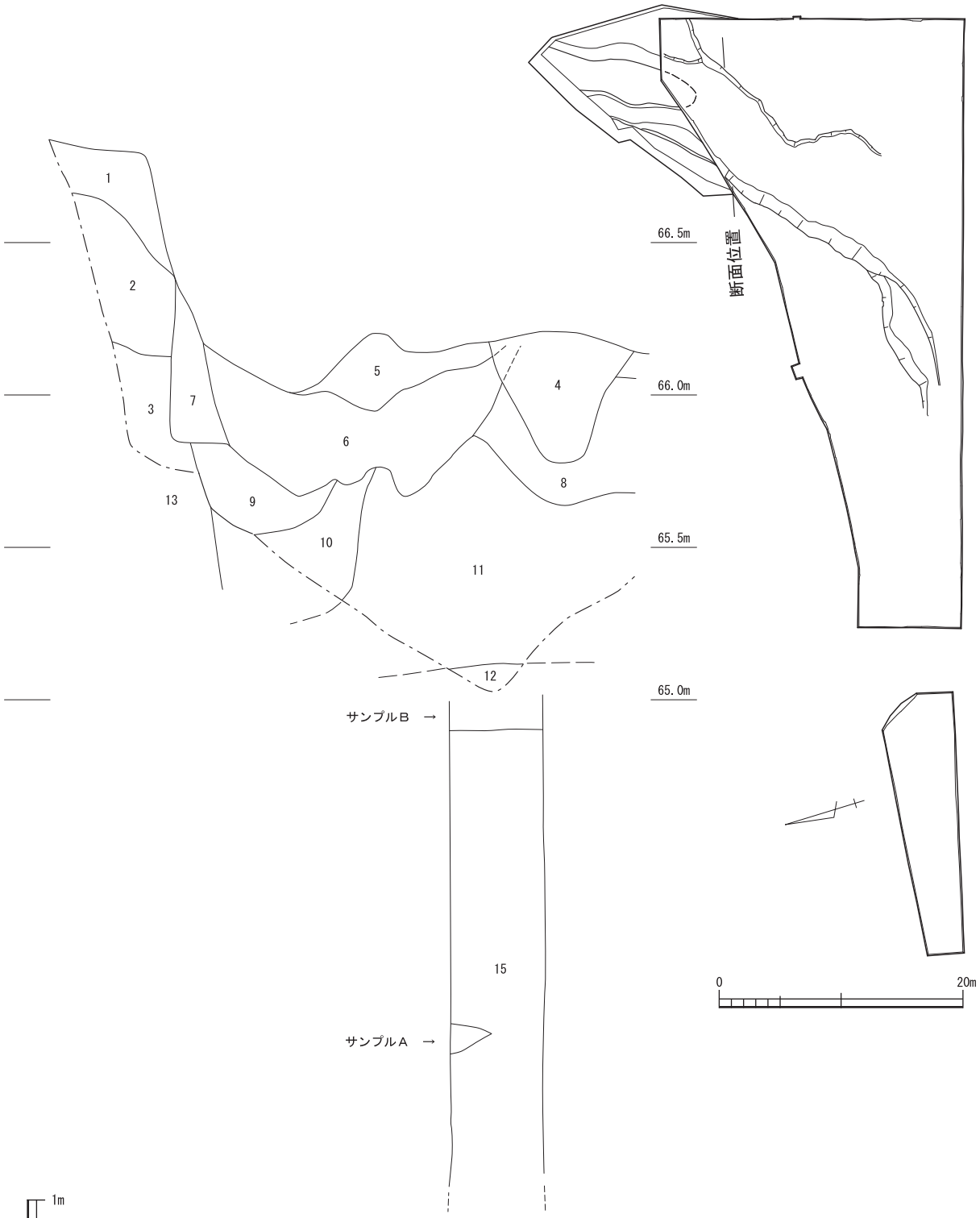
2区東壁・南壁土層名

2区東壁

①	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト質極細砂（現代の耕土）
②	2.5Y6/1	黄灰色	シルト質極細砂　酸化鉄が集積（水田床土）
③	2.5Y5/3	黄褐色	シルト質極細砂～細砂（上段包含層上層）
④	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト質極細砂（上段包含層下層）
⑤	10YR4/1	褐灰色	腐植質シルト（包含層下層下部）
⑥	5Y5/1	灰色	砂質シルト　還元色を呈する
⑦	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質砂礫　礫は径５cm以下主体 マトリックスは淘汰の悪いシルト質砂
⑧	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト質極細砂
⑨	10YR5/3	にぶい黄褐色	極細砂　畦畔盛土
⑩	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質極細砂（中段包含層上層）
⑪	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質極細砂（中段包含層下層）
⑫	5Y5/2	灰オリーブ色	砂質シルト　遺構検出面をなす地山
⑬	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質極細砂（現代水田の床土）

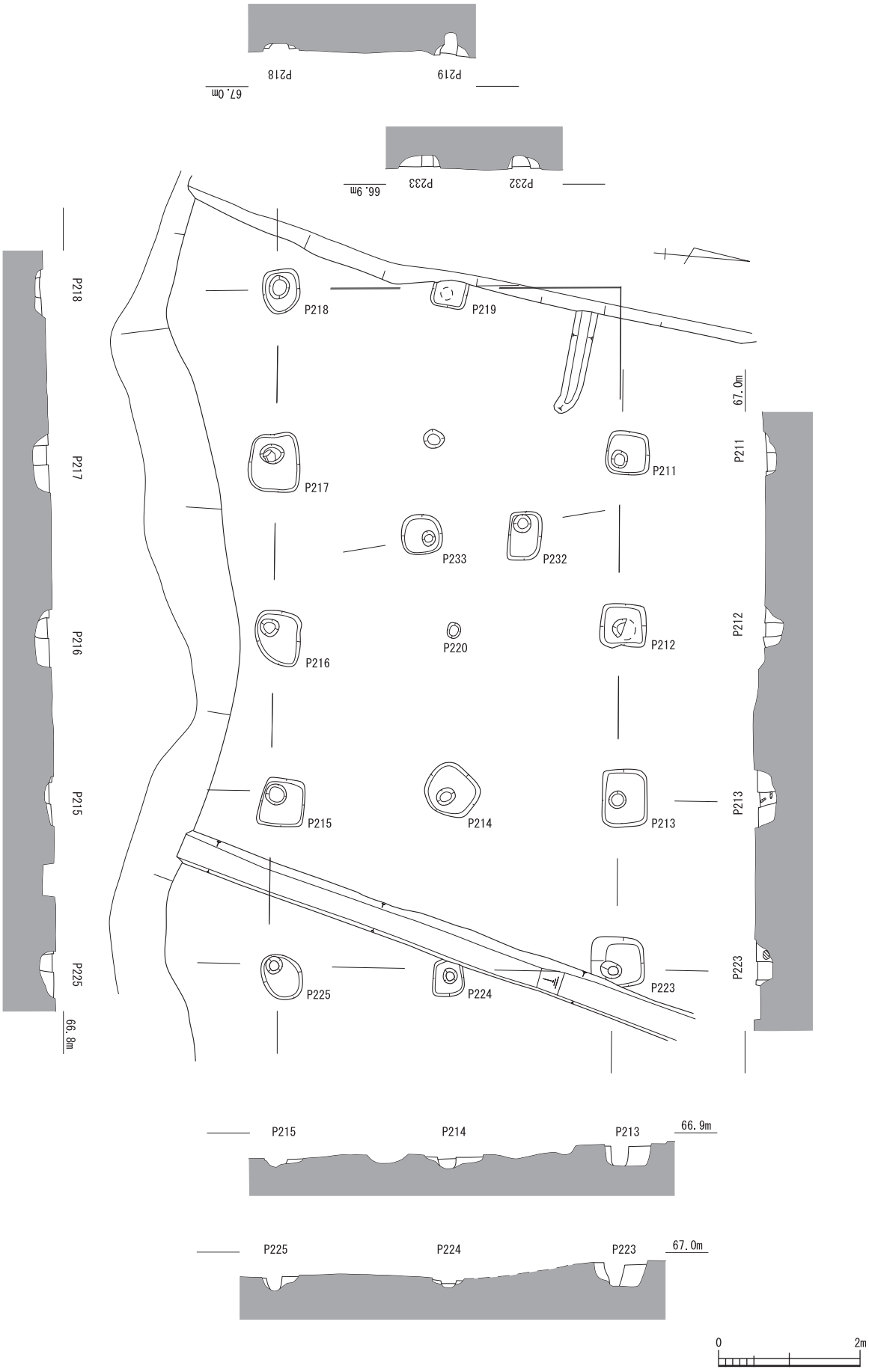
2区南壁

1	2.5Y4/2	暗灰黄色	シルト質極細砂（現代の耕土）
2	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質極細砂（現代水田の床土）
3	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質極細砂　径５mm以下の礫を含む　畦畔盛土
4	2.5Y4/2	暗灰黄色	砂質シルト　中世の古土壌層（包含層上層）
5	2.5Y6/2	灰黄色	砂混りシルト　検出面をなす地山
6	2.5Y6/2	灰黄色	シルト質極細砂　中世の古土壌と推定される（包含層上層）
7	2.5Y6/3	にぶい黄色	シルト質砂礫　礫は径２cm以下主体　マトリックスは淘汰の悪いシルト～砂 わずかながら中世の遺物を含む（包含層上層の下部）
8	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質極細砂　淡く酸化鉄が集積する（現代の水田床土）
9	10YR5/2	灰黄褐色	砂混りシルト　径２cm以下の礫を含む　指頭大の地山ブロックを含む
10	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質砂礫　礫は径２cm以下主体　マトリックスは淘汰の悪いシルト質砂　指頭大の地山ブロックを含む
11	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質砂礫　礫は径３cm以下を主体とし、径10cmまで含む　マトリックスは淘汰の悪いシルト質砂
12	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質極細砂～細砂　径１cm以下の礫をわずかに含む　全体に酸化鉄が強く集積する
13	10YR5/2	灰黄褐色	シルト質極細砂～細砂　径３cm以下の礫を散漫に含む　炭化物を散漫に含む　径１cm以下の地山ブロックを含む
14	2.5Y5/3	黄褐色	シルト質極細砂～細砂　径２cm以下の礫を部分的に含む　径１cm以下の地山ブロックを含む
15	2.5Y6/2	灰黄色	極細砂～細砂　径１cm以下の礫を散漫に含む　東側では径１cm以下の礫を多く含む
16	2.5Y6/3	にぶい黄色	シルト質砂礫　礫は径は３cm以下を主体とし、径10cm超までを含む　マトリックスは淘汰の悪いシルト質砂
17	2.5Y6/1	黄灰色	シルト質極細砂　径２cm以下の礫を含む
18	2.5Y6/1	黄灰色	シルト質砂礫　礫は径５cm以下を主体とする マトリックスは淘汰の悪いシルト質砂
19	2.5Y6/3	にぶい黄色	極細砂～細砂　極粗砂粒をわずかに含む
20	10YR5/6	黄褐色	砂質シルト　径２cm以下の礫を含む
21	2.5Y5/3	黄褐色	シルト質砂礫　礫は径２cm以下が主体 マトリックスは淘汰の悪いシルト質砂
22	2.5Y5/3	黄褐色	砂質シルト　極粗砂粒をわずかに含む
23	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト質極細砂（現代の畦畔盛土）
24	10YR5/3	にぶい黄褐色	シルト質極細砂～細砂　径２cm以下の礫を散漫に含む
25	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質極細砂～細砂　径２cm以下の礫を散漫に含む
26	5Y6/2	灰オリーブ色	礫混砂質シルト　下半に径１cm以下の礫を多く含む
27	10YR5/2	灰黄褐色	砂質シルト　径10cm以下の礫を含む
28	2.5Y5/1	黄灰色	砂礫　礫は径２cm以下を主体とし径10cm超まで含む マトリックスは淘汰の悪い砂
29	2.5Y5/3	黄褐色	砂質シルト　シルト質粗砂～極粗砂をブロック状に含む　遺構埋土
30	2.5Y5/4	黄褐色	シルト質極細砂～細砂（地山）
31	10YR5/2	灰黄褐色	砂質シルト（地山）
32	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質極細砂～細砂
33	2.5Y5/3	黄褐色	砂質シルトと、2.5Y4/2　暗灰黄色シルト質粗砂～極粗砂のブロック状埋土 径10cm以下の礫を部分的に多量に含む　攪乱部

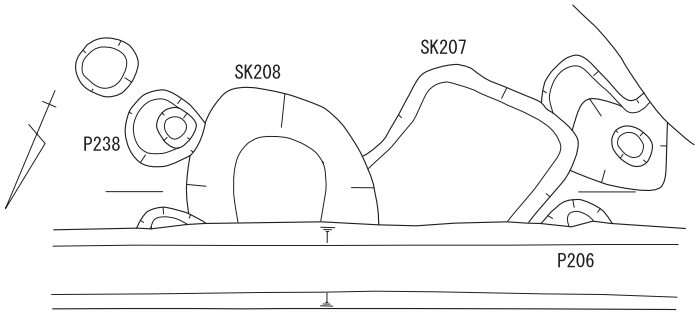


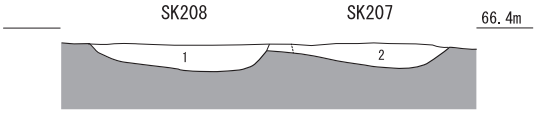
1	2.5Y6/2	灰黄色	砂質シルト　径２cm以下の礫を散漫に含む　局部的に礫がまとまる（地山）
2	2.5Y6/2	灰黄色	シルト質砂礫　礫は径３cm以下　下部ではやや還元色を呈する（地山）
3	7.5GY6/1	緑灰色	シルト質極細砂～細砂（地山）
4	撹乱（サブトレ）		
5	2.5Y4/4	オリーブ褐色	砂礫　礫は径２cm以下主体　酸化鉄が集積する　腐植物・材を含む
6	2.5Y3/2	黒褐色	砂礫　礫は径５cm以下主体だがボルダー級の亜角～亜円礫含む　マトリックスは淘汰の悪い砂 しまりが弱い　腐植物・材を含む
7	7.5GY6/1	緑灰色	砂礫　礫は径３cm以下主体　マトリックスは淘汰の悪い砂
8	10Y5/1	灰色	砂礫　礫は径５cm以下主体だがボルダー級の亜角礫を含む　マトリックスは淘汰の悪い砂
9	7.5GY6/1	緑灰色	砂質シルト　部分的にラミナが見られる
10	7.5GY6/1	緑灰色	砂礫　礫は径３cm以下　マトリックスは淘汰の悪い砂
11	7.5GY6/1	緑灰色	砂礫　礫は径２cm以下　同色の極細砂のレンズをはさむ
12	7.5GY6/1	緑灰色	シルト～砂質シルト　腐植質シルトのラミナをはさむ
13	2.5GY6/1	オリーブ灰色	シルト質砂礫　礫は径２cm以下主体　硬化している
14	2.5Y5/2	暗灰黄色	シルト質砂礫　礫は径３cm以下　マトリックスは砂質シルト 特に上部に礫が集中し、酸化鉄のため硬化している
15		黄褐色	砂礫　ボルダー級含む　腐植質シルトのレンズをはさむ

2区旧河道部深掘断面図



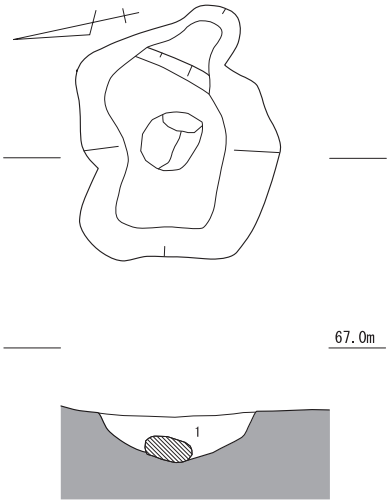
掘立柱建物跡平面図・断面図





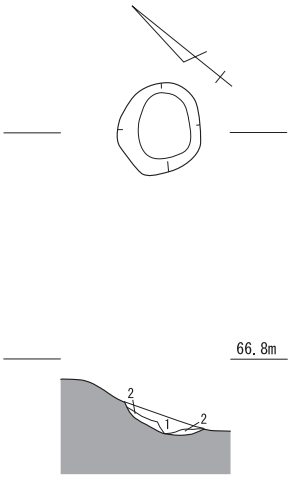
1　2.5Y5/2　暗灰黄色　細砂～粗砂
2　2.5Y5/2　暗灰黄色　細砂～粗砂　ややシルト質をおびる

SK226



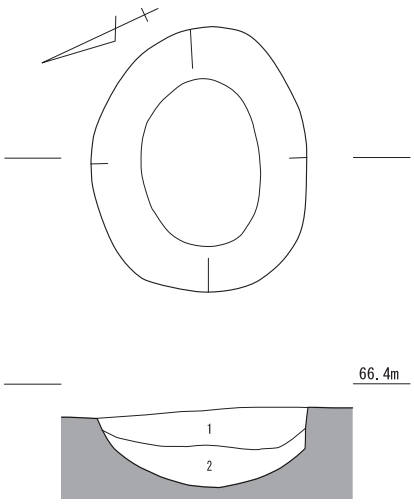
1　10YR5/1　褐灰色　シルト質極細砂
粗砂粒を含む

SK227



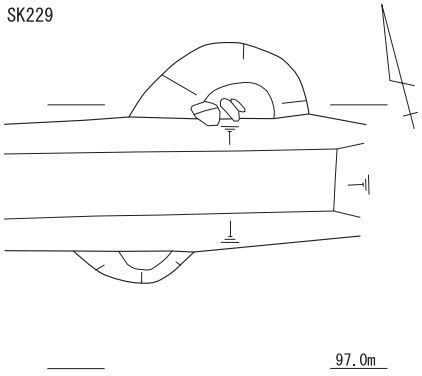
1　10YR4/2　灰黄褐色　シルト質極細砂～細砂
焼土片・炭化物を含む
2　2.5Y5/6　黄褐色　シルト質極細砂
地山が被熱によって変色した
可能性がある

SK228

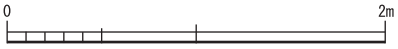


1　2.5Y6/2　灰黄色　極細砂
2　2.5Y5/1　黄灰色　シルト質極細砂

SK229

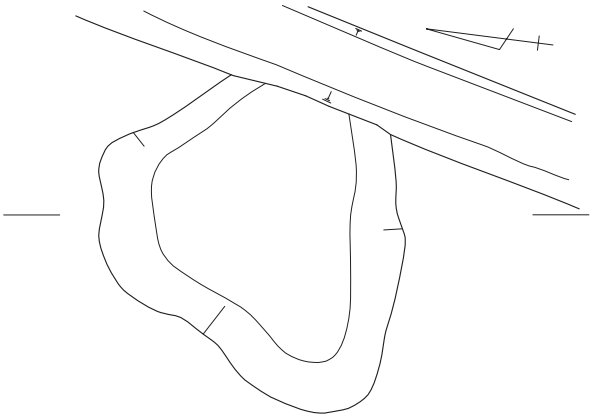


1　10YR5/1　褐灰色　細砂～粗砂
2　2.5Y5/2　暗灰黄色　細礫　径５㎜以下の礫層
3　10YR5/2　灰黄褐色　シルト

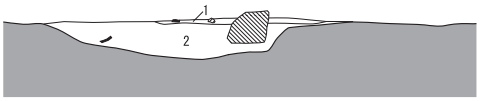


遺構平面図・断面図（1）　SK207・208・226・227・228・229

SX210



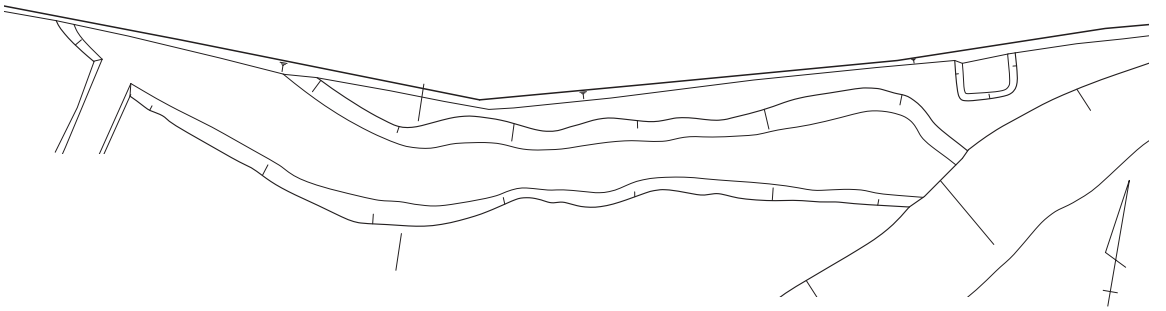
66.9m



1　2.5Y4/1　灰黄色　シルト質極細砂　径５cm以下の礫を含む　炭化物・焼土片を含む
2　2.5Y5/3　黄褐色　シルト質極細砂～細砂

0　1m

SD222



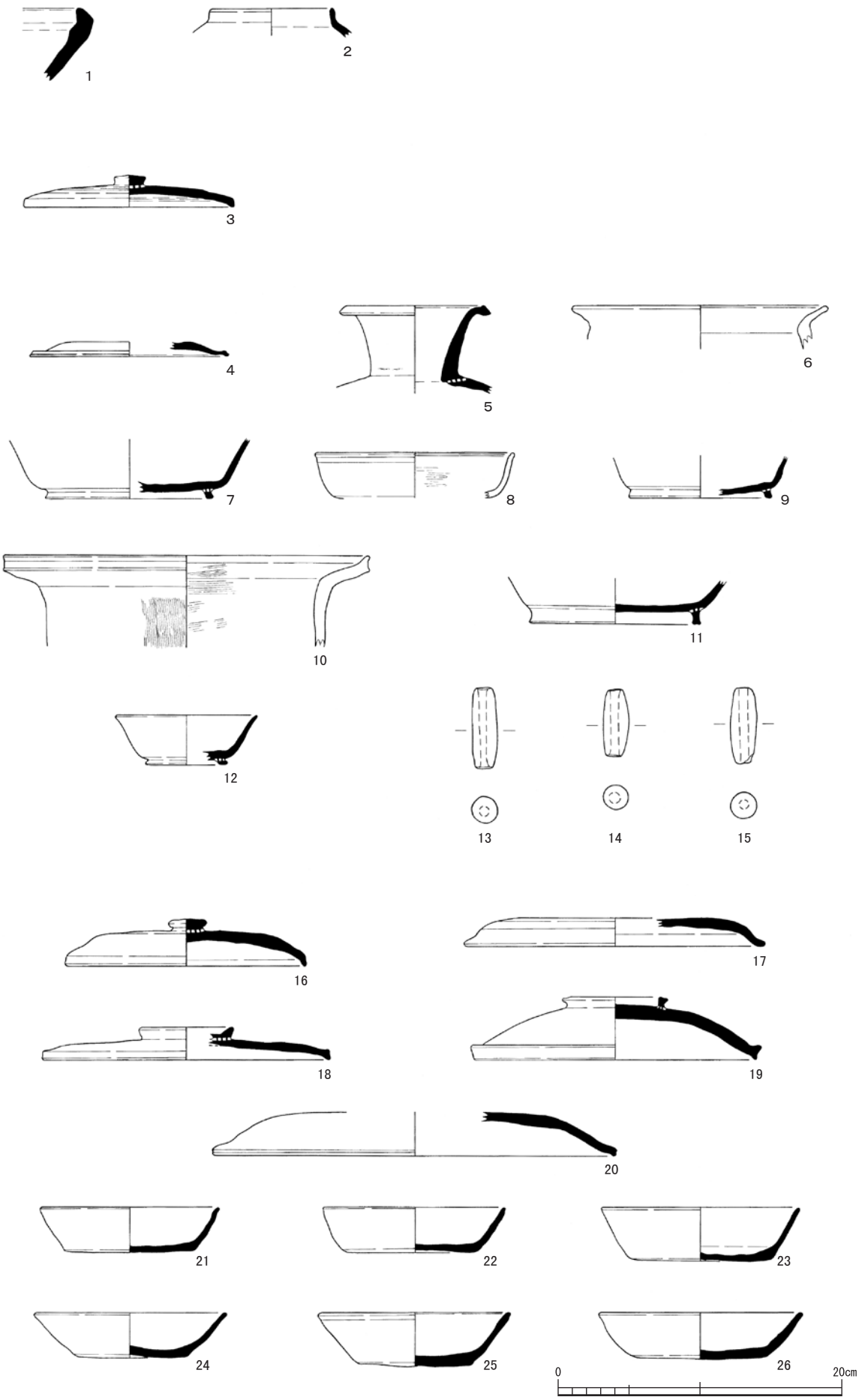
0　2m

67.2m

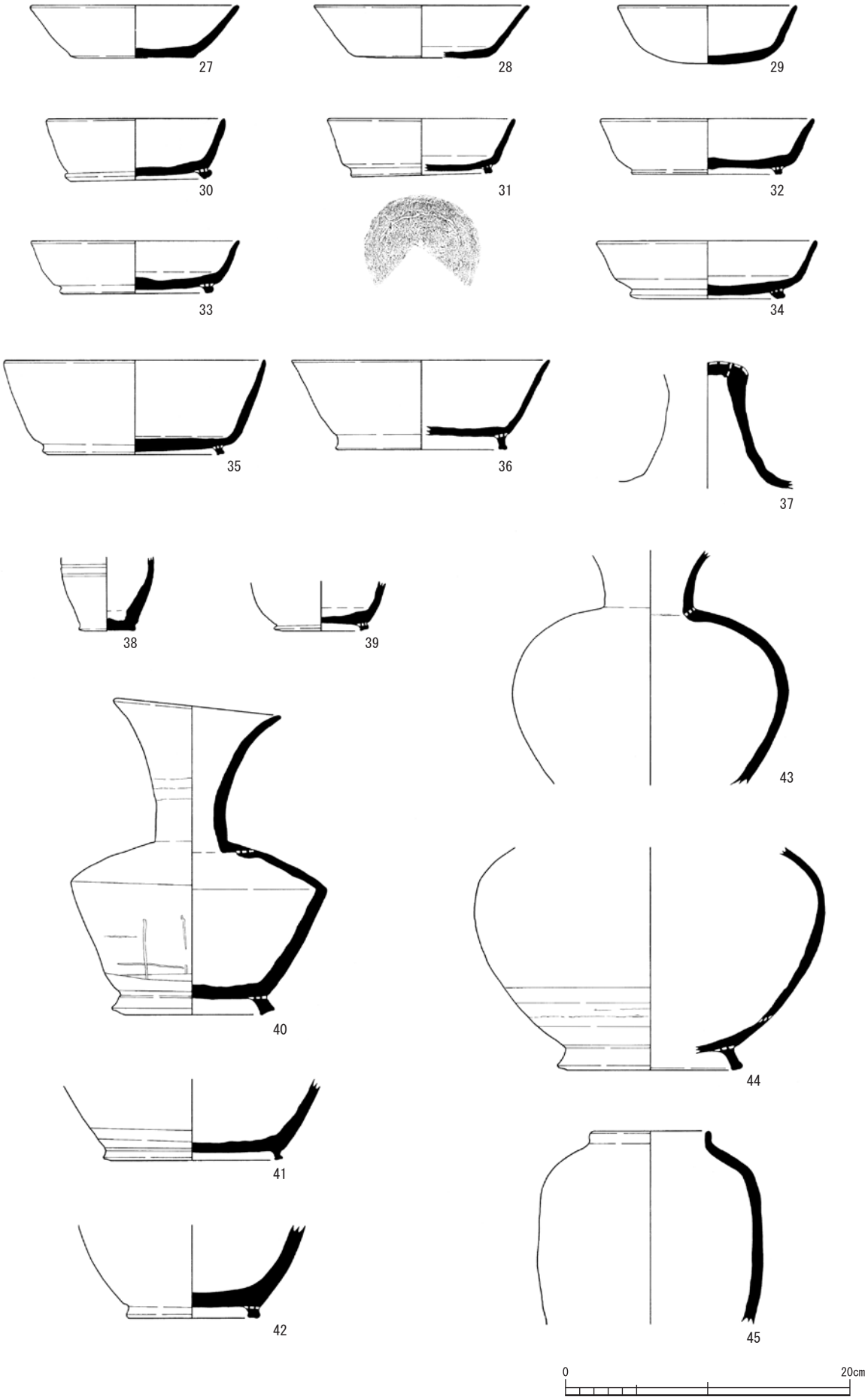
1　2.5Y5/1　黄灰色　細砂～粗砂　径２cm以下の礫を含む

0　1m

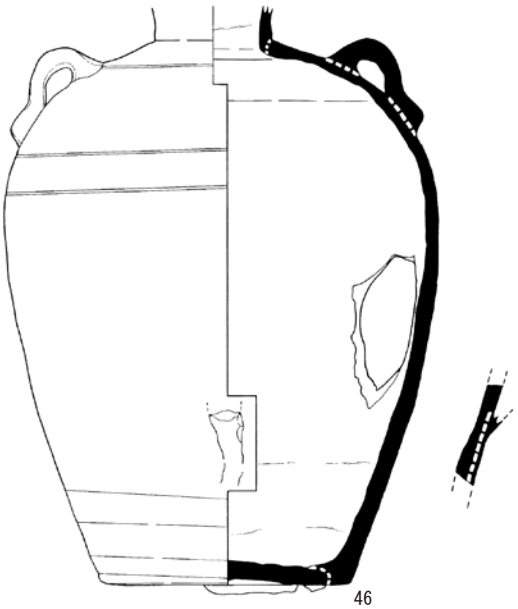
遺構平面図・断面図(2)　SX210・ SD222

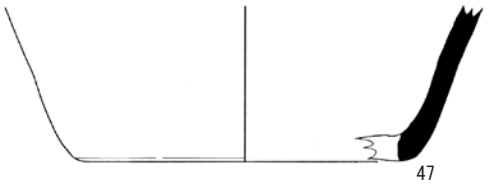


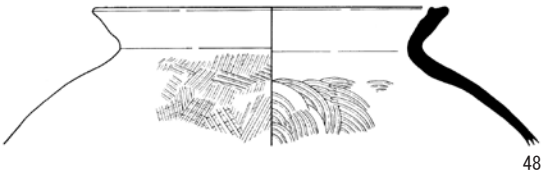
出土遺物（土器1　遺構・旧河道出土）

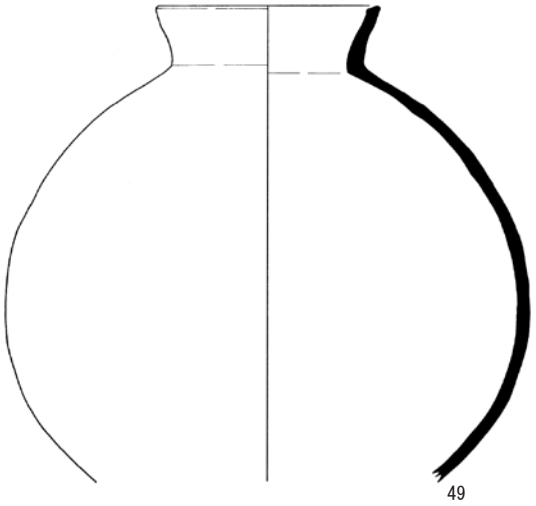


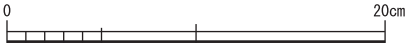
出土遺物（土器2　旧河道出土）



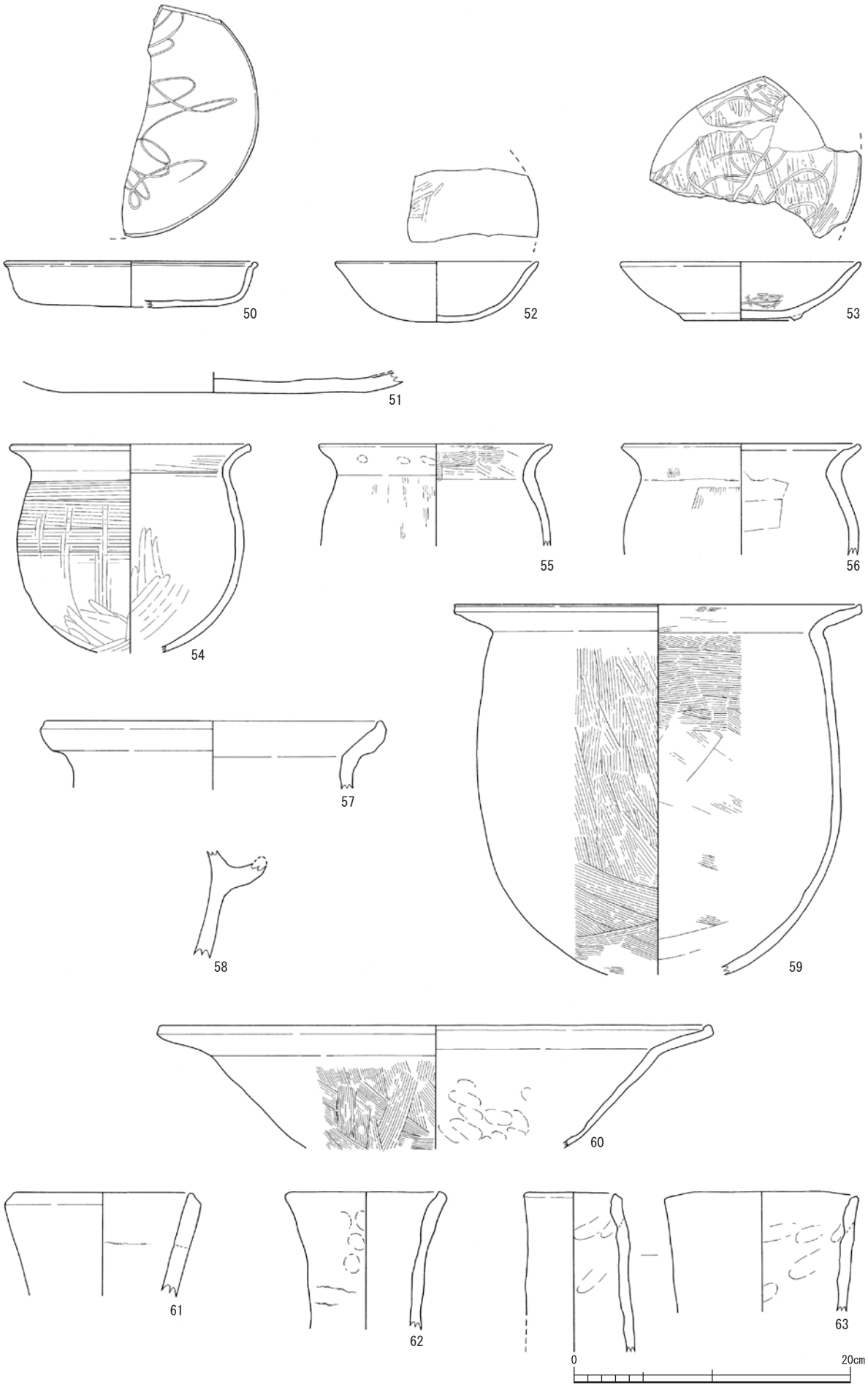




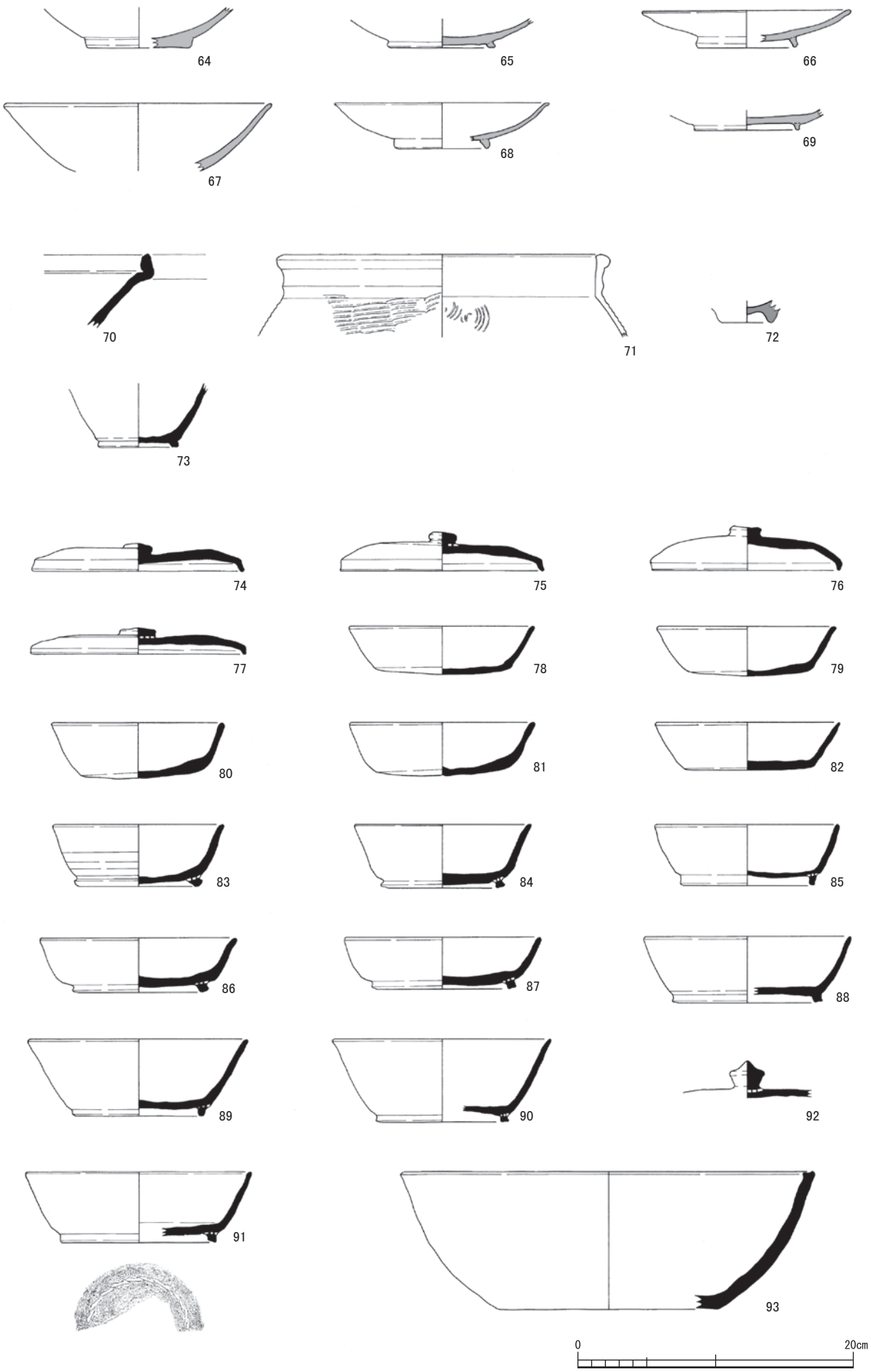




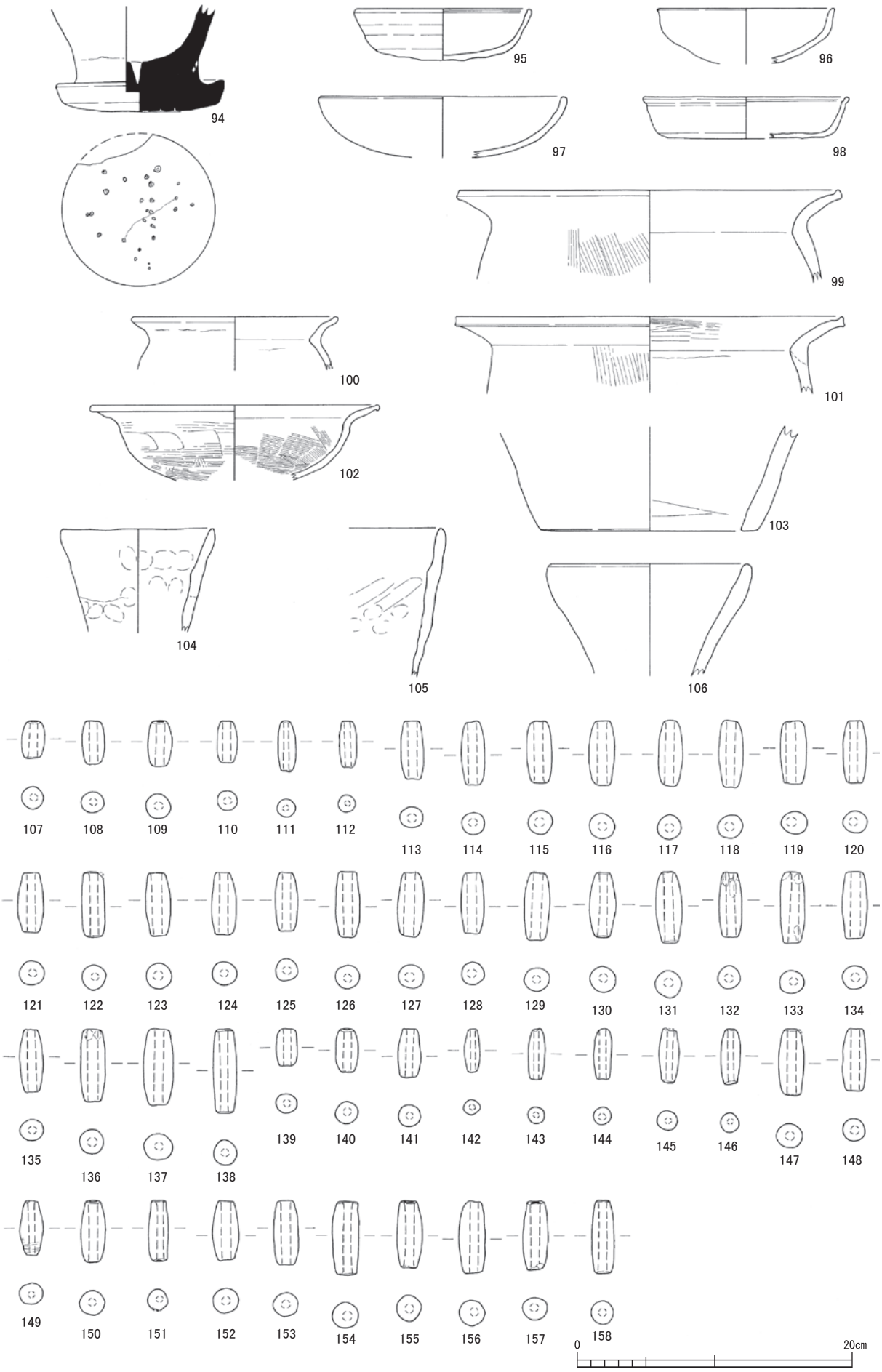
出土遺物（土器3　旧河道出土）



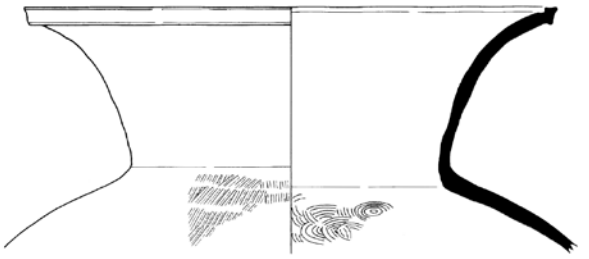
出土遺物（土器4　旧河道出土）



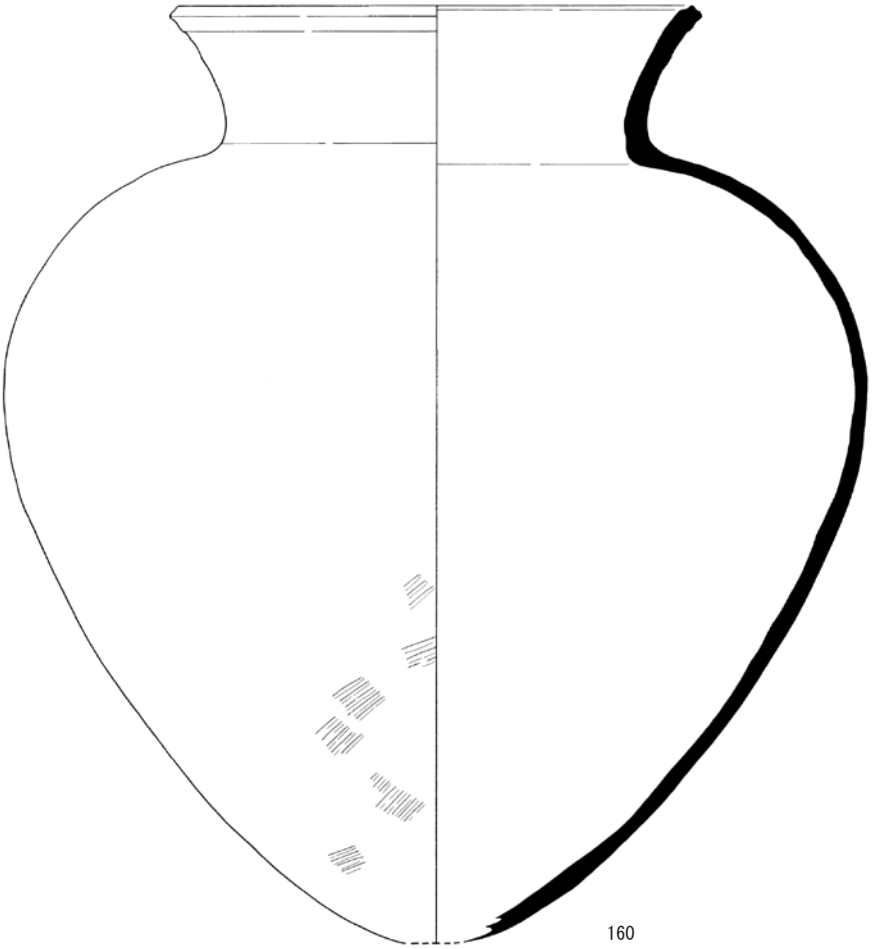
出土遺物(土器5　旧河道・包含層出土)



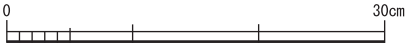
出土遺物（土器6　包含層出土）



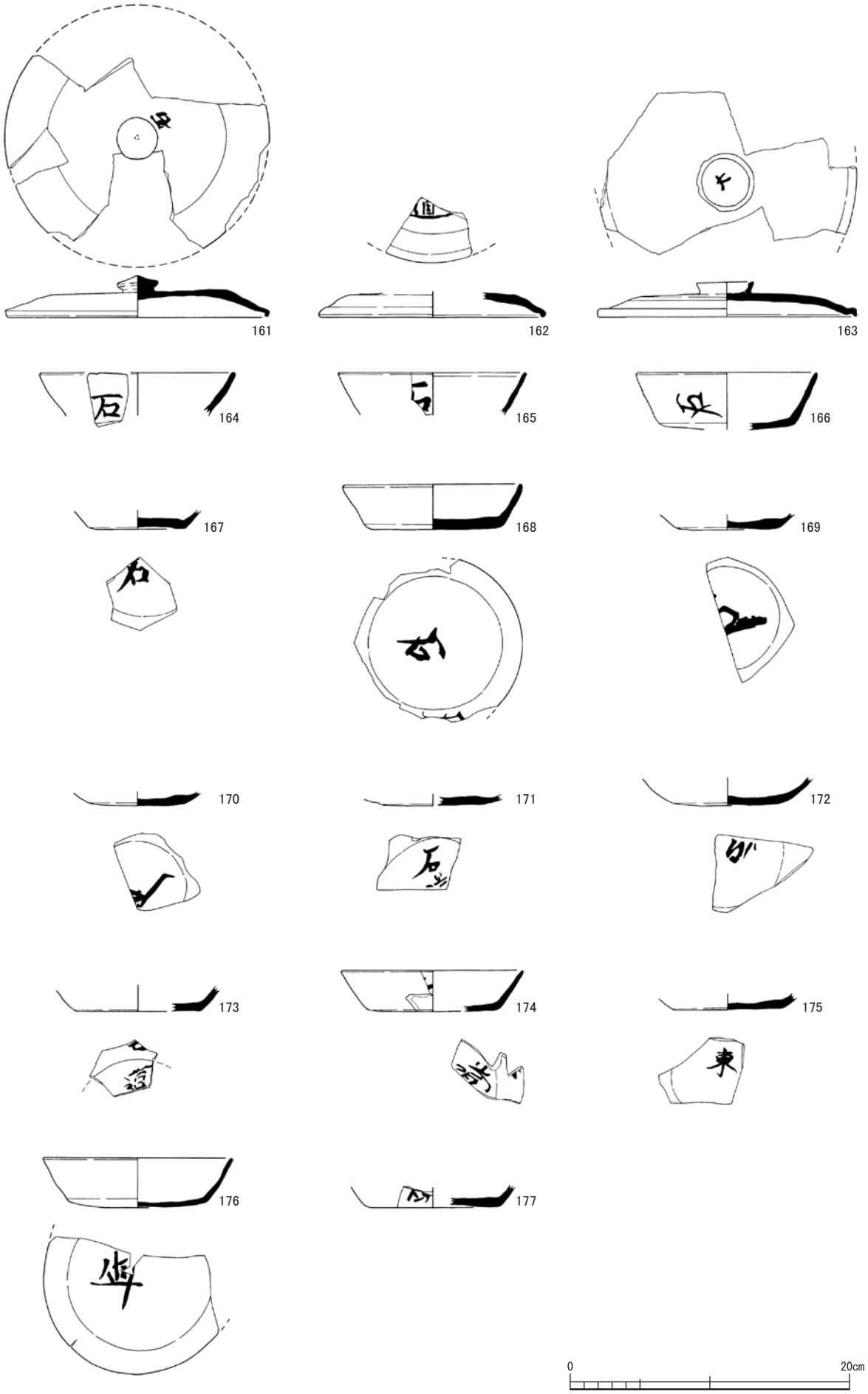
159



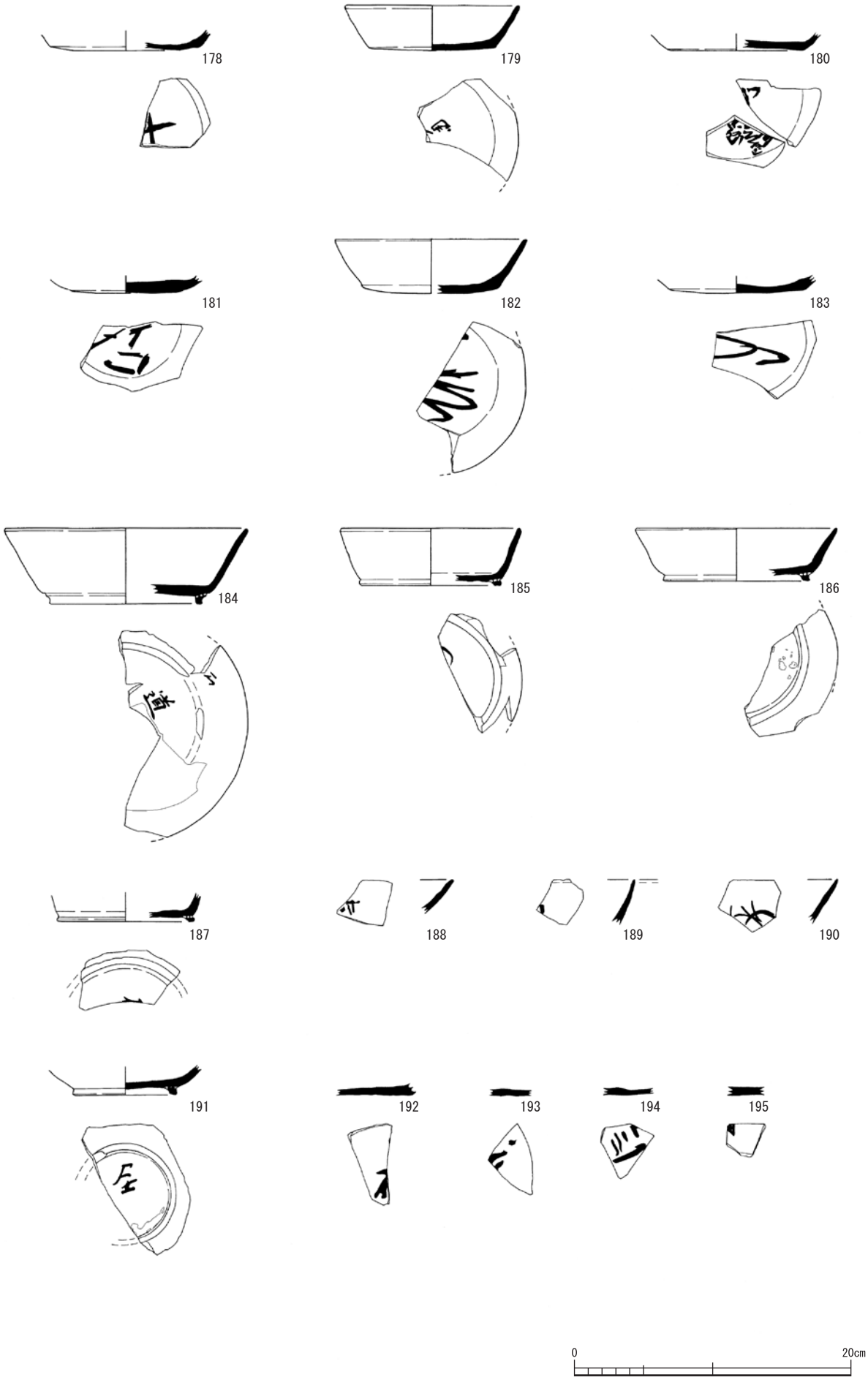
160



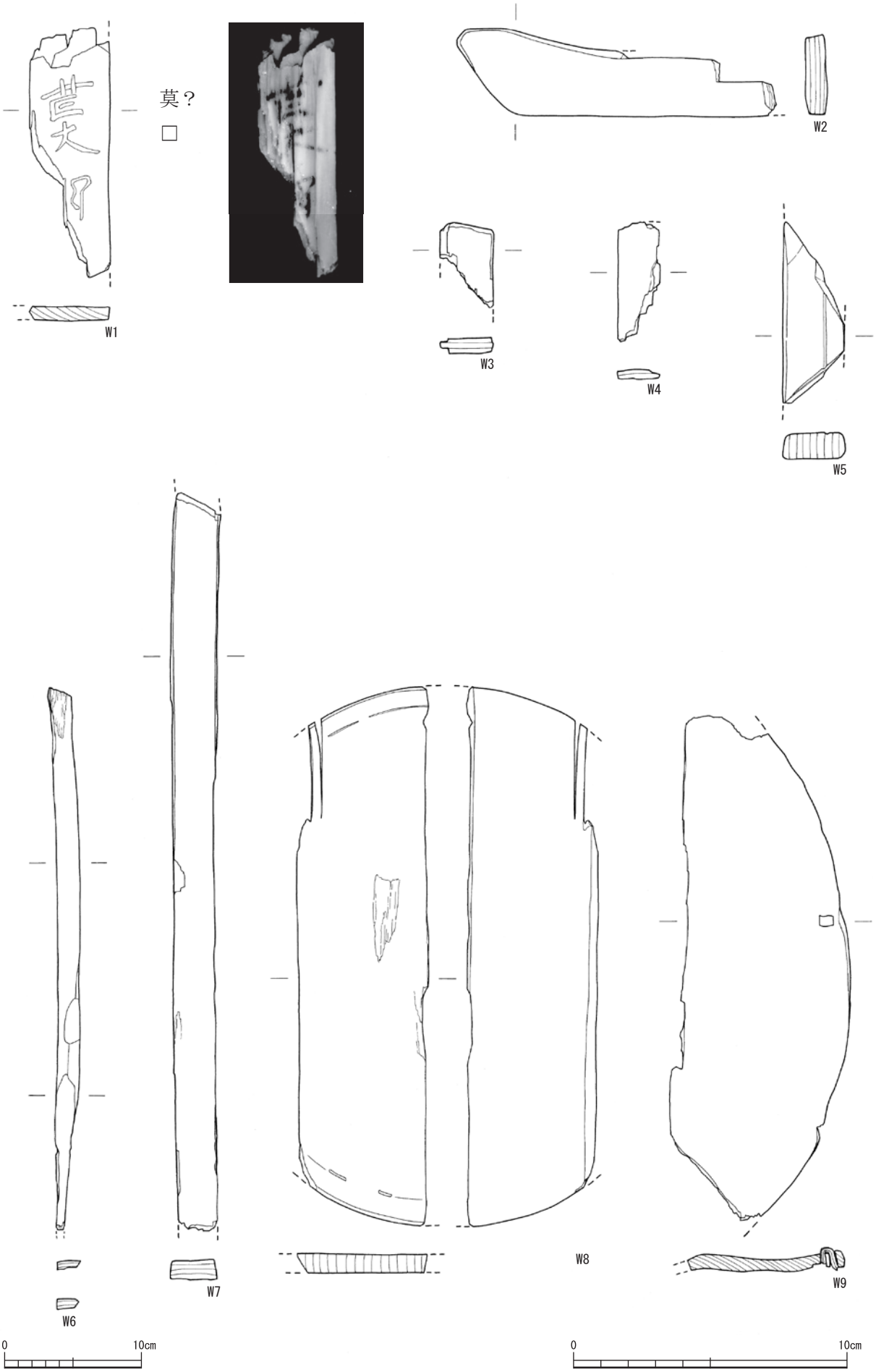
出土遺物（土器7　包含層出土）



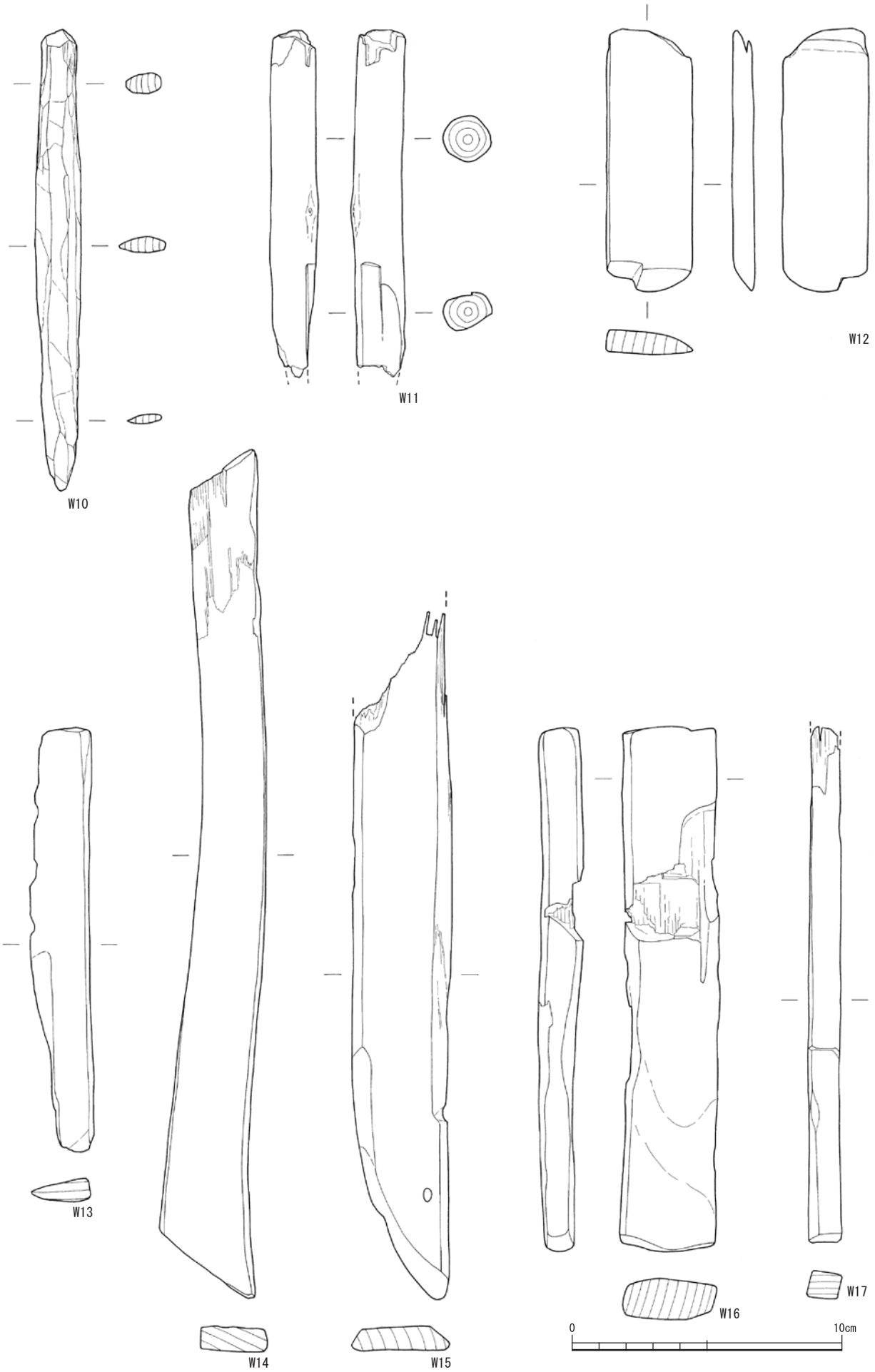
出土遺物（土器8　墨書土器）



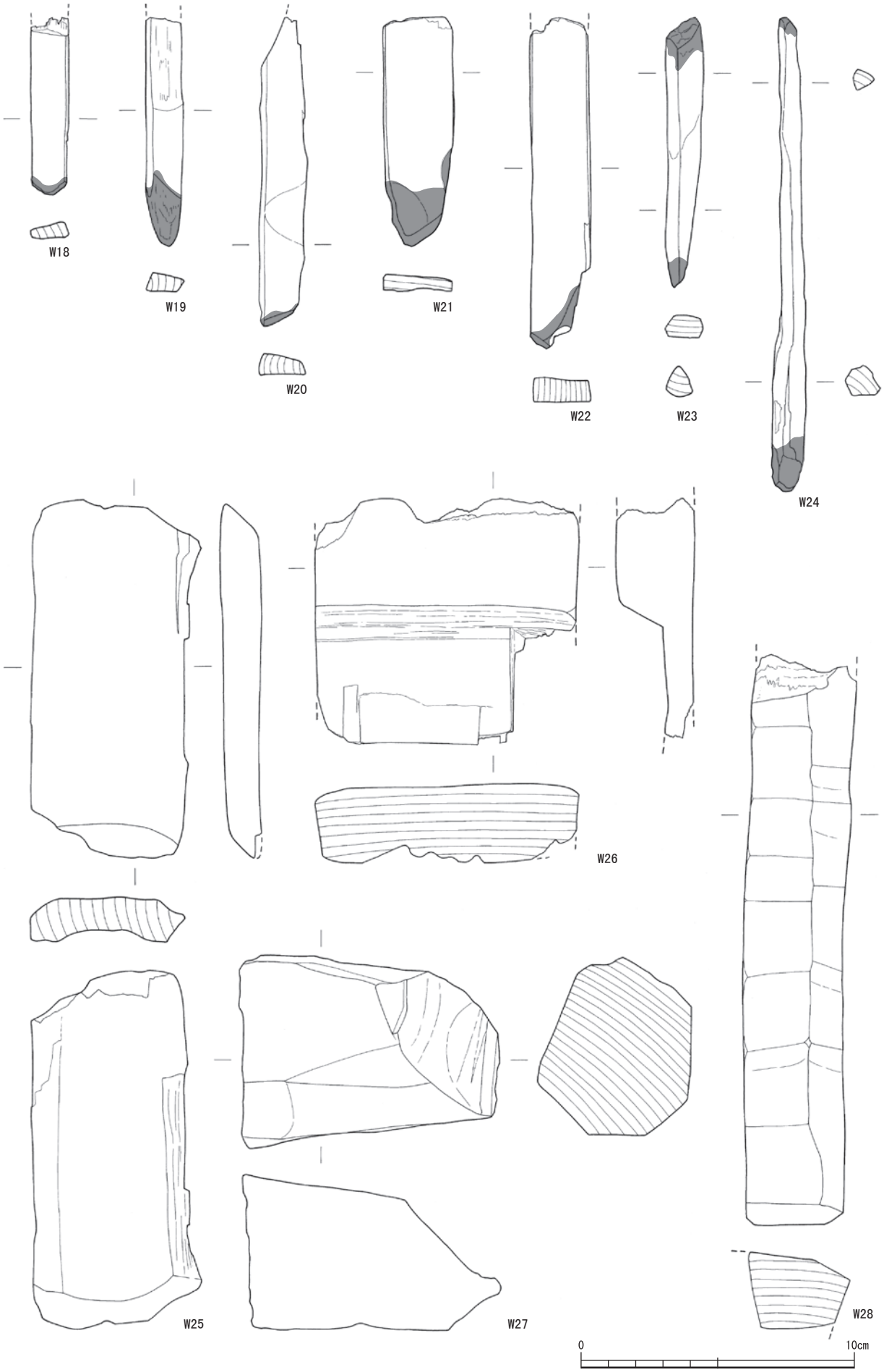
出土遺物（土器9　墨書土器）



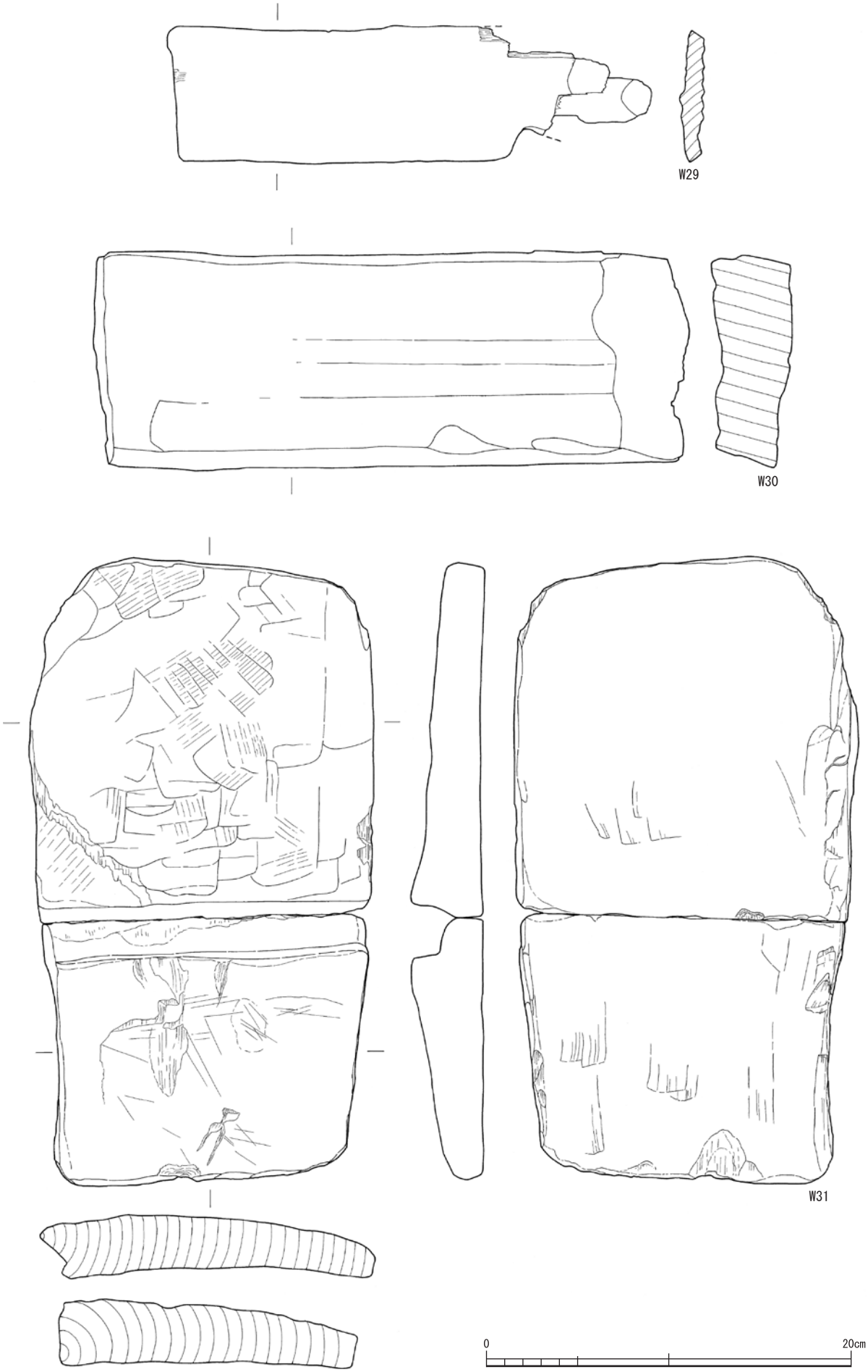
出土遺物（木製品1　旧河道出土）



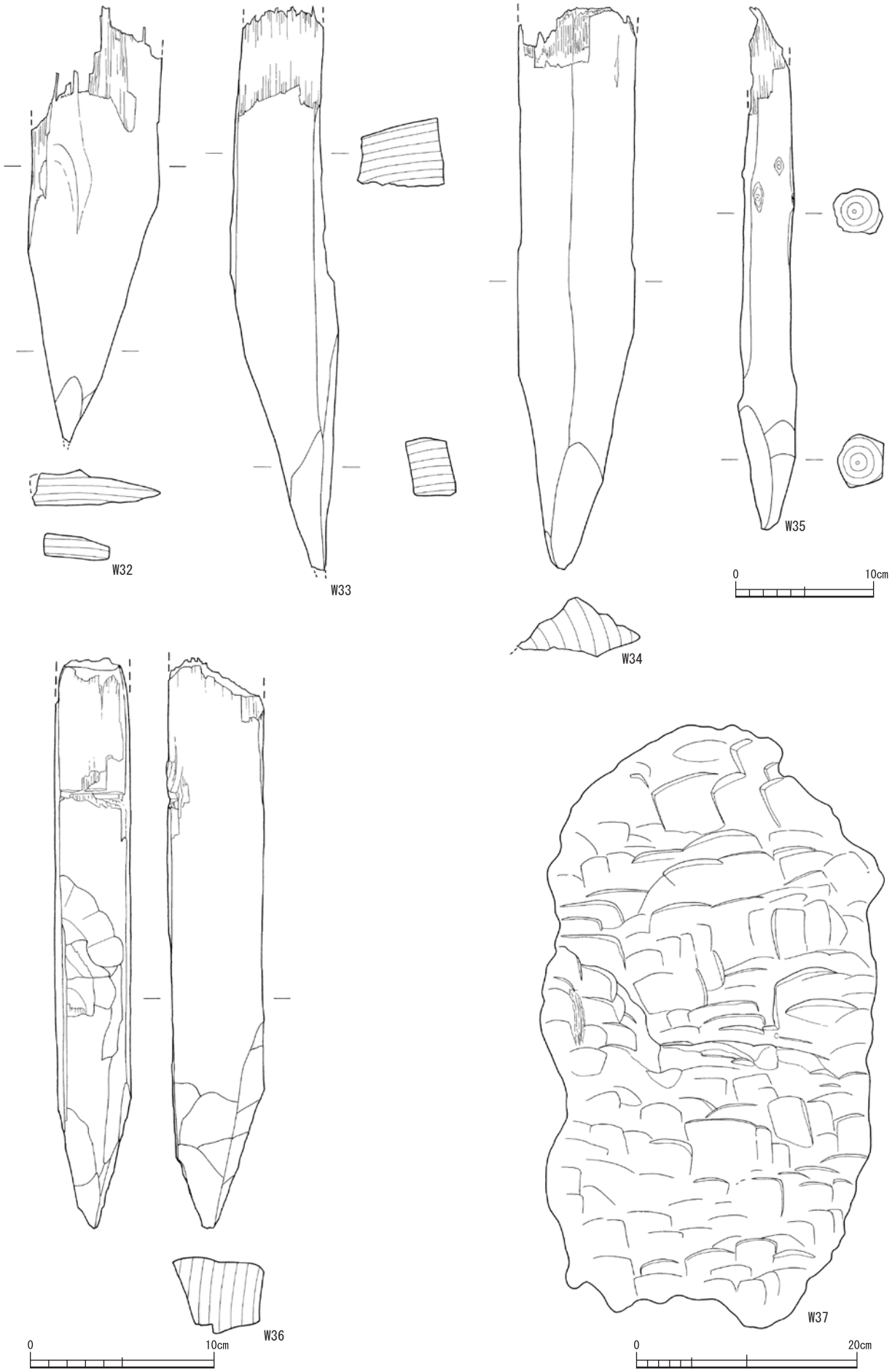
出土遺物（木製品2　旧河道出土）



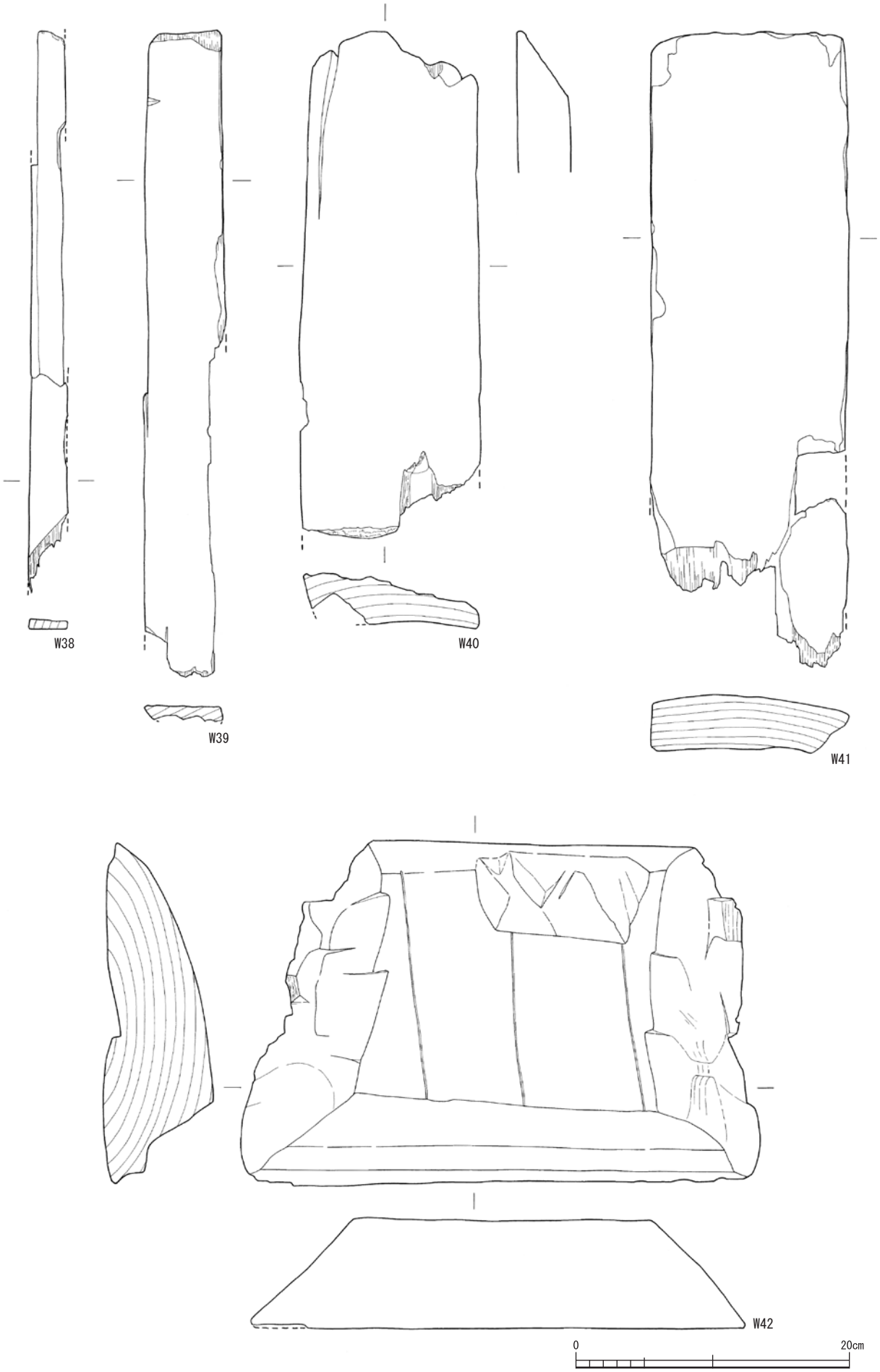
出土遺物（木製品3　旧河道出土）



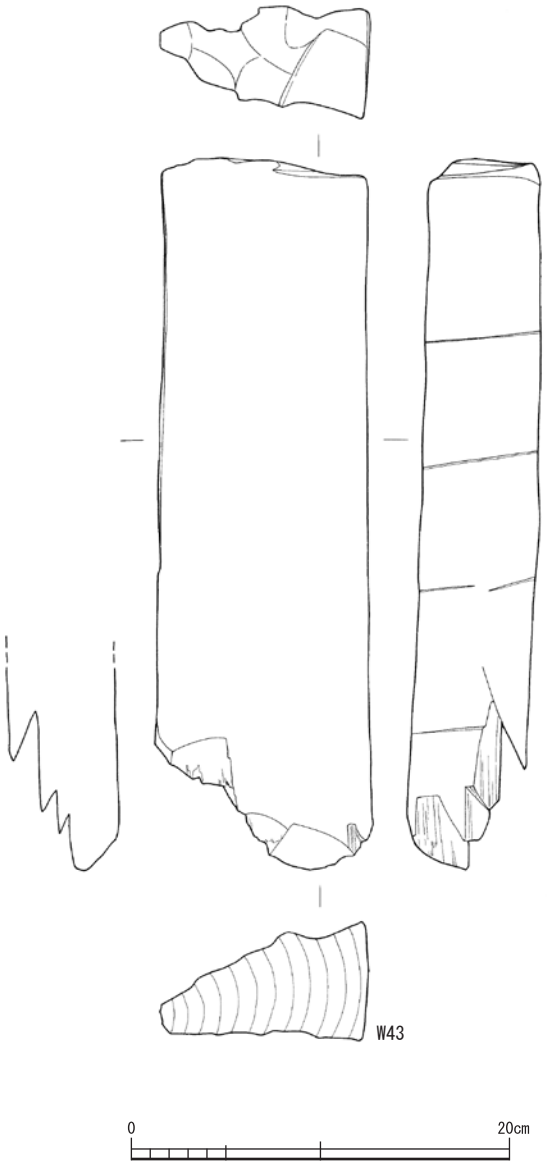
出土遺物（木製品4　旧河道出土）

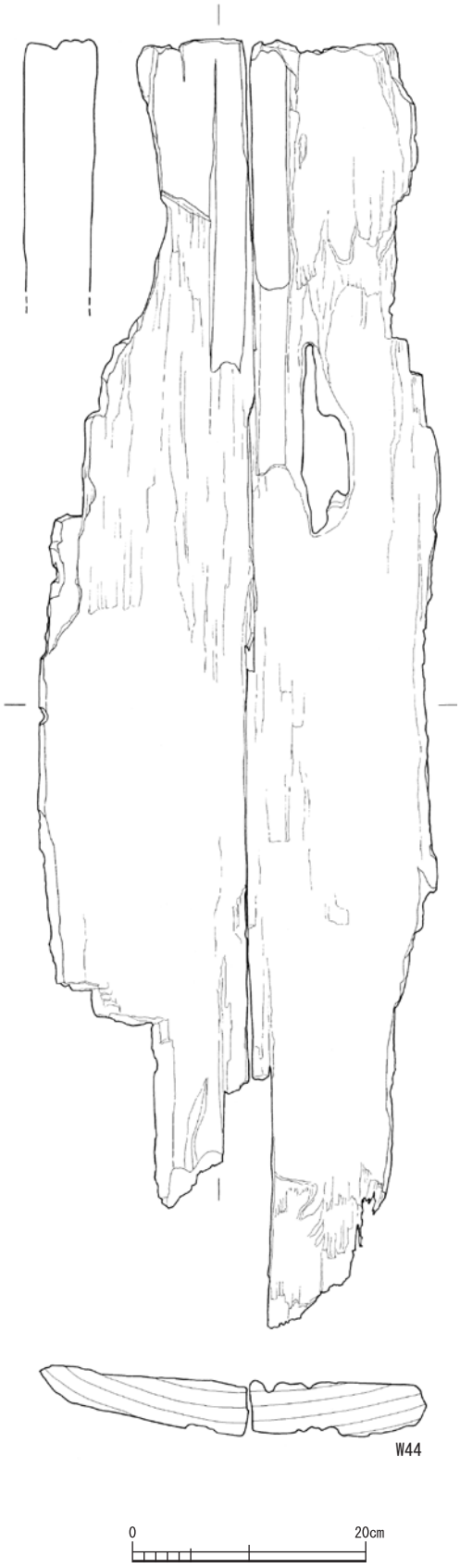


出土遺物（木製品5　旧河道出土）



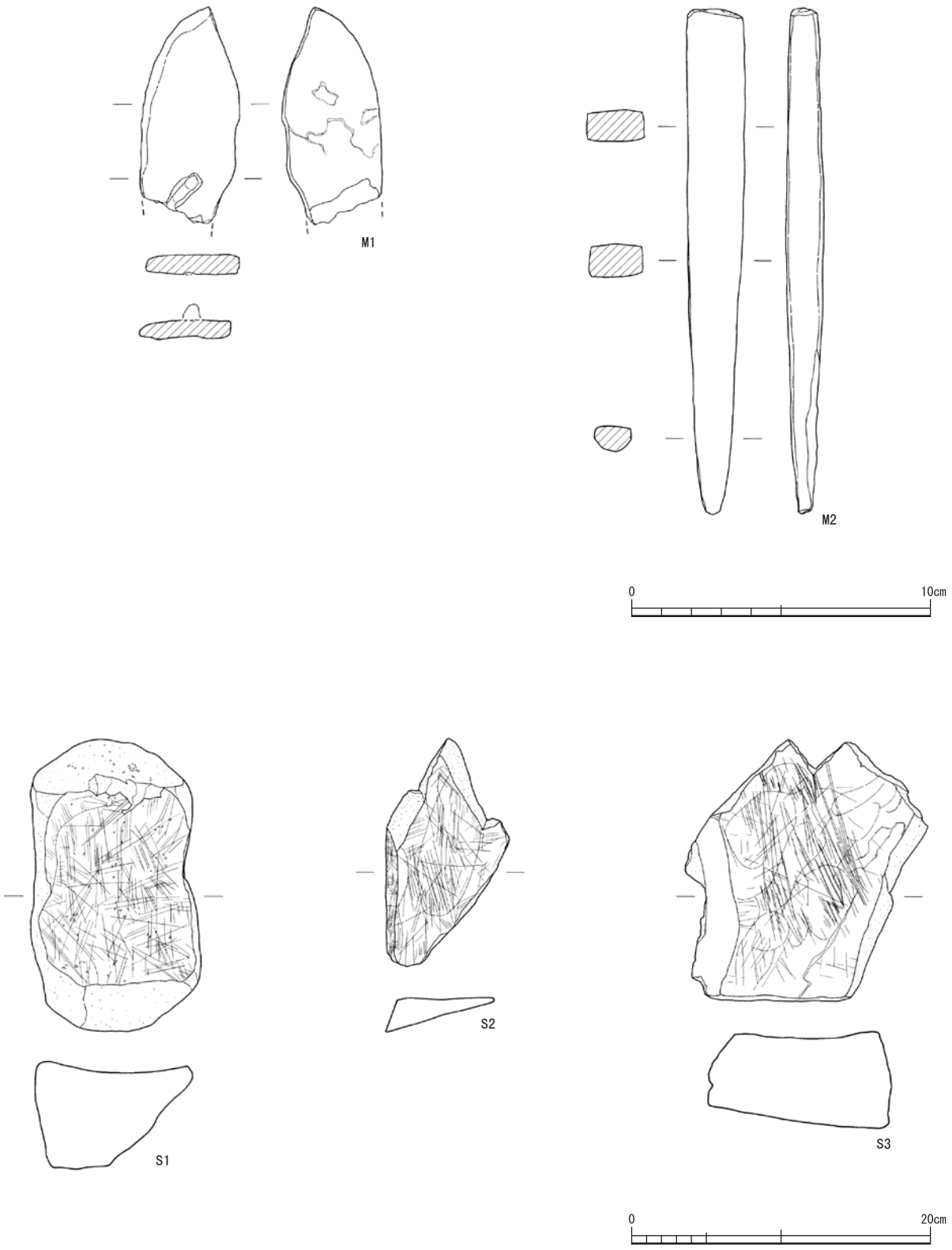
出土遺物（木製品6　旧河道出土）



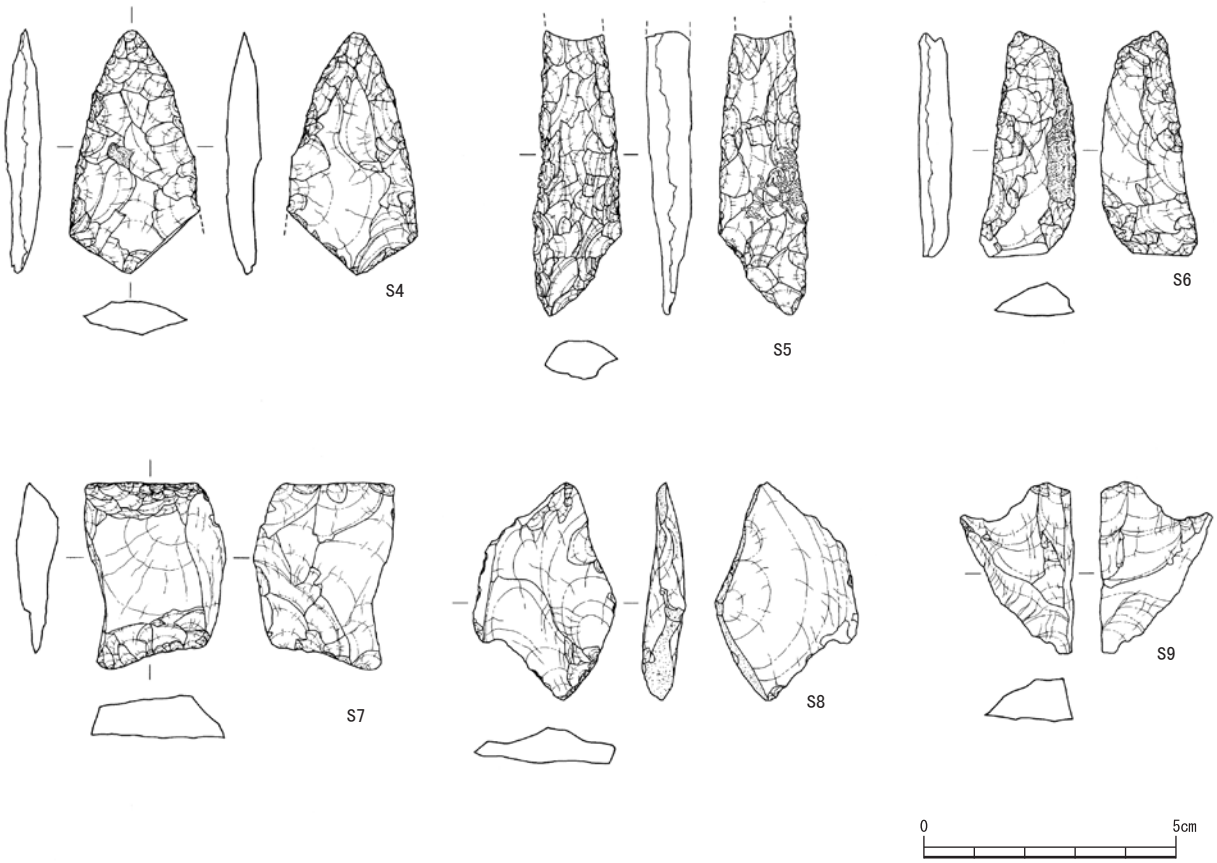


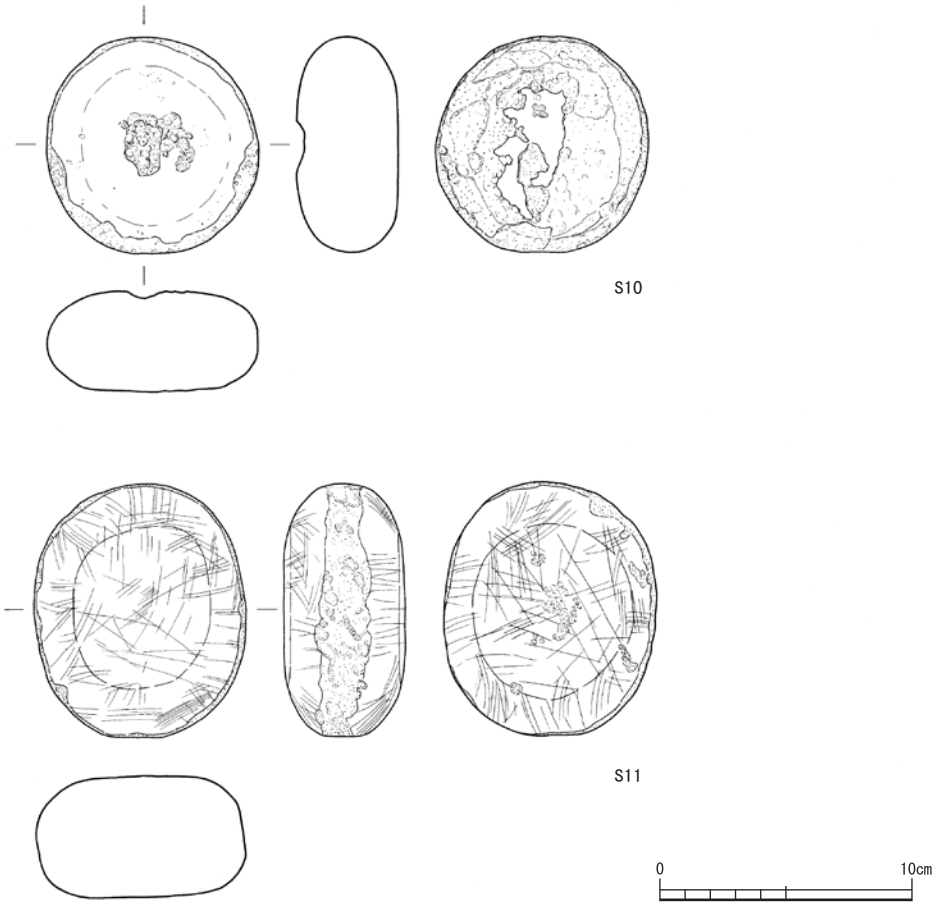
出土遺物（木製品7　旧河道出土）

図版 27



出土遺物（金属器・石製品）





出土遺物（石器）

写　真　図　版

１区全景（東から）

１区全景（東から）

写真図版２
１区

１区全景（西から）

１区SD1（北東から）

１区西壁断面
（東から）

１区谷部付近南壁断面
（北から）

１区谷部付近
（北西から）

１区谷部深堀断面
（南から）

写真図版４
２区

調査区全景（東から）

２区全景（西から）

２区全景（南東から）

２区堀立柱建物跡
（西から）

２区堀立柱建物跡
（北西から）

写真図版６
２区

２区２上段　断面（西から）

２区２中段断面（西から）

２区２下段　断面（西から）

２区中段　旧河道断面（西から）

写真図版８
２区

２区旧河道北壁断面（南から）

２区旧河道北壁断面（南から）

２区旧河道北壁断面（南から）

２区旧河道内の大型材出土状況（南西から）

２区旧河道内の大型材（南から）

２区旧河道内大型材加工面（南から）

２区東壁断面（西から）

２区南壁断面（北から）

写真図版 12
２区

２区旧河道深堀断面（南西から）

２区旧河道深堀断面（南西から）

２区　上段包含層鉄器出土状況

２区　包含層遺物出土状況

２区　旧河道内板材出土状況

２区　旧河道内遺物出土状況

２区　旧河道内遺物出土状況

２区　旧河道内遺物出土状況

２区　旧河道内遺物出土状況

写真図版 14
２区

２区　旧河道内遺物出土状況

２区　旧河道内遺物出土状況

２区　旧河道内遺物出土状況

２区　旧河道内遺物出土状況

２区SK208断面
（北から）

２区SK207断面
（北から）

２区SD222断面
（西から）

写真図版 16
２区

２区SX210検出状況
（西から）

２区SX210断面
（西から）

２区SK226断面
（西から）

２区SK227断面
（南西から）

２区SK228断面
（西から）

２区SK229断面
（南西から）

SP211　断面（北から）

SP212　断面（北から）

SP214　断面（北から）

SP216　断面（北から）

SP218　断面（南から）

SP219　断面（西から）

SP232　断面（西から）

SP233　断面（西から）

石道遺跡東方丘陵への里道

石道遺跡東方丘陵の峠付近

写真図版 20
調査風景

機械掘削（２区）

遺構検出作業（１区）

人力掘削（２区）

撮影準備（２区）

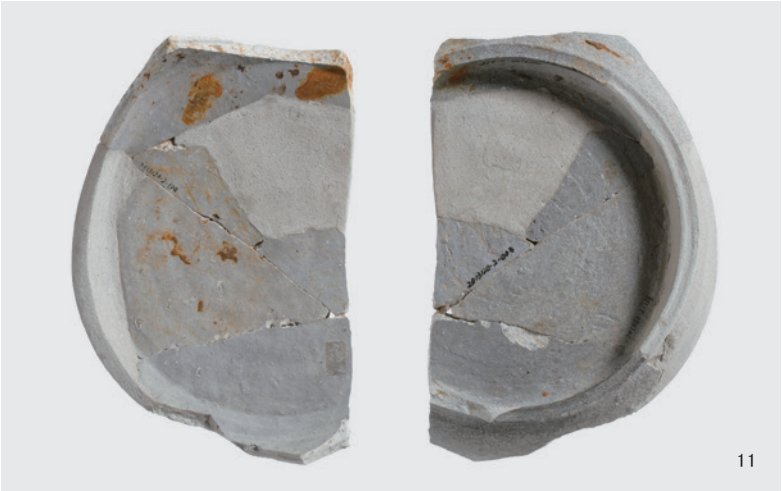
図化作業（２区）

現地説明会

遺構調査（２区）

確認調査

１区遺構



２区遺構

出土遺物（１）確認調査　１区・２区遺構出土土器

出土遺物（２）　２区遺構・旧河道出土土器

16

19

18

21

22

23

24

25

26

27

28

出土遺物（３）　２区遺構・旧河道出土土器

29

30

31

32

33

34

35

36

37

出土遺物（４）　２区遺構・旧河道出土土器

38

39

43

40

44

41

42

45

出土遺物（５）　２区遺構・旧河道出土土器

出土遺物（６）　２区遺構出土土器

50

55

54

63

59

出土遺物（７）　２区遺構出土土器

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

出土遺物（８）　２区包含層出土土器

84

85

86

87

89

88

90

91

94

92

出土遺物（９）　２区包含層出土土器

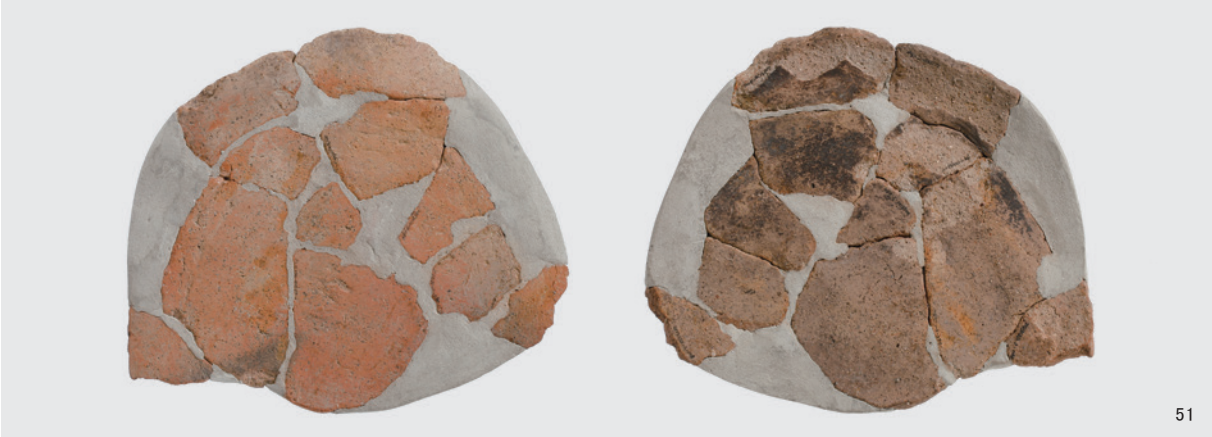
95

98

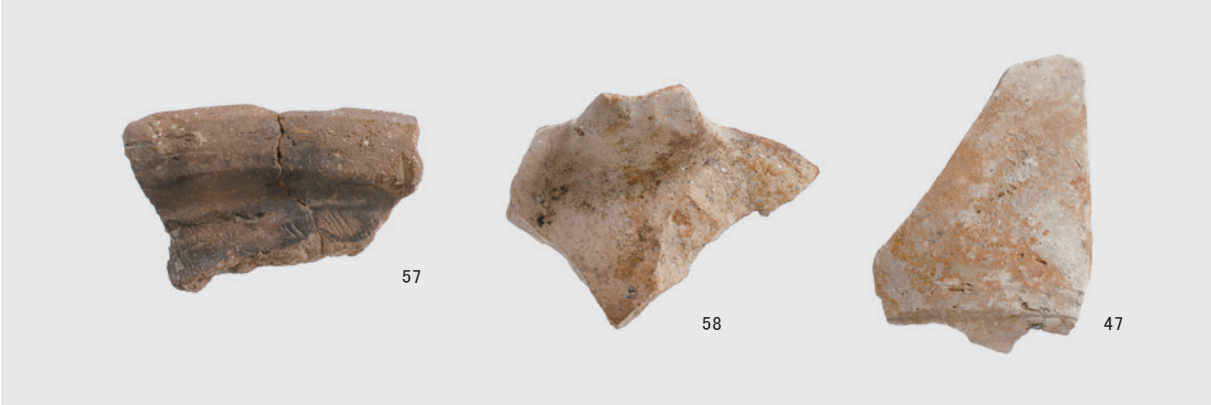
159

160

出土遺物(10)　２区旧河道・包含層出土土器



出土遺物(11)



出土遺物(12)　２区緑釉陶器・灰釉陶器・中世の土器・陶磁器

97

96

99

101

102

60

100

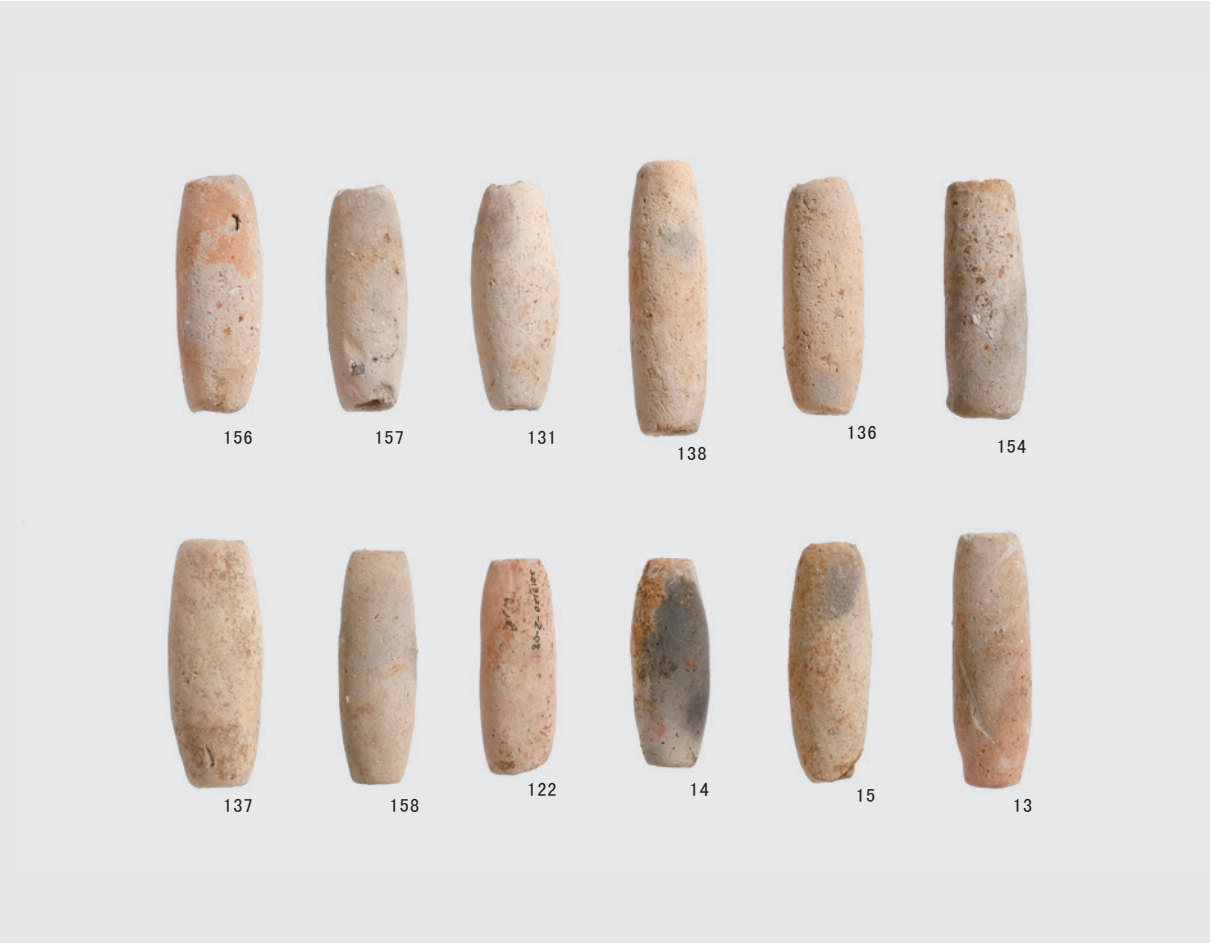
56

93

103

出土遺物(13)

出土遺物(14)　製塩土器


156
157
131
138
136
154
137
158
122
14
15
13

120
124
126
129
117
116
127
114
118
148
147

出土遺物(15)　土錘(1)

115
153
123
119
121
132
130
128
134
135
113
151
150
155

139
107
142
144
111
110
112
141
108
140
143
145
109
149
146
125
152
133

出土遺物(16)　土錘(２)

161

162

164

165

167

169

163

166

170

出土遺物(17)　墨書土器(１)

168

172

175

171

173

174

176

177

178

出土遺物(18)　墨書土器(２)

179

180

181

182

184

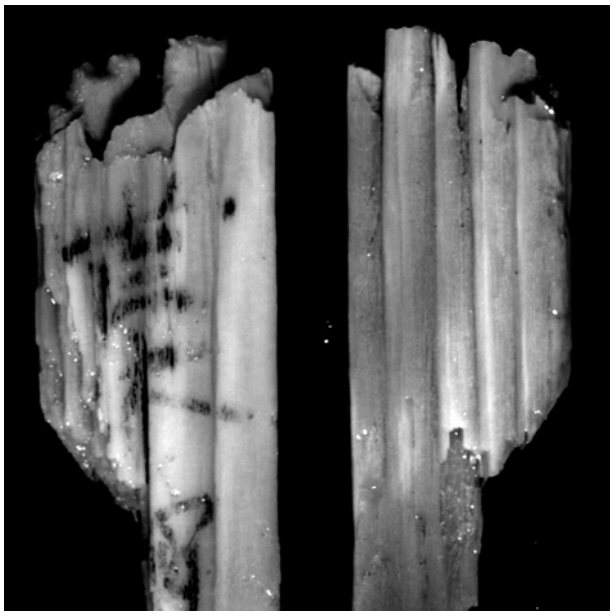
183

185

189

出土遺物(19)　墨書土器(３)

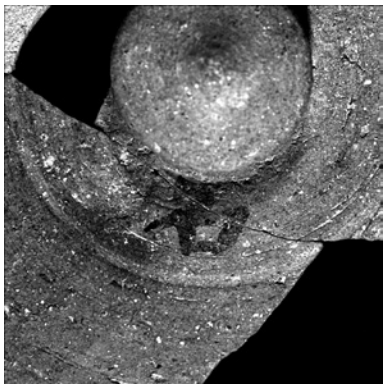
出土遺物(20)　墨書土器(4)

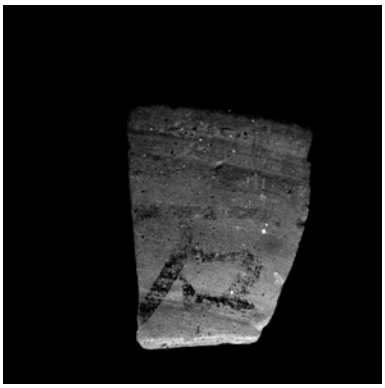


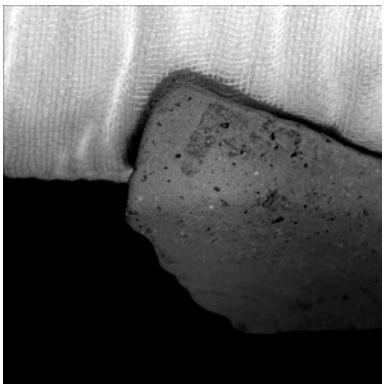
木簡・墨書土器　文字赤外線写真
独立行政法人奈良文化財研究所撮影

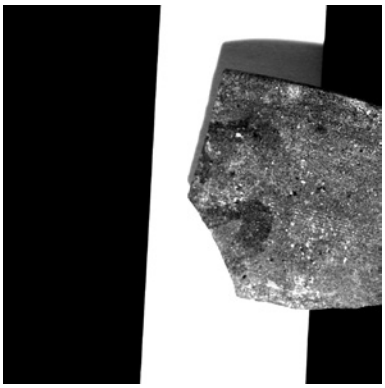
木簡(表裏)

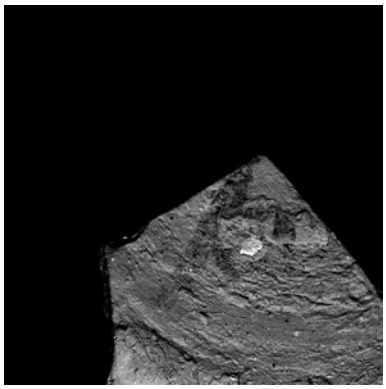
墨書土器　「石」・「石？」

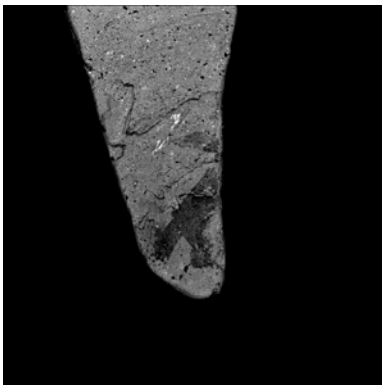


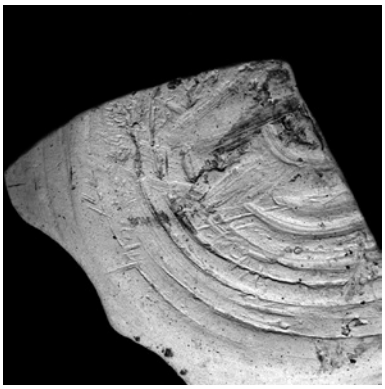








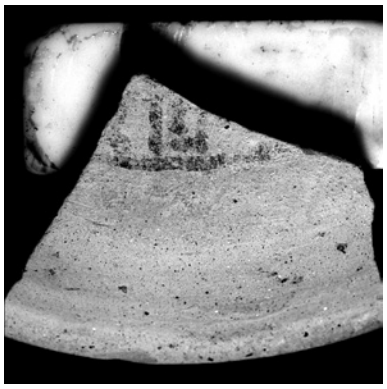


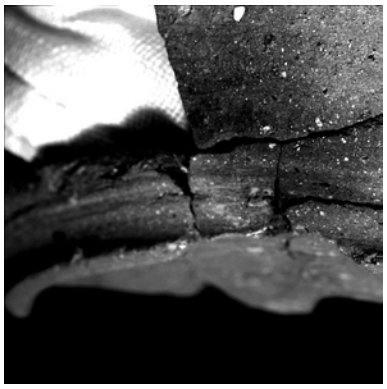


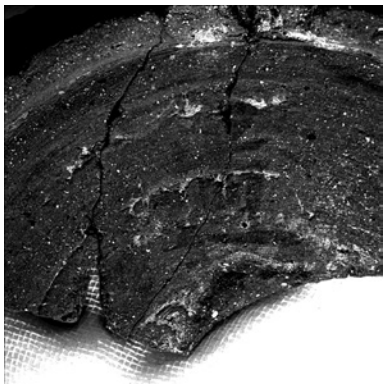
出土遺物(21)　墨書土器(赤外線写真)

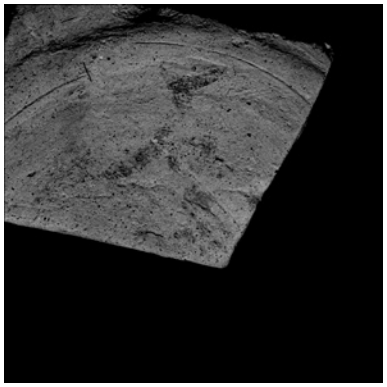
墨書土器　「石？」

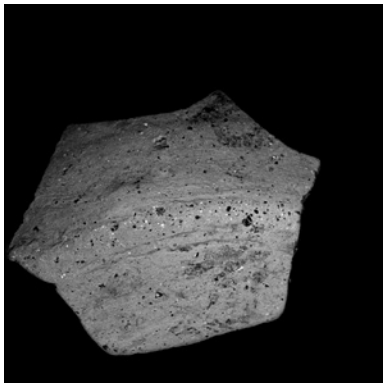
墨書土器　「道」・「石道」



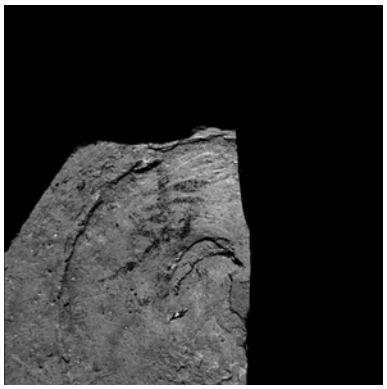




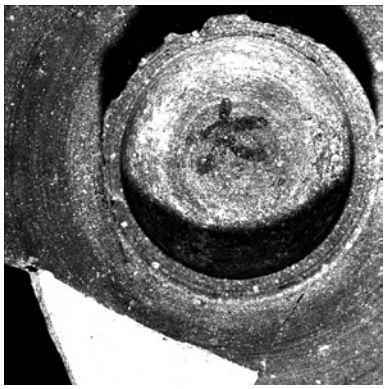




墨書土器　「東」



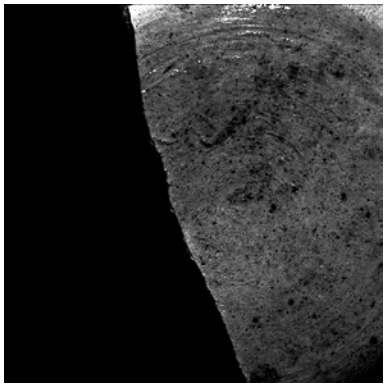
「大」

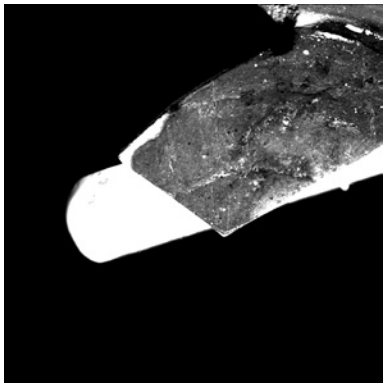


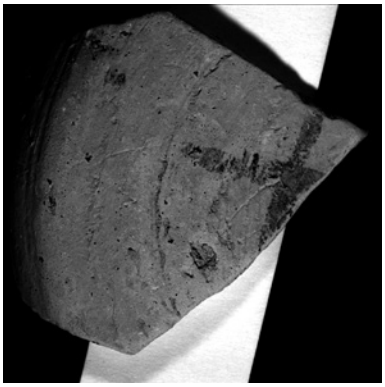
「佐×」

出土遺物(22)　墨書土器(赤外線写真)

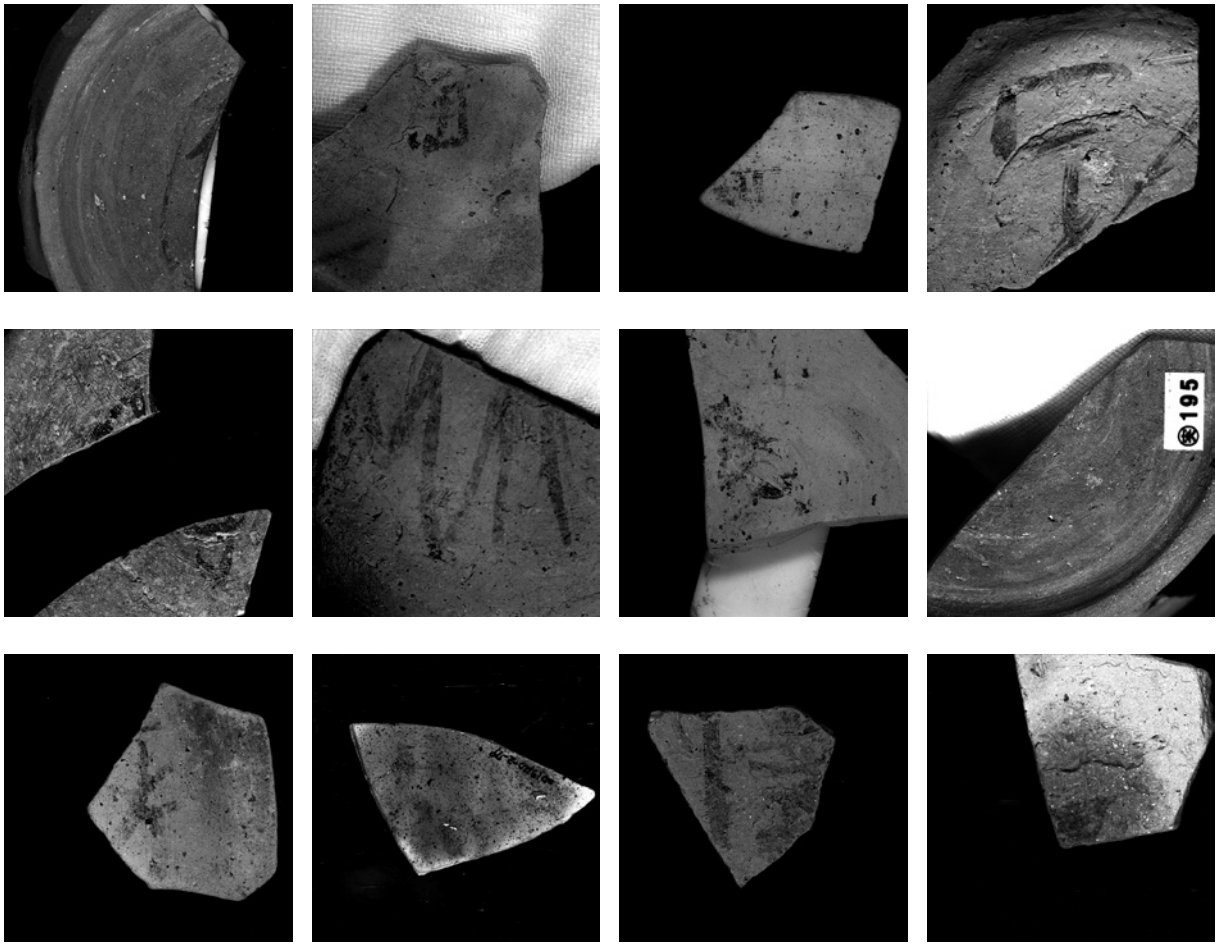
墨書土器　「屋？(戸主？)」　「？」　「＋（×)」







その他



出土遺物(23)　墨書土器(赤外線写真)

出土遺物(24)　木製品(1)

出土遺物(25)　木製品(２)

出土遺物(26)　木製品(３)

出土遺物(27)　木製品(4)

出土遺物(28)　木製品(5)

出土遺物(29)　木製品(６)

出土遺物(30)　石器(1)

出土遺物(31)　石器・石製品

出土遺物(32)　金属器・縄文土器

兵庫県文化財調査報告　第 496 冊

川西市

石道才谷・堂ノ後遺跡

― 新名神高速道路 箕面～神戸間（兵庫県域）建設に伴う発掘調査報告書 ―

平成 30（2018）年 1 月 25 日　発行

編集：公益財団法人兵庫県まちづくり技術センター埋蔵文化財調査部
〒 675-0142　兵庫県加古郡播磨町大中1丁目1番1号
（兵庫県立考古博物館内）
発行：兵庫県教育委員会
〒 650-8567　兵庫県神戸市中央区下山手通5丁目 10 番1号

印刷：株式会社クレアチオ
〒 650-0041　兵庫県神戸市中央区新港町８－２
新港貿易会館4階 32